316.8
To 45

②

0006965000

0006965-000

316. 8－To45ウ

民族と植民

徳沢竜潭・著

聖紀書房

昭和18

ABG

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第67条の規定に基づき、平成12年3月2
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

316.8
To45

民族と植民

徳澤龍潭著

まへがき

983
16

なぜに、この本を書くやうになつたのであらうか。この本を書きつらねようとする時、さう尋ねかへさねばならぬ氣がする。その直接の原因としては、たまたま「日本語」と申す月刊雜誌に「民族力の發動について」と言ふ小論を、昭和十七年の五月・六月・八月號誌上に發表したことがある。それが、とりもつ緣となつて「民族と植民」と題するもとに、私の考へを、まとめてくれよとの申出を喜んで引受けることになつた。「民族力の發動について」の論文は、大東亞戰爭のひき起る前に書きあげたものであつたが、そこに書きつらねたやうに、大日本の躍動が、今日ではまざまざと目の前に現はれて、よこたはつてゐることは心地よい。この姿にだれか感激をしないところのものがあらうか。この感激を紀念として、この仕事をまとめあげたいのが、やまやまの心もちなのである。

思へば、今から十一年前、雪のふりしきる一月十六日の朝。なかなか渡航の許しをしてくれぬアメリカ領事に、父と共に押しかけていつたことがあつた。父は風邪氣で、父獨特の「まわた」の首卷をむすびつけて、田舍の暮しを包みかくすこともなく、アメリカ領事館にやつてきてくれたのである。父のなごやかな中にも、心强い「かけあひ」に依つて、難なく許しを得ることができたのである。舟は其の日の正午にでるといふので、それから急いで、船切符を買ひもとめるやら、水上警察の許しを得たりして、舟にかけつけたときは、今、まさに出發をしかけようとする眞際であつた。たゞ、荷物だけをはふりこんで、舟のでてゆく姿を見送つたことであつた。身內のものたちは、荷物の「でたち」をしに見送りに來たやうなものだと笑つたことであつた。しかし大洋を航行する舟を、身近にして覺えた心地は、なにか淚ぐましいものであつた。この心地は永久に忘れることのできないものである。雪のふりしきる彼方に、黑い感じのする大洋航路の舟は、白い波を跡にのこしながら、でていつたことである。港のさまは、なんとなく、さびしいやうな印象であつたが「でたち」は、悲しくも、勇ましい心地がした。そのごろは尙ほ、青春に富んだ年ごろのことであつたので、感激は一層深かいものであつた。

その日の夜、京都を汽車でたつて、明日橫濱を出發する舟に乘りこむことにしたもの。京都は私が生れでたところであり、こゝで幼時をすごし、長じて再び大學にまなんだ土地である。「おとうさん」「おかあさん」に別れを申したときに、父は、にこやかに笑つてくれたものである。いかにも心地よく、なんの心名殘もない、あかるい笑ひでこたへて吳れた。この姿が一生涯、見おさ

めの姿なのである。この世に生命を受けて、一日として、離れぬことを知らなかつた次男坊が、永遠に父親から別れた一瞬間である。さすがに、年の若さにも依つたことであらうが、汽車の座席に身を置いたときは、あたゝかい涙がぬぐへどもぬぐへども、こみあげてきた。これ程、「わかれ」の痛さの切實なることを、ひとへに知つたことはない。あくる朝、東海道にあふぎみたのは朝日に照りはえる富士の山であつた。その神々しさ、おごそかさに、今さら驚いたことであつた。その日の午後は海上の人となり、海のかなたから、小さく消えゆく迄、富士の山に名殘りを惜しんだことである。この日から、「民族と植民」について、身をもつてあたつていつたことである。この舟に乗りあはせた人々は、「はだか一貫」で海外にはたらく人々であつた。波にゆられながら、これらの人々から耳にする話しは、まさしく、かはつた生活なのであつた。今から思へば、浦島太郎が玉手箱をひらいて、煙と共に年よりになつていつてしまつたやうな「ものがたり」であり、かゝる生活がおとづれたのである。

この本を書かうとするときに、これらの出來ごとを思ひださずに筆をすゝめることはできないと思ふ。この「まへことば」につゞいて、もつと具體的なものを詳しく書きつらね、その間に展げられていつた「民族と植民」の考へを、すち立てることにしたい。こゝには、五つの段階があつたやうな心地がする。その第一は、アメリカ國に打ち寄せていつた、われらが同胞のいさましき生活と努力に直接觸れたこと。第二はドイツに於て、味はつたせつぱつまつた「民族と植民」の意識。第三は歸途、インドに於て目擊したる有さま。第四は、歸國後、臺灣を見學したこと。第五は大東亞戰爭の勃發である。これらの五つの「できごと」は、取り離すことのできない連環をなして、今日までの考へをなさしめるに至つた動機である。歸國後、東京に出づる機會を得てすでに二つの仕事を世に送りうるに至つた。すなはち、「日本語と日本精神」（ダイヤモンド社發行）及び「言葉なるもの」（朝倉書店發行豫定）とである。そして、こゝに、第三として、「民族と植民」なるものに筆を起すに至つたのであるが、一寸、第三の仕事は「はたけちがひ」のやうな感じを與へることかも知れないが、この三つの仕事の底にながれてゐる「かんがへ」は、「ひとすぢ」なるものの展開なのであつて、決して別々のものでないことに言ひ及んでおきたい。第一の仕事では、日本語の絶對的にすぐれてゐることに言ひ及び、第二の仕事に於て、言葉のすぐれてゐることは、行動・生活に依つて裏づけられてゐることを明かにし、この第三の仕事に於て、日本人のなすべき姿をゑがきあげたいとするに至つたのである。これがこの仕事の本心なのである。こゝでは、もつと現實的なものに觸れてくるやうになつたことで、この尊い「つとめ」を、昭和

十八年の良き日にあたり、心から喜ぶものである。明治神宮におまゐりをして、この仕事のうるはしく出來上ることを、ひとへに念じたことである。

昭和十八年二月十一日

とくざわ・りゆうたん筆をすゝめる。

目次

まへがき……………………一
1　こゝろのたかさ……………………一五
2　わがくに……………………二九
3　おきつしま……………………四七
4　むかふぎし……………………九三
5　あまつをとめしま……………………一〇九
6　たゝかへるはらから……………………一三九
7　こはされゆくもの

8 まざりもの……一四三
9 うばはれたもの……一六一
10 さまよへるもの……一九三
11 たちあがるもの……二四九
12 おごれるもの……二七五
13 アジアへかへれ……三〇七
あとがき……三三三

こころのたかさ

十一年まへ、私が乘り合せた舟は、「たいようまる」と申すもので、船客からの話しに依れば、前ヨーロツパ大戰に、ドイツから讓りうけたところのものであると、この船は、ドイツが、かつて移民船に使ふために建造したのだと言ひきかせてくれた。海上の人になると、おもはぬことが身の上にふりかゝつてくる。始めは、ひろい海上に押しだされてゆくのに、ほつとしたやうな心持で、陸地のちいさく消えゆくのを、あかずに眺めてゐることだ。國土への愛執といはうか。いづこの國の移民だとて、こんな瞬間の心地をあぢはつたことに違ひない。あるものは、母國に限りなき涙をそゝいだことだらう。あるものは、あたらしき國土への開拓へと、大きな「のぞみ」をいだいて、でかけたかも知れない。しかし、いつまでも地平線上に富士の山が、箱庭のごとき美しさをたゝへて、よこたはつてゐたことは、忘れがたき思ひ出である。うるはしきわが國よ。

こゝで、わが國の成りたちを明かにしておく必要がある。そこに、人類がもとめてやまぬところの、國土生成のもつとも美しき姿がゑがきだされてゐること。この國生みを植民の一番理想的なものと申しあげることは、恐れ多いことながら、いづこの世界の涯といへども、この方式にのつとらなかつたならば、國土のうるはしきものは生れいでぬだらう。云はゞ、大きな輝かしき「のぞみ」と「ねがひ」のないやうな植民は、なにもならないといふこと。たゞ、生活條件に動かされてからの移民といふものは、無意味なものである。かゝる生命的な欲望をみたすために、いままでの植民地經營はなされてきたのが、これまでの世界史である。その點からすると、世界のひろやかな土地は、いまだに「ところ」を得てゐないのである。このとき、わが國が世界に「ところ」をあたへるところに、もつとも正しき「きまり」（秩序）が、とゝのつてくることになるのだ。

植民の仕方のひとつに「でかせぎ」の遣り方があろのは事實である。この方法が、北米の日本人植民の場合にあてはまるかも知れない。そこには、色々の理由が擧げられるかとも思はれる。すなはち日本人には、土地獲得權がゆるされなかつた。そんなところに、土へ向つての親しみをなくしたことである。土へ向つての「したしみ」がゆるされるか、どうかに依つて、人心に及ぼすところの影響は重要である。そんな點に於ても、日本國土は「とほつみおや」が身を以て生みいだされたところの國土である。日本人が、この汚れなき國土に心を安んずることのできる理由がこゝにある。土に愛執のもてぬ民族は、つづまるところ、敗北の民族とならう。日本人が祖先

代々の土地を賣り放すまいとするところには、この高き「こゝろ」の香氣がきよらかに匂ひでてゐる。

商業國民といへば、古代よりそんな方式をとつて、あらはれきたる國家は、殆んどのものがそれである。それらの國々にあつては、いかに利益をもつぱらにすることが出來るかに、一國の存在をさへかけてきてゐる。殆んどの國の隆盛は、商業權の獲得にあづかつてゐたところのやうにさへ思はれる。ことにヨーロツパ・西方アジアの諸國は、東方アジアとの商業權、交通權をにぎりえたものが、一國の隆盛をきたしたものである。この點からして、アジア大陸は、いかに世界史を動かしゆく「おほもと」になつてゐたかに目をとゞめなければならぬことだ。エヂプト・バビロニア・ヘート・ギリシヤ・ローマなどの國々は、すべてアジア大陸との商業、交通路の奪ひあひに依つて、その國の生命をたもつてゐたのである。トルコ・アラビア國の勃興したのも、その獲得にあつたところだし、ひいて文藝復興期を通し、ヨーロツパ諸國が、大々的に世界に通ずる道を奪ひ「さしおさへ」に取りかゝつたのである。これが近代史にまで押しすゝめてきたところの段楷である。こんなところからしても、いまだ國土にむかつての正當なる「みとめ」をして居らないのである。こんな「こゝろもち」は、近代植民をなすうへに於て、重要要素をなしてきたものでらう。すなはち、土地はたゞ利害關係にのみとゞまつたのである。

云はゞ植民が「おかねもうけ」になされてきたこと。かゝる風潮がヨーロツパ諸國から近代文明史のなかにばらまかれていつた。その最も良い適例が、「でかせぎ」である。「おかね」をもうければ、本國へかへつてくるもので、イタリー國民にも、かゝる傾向がみられる。これは、ひとへに、一國の傳統文化をそこなはすものであり、高貴なる「たましひ」を失はしめることになる。わが國に於ては、「でかせぎ」があまり好ましい目を以て見られないところには、かゝる「よりどころ」がある。たとへ「おかね」をもうけてきたところにしても、本國の傳統をうしなつてしまつてゐては、世の中から「つまはじき」されることになる。どこまでも、日本國民のなす植民經營の中には、しつかりとした心の高さが、さししめされて居らねばならないこと。

わが國に於ても問題となつたところの「だいにせい」のことなどは、同じくこの問題に係はつてゐる。ことにアメリカ生れは、「おかね」が世の中を動かしてゐるやうに育てられてきたからである。アメリカ國土の生活は、「おかね」第一の國である。この惡い風習の中に育てられてきた「だいにせい」が、色々の問題をかもしだしたのは、當然なことである。「だいにせい」にのみとゞまらず、アメリカ歸りには、往々にして、日本國土の「ならはし」を無視して暮さうとするも

のさへあつたことなど、ひるがへり見る必要がある。それも若いときの元氣まかせで、海外發展をゆめみて乘りいだし、日本國の傳はつてきてゐる「おいはれ」などに心を致すことなく、生活を海外へ送つてきたところから、犯しかねまじき「あやまり」のひとつであらう。むしろ深い同情と「あはれみ」があつて、しかるべきである。

また、海外へでてゆくものには、二つの型が精神的にすぐさま、あらはれでてくるのが見られる。その第一は「ふるさと」戀しの鄕愁である。この「さびしみ」は、だれの胸もとにも押しせまつてくるところの感じであらう。言ひかへれば「ふるさと」での生活の仕方が向ふの國の暮し方に、ぴつたりとしないこと、そこには、家のごとき「あたゝかみ」を失つて戰はねばならないからである。すでに海上の人となるとき、この「わびしさ」がつきまとふのであるまいか。甲板にいでれば靑い波の「うねり」ばかりを見つめてゐなければならない。だれもが、茫然自失の感情におそはれずにはをるまい。船の上の人になると、眼の色が變つてくるとさへ言つて呉れた人があるが、たしかに、この鄕愁が「まなこ」の底にひかつてくるからである。國をいでるときは、三年とか、四五年とか、年月を限つて出てゆくのであるが、この廣い大平洋は、たしかに島流しをしてくれるに充分だと言へる。實をいへば、かゝる遠いところへ出かけては、いつ歸つてくるかは、はつきりと言はれないのである。むしろ再び本國土へ歸りつける人などは、だれもが拾ふことのできぬ幸福を拾ひあてたところの幸福者である。ことに日本のごとき、世界にないすぐれた國土に於ては、なほさらである。しかし、鄕愁の起つてくる氣持こそ、わが家を大切にし、わが國を守らうとする心なのである。かゝる心を失つては、たゞの「あばづれ」「すれつからし」になつてしまふことにならう。

こゝに、ひとつの暗示が、ふくめられてゐるのが見られるから、それに言ひ及んでおかう。すなはち、向ふの國の生活ぶりを、すでに訓練しておくと、いくらか、外國の暮しがたのしめ、なじみ易くなることができる。日本國の明治大正の時代といふものは、かゝる傾向を無意識のうちにもつてゐたのではあるまいか。そのころは、世界の各地をヨーロッパ文明國がおさへてゐたところであるから、國外へ發展するには、ヨーロッパ文化の風俗習慣にあらかじめ、慣れておかなければならなかつた。そんなところからしても、在來の日本の暮し方は大いにくづされ、破壞されかゝつてゐたのである。それを開國論者から云はしめれば、日本國の進步だと思ひこんでゐたのかも知れないが、これは、飛んでもない進步である。ヨーロッパ人から云はしめれば、世界各地へのヨーロッパ化が、日本にも取り行はれたことを、さししめす迄である。わが國の開港場、

ことに横濱、神戸のごとき二大開港場及び都市生活は、はなやかなヨーロッパ化に躍進してゐたのである。これは、まさしく、わが國の「みくにぶり」に取つて、恐るべきことなのであつた。

したがつて、かゝる生活のなかに育てられた私のごときものに取つては、太平洋の「かなた」の生活にも、すぐ適應することができたのである。そんな空氣の中に育てられた、紳士淑女諸君は、すでに「日本らしからぬもの」にきたはれてゐたのかも知れない。今から思へば恥づべき時代であつた。いまに至るも、そのころの惡習が、尙ほ、のこつてゐるやうなものがあるかも知れない。しかし、幸ひに、心だけは取りはづしてゐなかつたことは、最も幸福であつた。その點に於て、海外へ出て行くものは、心の「たかさ」のきたはれたものを送りだすとすることが、第一條件とせられねばならぬ。たゞ「くひはづし」を送りだすところであるならば、日本本來の使命を忘れてゐることになる。近來、植民方針をかゝる觀點にまで、たかめられてきてゐることは、まことに喜ばしい「ことがら」でなければならない。

この向ふのことに慣れておくことは、實際に、その場にあたるときに大切である。たとへば、「たべもの」のごときものでもそれである。現在、わが國では、ヨーロッパ的な「たべもの」がひろがつてゐるとは言ひながら、田舍には、牛乳の嫌ひな人とか、トマトの嫌ひな人迄ある。わが國のやうに、醬油がない、米が食べられぬとなると、始めて向うへ送りだされたものは、餘程こまつたことであつたらう。そんな生活の訓練は、たしかに必要なものである。その土地の生活、生産にしたしみ、慣れうることは、海外に延びようとする上での、重要なる要因である。人間のすぐれてゐることは、世界いづこの土地にゆくとも、その土地の「あるじ」になりうることである。寒い北國であらうと、暑い南國であらうと、その土地の「うみのおや」になりうることである。しかし、近世の日本國の植民は、よその國の人が「あるじ」となつてゐたところに、でかけていつたものであるから、餘程の苦しみがあつたに違ひない。幾度となく、寢床にさびしい涙を流したことであるか分るまい。しかし、これらの人々だとて、たがひにかたまり合つて、故國の生活らしいものを、確保するまでに基礎づけてきたのである。こゝに輝かしき近代日本の植民の「あかるみ」が見いだされるのだ。

第二に故國を離れるものゝ心の動きに反撥的なものが見られることは、見のがされない「こと」である。ことに、アメリカ通ひの船などにはやたらにかゝる人が乗り合はす可能性が多い。すなはち故國に「こゝろざし」を得られなかつたところから、故國に弓をひく言論をなし易いことである。こゝには、國土を離れると、今までの生活を第三人者として批判しがちになること。これ

は、故國を離れゆくもの〻、兎かく犯し易い見方である。わが國のごとき、すぐれた國にあつては、一個人に向つての責任觀とか、良心とかゞ、强度にはたらいてゐるので一度び船上の人になると何か解放されたやうな心もちになる。そして、今までとは、まるで「あべこべ」のやうな考へにとらはれてしまふ。こんなことが、わが國内にも一時行はれたことは、明治大正の指導者が殆んど洋行歸りであつたところにも基因し、また就職難時代にかゝる反撥的なことのあらはれたのは、不心得者のなしたことである。自分の家より、よその家の方が良いやうに見えるのは、だれにもあり得る心理なのであらう。しかし、この心理は、なか〳〵おろそかに出來ないものであるし、海外發展には必然的にかゝる分子が伴つてゆくことである。それ故、この點に於いてもしつかりとした、心の「たかさ」が、確立して居らなければならない。

第三の心つきは、第一、第二につながつてゐるところのものであらうが、すくなからず「すてばち」的な心もちにつちかはれてきてゐる。この心持のおこるのも、あらそはれないところのことであらう。幾らか氣が荒くなければ、海外へまで押しでてゆくまでになつてこない。だれにも乗るかそるかと云ふやうな運命のわけ目、冒險心のごときものが、ひそんでゐる。しかも、海外にでていつて、思ひ通りにならなかつたときに、「うさはらし」の道を、えらばずにおかなくなつてくる。植民開拓のはじめに見られがちな「ごろつき」である。わが國では「マンシュウゴロ」と、名を賣つてきたところのものもある。故國を離れると、生活に「つゝしみ」を缺いで放縦になつて來る。どちらかと云へば喧嘩腰になることが多いのであるまいか。ある點まで、腕力に訴へたり、刄傷沙汰も起りやすくなるのではあるまいか。ことに婦女子が植民地にはすくないのが、普通の傾向であるから、氣の荒んでくるのも當然である。その點、ブラジル移民には、一家族移住に決つてゐたところにも、こんな「わけがら」が見られうることだ。ドイツ移住民の特徴が、家族移住の中にあることは、將來、本國の發展に大きな貢献をなしうるところとならう。本國の生活様式をかへずに住みうる可能性が多いからである。

こんな心持が國を離れるときに起つてくるのであるが、心がしつかりとして居れば、これらの危險性をなんなく乗りこえることができる。これを云ひかへれば、すべて心の不安定からかもされでてゐる心持ちである。ことにわが國のやうに、四面を海に包まれてゐる國土にあつては、いつこの地にでかけるにしても、船上の人とならねばならない。陸上生活から、海上生活にうつつてくると、すくなからず不安の度がましてくる。船が陸地を離れだしはじめると、動揺をしはじめてくる。天候の悪いときには、船が「かぶり」はじめてくる。嵐の夜など舟が沈むやうなこと

はありはしないかと心細くなることがあるかも知れない。船底にうち寄せる波の氣もち悪いひゞき。日ごろ船上生活になれてゐないものなどは、膽をひやすことも度々あつたことであらう。ことに「ふなよひ」などが手つだつて、生活への自信をうしなつてゆくことになるのだらう。この場合、漂流する人々の心もちなどは、いかばかりであつたらうかと思はれる。日本の漁船などで、この太平洋を漂流したもののあることは、たゞの近代のことのみにとゞまるまい。

旅へでるものなどが、神社佛閣からの「まもりふだ」を身につけて出たりするところにも、こんな心地がうごいてゐる。兎に角「かなた」にむかつて旅立つときには、高き心の確立が必要である。この生活の轉換にあたつて、みづからの心をきたへ抜かうとするだけの心がけがなかつたならば、なんの役にも立たない。「たびのはぢはかきすて」と申すところには、人間的弱點に妥協したところの言葉と思はれるだらうが、國の「うちそと」になつたからと云つて、人間の生活態度が、がらりと變りうる論據はなりたゝない。ことに日本人であるうへには、なほさらである。それでこの諺にふくまれてゐる裏の意味をさぐつてみることにする。旅にあつてはふるさとでは恥になるやうなことでも、大膽に行つて、みづからの足らないところを修養しろと言つてゐるやうでもあるし、また旅にあつて、羞恥心をうしなひがちになるから、それをいましめてゐる言葉にも受けとられるのだ。

「民族と植民」のはじめにあたつて、心の「たかさ」がいることを説くのは、當然なことだと思ふ。その心の「たかさ」をどんなところにみいだし得るかは、ひとへに日本人の信念のうちに見いだされうる。わが國のなりたちは、まつたく、この信念のあらはされたところのものである。若しか、萬里波濤の「かなた」へ送りだされるとき、われ〳〵は、胸に手をやつて、立派な日本人であることに大きな感激をおぼえ、いかなる困難にも耐えうる、かたき決心を誓ふべきである。

2 わがくに

なんのことはなく、一晩のうちに「ふなよひ」に襲はれてしまつたことである。しみじみ學校をでたばかりの青白きインテリ（ものしり）の哀れさをしのんだことである。國を離れて行けば、色んな苦しみにおそはれるのは覺悟の上であつたが、こんな苦しみにかゝらうとは知らなかつた。出發眞際の張り切つた心が、急にゆるんだからかも知れない。ほとんど食事を採ることもなく、うつらうつらと波のゆすぶり動かすにまかせた。故國であれば、だれか介抱をしてくださる人もあることだらうに、いまや波の上にひとり身である。

　この太平洋の打ち寄せる波を、しつかりと喰ひとめてゐるのは、わが「おほやしま」の國である。まさしく、アジア大陸の尖兵であり、防波堤なのであつた。この大陸の防衛にあたるものは、わが國をおいて他にあるまい。大陸においては滿洲事變が突如として火花を散らし初めてゐたのである。滿洲は日本の「生命線」である認識のもとに、だらしのない國際的のものから獨立獨歩をはじめてゐたことである。その當時、國際的と呼ばれる假面のもとに、猛然と内攻をはじめてゐたのは、社會主義の思想であつた。しかし、わが國の傳統には、そんな異國の思想によつて、みづからの「たふとさ」を失はしめるやうな氣まぐれは許されなかつた。それどころか反つて國民意識の強調が、おのづからにたかまつてきたのである。

　ヨーロッパ諸國は、アジア大陸をほとんど植民地化せんとしてゐたことである。この世界の一大大陸に獨立國であるものは、極めて僅かなものであつた。タイとかイラン王國のごときものも、むしろヨーロッパ諸國勢力の「うべあはせ」を保つ上に於て餘命をつゞけてゐたのだ。すなはち、タイ王國のごときは、イギリスの印度本國と、フランスの佛印とがかちあはせをしないための「ついたて」の如きものであつた。イラン王國にしても、イギリスとロシアの勢力が、かちあはさぬ爲に獨立がゆるされてゐたのである。ヨーロッパ人に言はせれば、わが國もさうであつたと言ふかも知れないが、それはまさしく「たはごと」である。わが國には、三千年の傳統があり、一度として他國から「はづかしめ」を受けたことはないのだ。イギリスから言はしめれば日英同盟をしてイギリス政策のために、日本をうまくつかつてやつたと言ふところかも知れないが、今からすればその「むくひ」をみづからが、刈りとつてゐるのである。イギリスからしてみると、日英同盟は世界制覇の上に行はれた、一政策にすぎなかつたと言ふところだらう。其の第一の目的は、ロシアの勢力を東方アジアにて、封殺せしめんとしたところだし、それは日露戰爭となつ

であらはれた。アジア民族の意氣が、この一戰によつてたかめられたのである。ヨーロッパ人が必ずしも、絶對者であるときまつて居らぬことをさらけだした。日露戰爭によつてわが同胞は、滿洲の荒野に「ちしほ」を流したのである。その土地には、われらのお父さん、おぢさんの流した血潮が、土塊に染まつてゐる筈である。たとへ、イギリスが援助をしてくれたと言へ、わが國自衛の上に當然なされた戰爭であつた。「はづかしめ」を受けるより、敢然と戰つて散るのが「やまとごころ」の本心である。兎にかく、イギリスはおのれの思ふ「つぼ」にはまつたことを滿足におもつたことであらう。第二の思ふ「つぼ」とはなんであつたらう。わが國を、前ヨーロッパ戰爭に於て、聯合軍側にひきいれたことであつた。かゝることに依つて、力を分裂せしめることなく、ドイツ國を取巻くことに專念することができた。その包圍圏を打ち破ることのできなかつたドイツ國は、みづから「いきづまり」（窒息）をおこして、くづれはてたのだ。いよ〳〵ベルサイユ體制のとゝのふに至ると、東方の君子國などと同盟する必要もないと見てきた。むしろ、次に「いきづまり」をさすべき國はわが日本の國と「にらみ」をきかしてきたのである。まさかとなれば、封鎖をしてしまふと日本國などは、易くへたばるものと胸算用にいれてゐたに違ひない。前ヨーロッパ戰に參加した「おしるし」に、利益の「おすそわけ」にと、南洋委任統治を日本に任すに至つた。これこそ、イギリスにしては「見おとし」も甚だしい手違ひであつたかも知れない。わが國が他日、世界雄飛の足場にするところは、北に滿洲、南に南洋諸島があつたと言へようが、世界史の上からすると廣い海洋に星の數ほども、撒きちらされてゐたこれら珊瑚礁からなる島々が、重大なる役割をなしてゐたのである。イギリス自身にすると、ホンコン・シンガポールの要塞に依つて、日本の南方發展を完全に抑壓しうると思つてゐたことだらう。太平洋の守りは、アメリカのハワイ・フイリッピンをおさへてゐることに依つて、微動だにすまいと心得てゐたに違ひない。然し世界史は、太平洋の支配にかゝはつてゐることに、はつきりとした目を配るものはなかつたのであらう。イギリスはたゞ、印度洋を完全に支配するに止まつた。これが、イギリスの世界支配に於けるところの意味であつた。東にスエズ、西にシンガポール、眞中にセイロン島を配置することに依つて、インド洋の拔くことのあたはざる守りとしたことだらう。大陸の面から眺めれば、インドの獲得、續いて濠洲、アフリカの確保にあたつたことであらう。こゝで氣づかなければならぬことは、他大陸を支配するには、第一要件として海洋を支配するにあらされば成功することは出來ない。民族の發展には、海洋支配が重要なる生命權をなしてゐるのだ。イギリスが今日の大きな植民地の經營に至つたのは、ひとへにその海洋支配の歷史であつた

と申されよう。それゆゑ、イギリス本國に於ける陸軍の占める位置は、海軍にくらべて比較にならぬ程、お粗末であつた。その依つて來る原理は、海洋を抑へるものは、陸地をも支配しうると云ふのが原則とみられよう。その傾向はアメリカに於ても見受けられることである。また、大陸に根じろをおろしてゐる國は、必然的に陸軍中心となつてくるところで、ロシア・ドイツ・シナのごときは、その有様をあらはしてゐる。たゞ日本國は陸海軍の最も「つれあひ」の取れた立派な國であることが思ひやられる。フランスのごときも、そんな風にうけとられるが、その軍をつくりあげてゐる兵員といふものが「あしもと」にもよりつかれない。フランスの今日、敗北の第一原因は、その兵員の不統一にあつたのである。すなはち、本國人口の伸びる力がないところから、國防の義務を、植民地兵に頼つたことである。この「おろかさ」は、かつてのローマ帝國も犯したところのものであつた。みづからの國を守るには、その國に生れついたものの手でもりたてねばならないことだ。

ヨーロッパの古代文化時代といふものは、要するに地中海の海上支配權をにぎりうるかに鍵があづけられてゐたのである。ヨーロッパ人がペルシヤ戰役と呼びなすところの、イラン・ギリシヤの戰役に於て、サラミスの海上にイランの海軍が全滅をしたことは、敗北のおもむくところを明にした。それに依つてギリシヤは、裏海、地中海沿岸に植民地をきづきあげるに成功した。今回のドイツ・ソビエツト戰爭で奪ひ合ひを繰り返してゐるロストフも、その昔、ギリシヤの植民地で、タナイスと呼んだところである。今のイスタンブール・アレキサンドリヤから、イタリーのナポリ、フランスに於て今のマルセイユとなつたマツサリア、スペインにはマイナケのごとき開港都市をきづきあげてゐたのである。海上支配の及ぼす利益は、ひとりでに本國に入りこむ「かたち」となつてくる。海上權をにぎることに依つて、大陸の海岸線を確保することが出來、まさかとなれば海岸線を封鎖して「しめだし」を喰はすことができる。ローマ帝國はポエニ戰役に於てカルタゴの海軍力をひつくりかへし、地中海全域に覇をとなへることができた。これがローマ帝國の盛大をほこりえた原因である。こゝに於ても見受けられるやうに、ひとつの海洋を支配するには、本國にむきあへる對岸をものにする必要がある。古來、日本國のさかえて行く姿の中にもこの海洋を「おのれのもの」になすと同時に、對岸の足場をきづきあげておかねばならないこと。出雲の國がさかえた時、そのむかひあひの國朝鮮が重要な要地であつたに違ひない。古代から日鮮間に「かゝはり」のあつたことは、凡そ想像がつくところである。ことに「くにびき」のごとき神話は、對岸の國土に目がふれてゐた「あとかた」を思はせるものだ。また、日本國土

自身の中に於いても、九州と本州は對岸的な意味を含んでゐたやうに受とられる。高千穗に天降りになつた「あまつかみ」と、出雲の「くにつかみ」との間の交渉のごときも、史的には對岸國土への勢力普及であつたと考へられる。神武天皇御東征は、日本國土の地中海にもたとへられるべき瀨戸內海を橫斷なされ給ひて大和の「かしはら」にわが國の御創建をなされたまふたのであつた。瀨戸內海はその後に於ても、對內的には地中海のごとき重要性を帶びてゐたものと云はれよう。都が「なには」に設けられるに至つたのも、後ほど大阪、堺港の活躍もひとへに此の內海の有してゐる重要さからである。源平兩氏の決戰は、此の瀨戸內海の支配をどちらが爲しうるかに「わけめ」の戰ひがかけられたのである。遂に下關に於ける平家の敗北に依つて源氏の天下は確立したのである。南北朝に於ても、また戰國時代にも、この內海の持つたところの「ねうち」がみとめられる。また有名な和寇の活躍も、この內海が足場となつてゐたことも、その重要性を證明するものだらう。

對外的に日本國土の發展途上にあらはれいでた對岸は、第一に朝鮮を擧げねばなるまい。そこには「みまな」府の成立をみたのであるが、遂に永續性を持たなかつた。九洲は朝鮮、支那から取つては對岸國土にあたり、その「をりあひ」をうまくとゝのへるために太宰府がおかれてゐたところである。蒙古軍の襲來も、この地に攻めよせたことであり、秀吉の朝鮮征伐もこゝが踏み場となつてその積極政策を遂行したことであつたが、水運に利あらずして、敗北するところとなつたのである。つぎに南蠻船の折衝地點となつたときには、世界的な立ち場にまでたかめられてゐたのである。遂にカトリックの世界政策は、この一角に根じろを植えつけたやうに見受けられたが、はね返へされるに至つたのである。

日本國土の持つ本來の對岸線とは、いづこをさしてゐたのであらうか。東に向つては大平洋を越えてアメリカ國と向ひあつてゐるのであるし、西にあつては支那本土をはるかに越えたアジア大陸なのであり、北はシベリア、アリユウシヤン列島であり、南はミクロネシア、ポリネシア群島を含んで、ジヤバ、スマトラ、濠洲などである。世界地上これほど重要なる土地を占めた國家は、いづこにもありはしない。わが國の神々がこの國土の經營にお心をくだかれたことは、まさしく「ゆゑ」あつての事だと思はざるにをれない。近代日本は、この御神意を次第にあらはしてきてゐることだ。日本國は島國でせまくて貧乏だと言ふやうな心のせまぐるしい人も、なかなか多かつたところであるが、今やこの全世界の中樞をなしてゐる、この神國の位置をふりかへつてみる必要がある。しかも、この國がうち建てられてから、このかた外敵の侵入を受けたことがな

く、上には萬世一系の「おほぎみ」をいたゞいて、全國民は一致團結の「おくにがら」を保ちつゞけてきたのである。まさかとなれば、身命をお國に捧げて悔ひないのである。わが國を離れるものはだれとてもこの「みこゝろ」に涙ぐまないものとてはあるまい。

この近代日本へむかつて第一の衝動を與へたものは、日本本島の對岸、アメリカ合衆國からである。

アメリカ合衆國からすれば支那本土の方が、對岸國土として重要であると思つてゐたのかも知れない。イギリス、アメリカ等の國は、最初から日本の占める位置を見あやまつてゐたのである。それどころでない、支那の屬國位に扱つてゐたのでもあらう。ペルリは嘉永六年六月三日、無禮千萬にもさししめされてゐる港を差拔いて、浦賀に黑船四隻をひきつれ、開國をせまり、さもなくばたゞちに開戰をすると、おどしつけたものである。それどころか、內海測量するとか、羽田沖にまで艦隊示威をこゝろみるなど、全く表玄關に土足であがりこむ程の無禮をしたのである。かゝる強制的な日米外交は、いつかはいづこかに於て破綻をきたさずには、おかないところのものであつた。

しかし、わが國にあつては、對岸線がアメリカ國土にあることを認めしめることになつた。安政七年正月十九日には、日本軍艦成臨丸が浦賀港をたつて、サンフランシスコにむかつたのである。その軍艦奉行には、木村攝津守が乘りこみ、教頭として、勝麟太郎が成臨丸の指揮をとつたことであつた。目的地についたのは、三月二十五日のことなので、渡洋日數は三十七、八日を要してゐるのだ。たしか、近代船は十二三日で太平洋を乘り切つてしまふところだらう。わが國土を中心にして、對岸土が次第に開拓せられずにはおかなかつた。北海道に開拓使がひらかれ、明治二年には樺太に開拓支廳がおかれるなど、國內的な對岸土の確保に全力がそゝがれてきた。小笠原島や琉球のわが領有ときまつた場合にも、同じことが言はれるだらう。これらの邊地が、他國の領有に歸さなかつたことは、日本國民の熱烈なる努力によつて確保せられたところである。すでに明治元年には、ハワイ、カリホルニヤにむけて、移往をこゝろみるものもいでた程である、わが國の保有する國力は次第に充實せられてきてゐたのだ。

明治二十七年條約改正に伴つて、不平等條約を撤廢するや、間もなく日清戰爭は、はじまり、豐島沖の海戰から、成歡・牙山の戰、平壤の戰、黃海の戰、旅順の陷落、威海衞の陷落、田庄臺の戰、澎湖島の占領によつて、黃海、南支那海の海上權は、わが國に歸するところとなり、こゝに講和がなりたつに至つた。講和がなりたつて一週間もたゝない內に三國干涉がはじまつたので

ある。遼東半島還附の大詔を拜讀して、全國民はことごとく、泣いたものである。この涙は、かつてロシアの極東政策にたちむかふだけの勇氣を奮ひたゝせたのである。明治三十七年二月十日宣戰の大詔は下され、こゝにアジア大陸確保へむかつての日本正義の大戰爭は開始せられたのであつた。旅順攻擊、遼陽の戰、沙河の會戰、奉天の會戰と展開し、世界史上、わが國威をさししめした、日本海の大海戰は遂にわが軍の方に軍配の組するところとなつた。この二大戰役は、日本國民の自覺を促すことになつて、も早や、歐米列强からあなどられることもない。押しも押されもせぬ、世界列强の一つに加はつてきたのである。この戰役に依つて、白人優越感に一大痛手をあたへたものと言はれよう。世界全土の中に此の島國のみが、ヨーロッパ人の植民地化から、離脱することを得たのだ。戰後、韓國併合となり、アジア大陸へ向つての對岸上は、こゝに日本國の恩惠を蒙りはじめる「てがかり」となつてきたのである。東洋平和を旗色として戰つてきたところの日本の使命が實現されるに至る「いとぐち」についたのである。大正三年にはじまつた第一次歐洲戰爭に參加して、南洋委任統治を得るに至り、わが國の世界對策へ向つての態勢は、こゝに備はるに至つたものと言はれよう。

この態勢に「おそれ」をなしたのは歐米列强中、ことに英米である。大正十年、アメリカは、ワシントン會議をひらいて軍備制限をなさんことを提唱するに至つた。この會議に依つて五・五・三の比率は確定せられ、米英は日本の躍進をひとまづ、おさへることが出來たのである。昭和五年にロンドン軍縮會議が行はれ、主力艦の噸數を低下せしめたのみにとどまらず、補助艦艇までの制限に及んだのである。世界政策の實現をはかるには、どうしても海軍力が必要なのである。その建前から、わが國の國力を低下せしめることが重要眼目なのであつた。たゞの條約の「とりきめ」から、取りおさへられると思ふこそ「みあやまり」も甚だしいものである。國力の充實は、その國土に具はつたところの內面的な必然性から盛りあがつてくるものである。外部から取りおさへようとすれば、內面の熱度はますます燃えさかつてくる。その燃えさかる熱度は、いづこかに吐け口をさがさねばならなかつた。それが滿洲事變となり、支那事變となり、わが國力がさししめされようとしてゐる時節にあたつて、すでに對岸土は地ならしを終へた形だし、日本國土の支配する海洋、南洋委任統治を引受けるに至つて、擴大强化されるに至つてゐたのである。ハワイ、濠洲も日本國力から、指呼の間にせまつてゐたのである。

みづからの生れ國が、いまだ他國から「はづかしめ」を受けずに伸び育つてきたほど、國民に「ちからづよさ」を與へるものはあるまい。この力强さをなくしては、世界と立ちむかふ意氣を

なくしてしまふのである。新興國家と名づけられるものは、この力强さのうちに立ちあがつてきたところの國家をさすのである。わが國民は、この雄大なる意氣のもとに伸びそだつてゐるのだ。だれもが海外雄飛の志に燃えてゐることは、わが國力の世界にあまねくことを物語つてゐることである。一度び、日本領海を離れるとき、だれもがこの大きな「こゝろざし」を思ひだしたことに違ひあるまいが、現實は至るところ困難と戰はねばならなかつたのである。その點、民族と植民なるものは、いかに困難を乘り切つていつたかの歴史にほかならない。この困難を乘り切るところに、一層と國威は、かゞやきいでるのだ。

8　おきつゝしま

一夜の嵐から、翌る朝はちがつたやうな、のびやかな波が打ち寄せてゐる。その日の正午前、船はホノルルに入港するのだ。まるで熱病からさめたやうな心地で、船は静かに波を切つて進んでゐる。うすかすみのかゝつた空から、オレンジ色の太陽が照つてゐる。その光りに照り返されて、波の光りが船室の中に反射をして、いかにもなごやかな南海の情景である。すでに太平洋を中ばも横切つたところにハワイ諸島がある。この島々は、色んな意味から云つて太平洋の重要據點であるに違ひない。太平洋が日本國の内海とならうとしつゝあるとき、ハワイ諸島はわが國の「おきつしま」の位置に相當すると思ふ。偶然にも八つの島からなる諸島で、ポリネシヤ諸島中では、最大なものである。わが國を「おほやしま」と呼ぶところから、「こやしま」と名づけるにふさはしい所であらう。すなはち、ニイハウ・カウアイ・オアフ・モロカイ・ラナイ・マウイ・カフラウイ・ハワイの諸島、一年に平均溫度が二十三度、八月が二十五度、一月は二十一度と云ふやうな理想的な平均溫度の土地である。すでに砂糖とパイナツプルの名産地として聞えてゐるところ。ところがこの島々は、實質的には日本人のものになつてゐることに注目せねばならない。この島々をして今日のやうな重要な位置にもたげしめたところの力は、ほとんど日本人の勞力から生れでたと云つて差支へあるまい。

この島々は曾つて、ポリネシア族の手中に保たれてゐたことであつたが、歐米人の統治力の擴大から、この島々も最後にはアメリカ國に合併せられるの運命におかれたのである。この合併せられる直接の動機は、アメリカ國の太平洋圏への侵入におかされるところとなつた。オレゴン州とカリホルニヤ州とを手に入れたアメリカの視界には、この廣々とした大洋が眼前にあらはれたのである。わが國とアメリカは、地勢からみても對立的な運命におかれて進展をしてきてゐるのだ。古代のインド洋時代から、ルネツサンス以後の大西洋時代、そして今日の太平洋時代、この三番目の時代こそ、われわれの限前にひらかれていつてゐる世紀の爭覇戰なのである。この洋界を手に入れるものこそ、世界の王座を占めるものとなることだらう。

われわれがハワイの特色として聞きつたへてゐるものを思ひだしてみよう。殆んどは原住民の風俗習慣である。これらの「ならはし」は、たゞの「みせもの」として、觀光客をいざなふ材料となつてゐたことだらう。ひとつの民族の生活の營み方が、「みせもの」として扱はれることは、あまり賴もしいことではない。どちらかと云へば、生産力の充分でない民族が觀光の目的となる

ことが多い。ひるがへつて思へば、わが國のごときもかなり觀光地として取扱はれるやうな傾向がありはしなかつただらうか。外來者のばらまくお金に依つて日常生活を支へると云ふやうな國も、まんざらなかつたとは言はれない。自然の景色で觀光客をひきつけるのと、風俗習慣でお客を寄せつけるところには、つながつたものがあると言へ、動機はかなり違つてゐると思ふ。弱い住民達は強い外來者の「おこゝろ」をはづすまいと、並々ならぬ藝當を見せることになる。世界にはかゝる藝當をすること、愛嬌を振りまくことをもつぱらにする區域は、いくらでもある。すくなくとも一民族が世界競爭圏に參加しようとの「こゝろざし」があるときには、そんなたわいもないことで生活基本とすることを潔しとするところであるまい。それ故、氣骨のある住民にあつては、「みせもの」となるのを、ひどく嫌ふところの性質があげられうる。しかるに、かゝる性質をすりへらしてまで好んで「うりもの」となすに至つては、亡びゆく民族のなすところの哀れさであらう。

「みせもの」となるの危險、今日ほど甚だしい時勢はあるまい。恐らく一部の人心には、「みせもの」になることを、好んでゐるものさへあるかも知れまい。これは、あきらかに金權謳歌をたゝえた時代の余弊である。この「みせもの」にする術は、アメリカ本土を中心とするユダヤ財閥からばらまかれた高等手段である。映畫俳優からはじまつて運動選手、それにとゞまらず社交界の花形、名家、政治家、著述家などは、多かれ少なかれ「みせもの」扱ひにされたのである。ユダヤ人の喜劇俳優者チャップリンは、「みせもの」を商賣としながら、「みせもの」になることを嫌つたと云はれるが、そのこと自身が宣傳材料にされるやうな時世であつた。いくら世の中が開けたと云つても、「みせもの」に扱はれてゐる間は、道化役者に近いところのものがある。これが時代風潮であるとしても、限度があつてしかるべきと思ふ。一躍、時勢の「人氣者」でもなつてしまふと、いつの間にか道化役者におちこんでゐる悲哀を覺えねばなるまい。それは亡びゆく民族の形相をすら、しのばすに足るものが充分ある。そんな點に於て、近代の時勢ほど恐ろしきものはない。世界の各民族は、「こゝろざし」の氣高さを踏みにじられていつてゐるのだ。

ハワイの原住民のことを、カナカと呼びなしてゐる。男は「波のり」に依つて名を賣つてゐるし、女は「フラフラ」ダンスに依つて呼び名を取つてゐる。ことに、フラフラダンスは「みせもの」としては、あつらへむきのものであらう。原住民の抒情詩には、すぐれたところがあつて、たとへば「アロハオエ」のごとく、そのなやましい旋律をもつて世界にゆきわたつてゐる。原住民は音樂好きな性質をもつてゐて、ハワイの樂器としては、「ウクレレ」が代表的なものとなつ

た。しかし、この樂器は、在來のものでなくて、ポルトガル人が持ちこんだところのものである。その他、ハワイを想ひ浮べるには、首にかける花環「レイス」があるだらう。彼等は花びらを以て身體を飾ることが好きであつて、從つて港についたもの、出るものに敬意をはらふために、この「レイス」を贈つたものであるが、今では港に出入する船を追つて、この花環を賣つてゐる。たゞ、アメリカ人の御氣嫌とりにのみ終始してゐるのが、この民族のたどつてゐる暮しなのであらうか。

しかし曾つては、この島々を占有してゐた王者なのであつた。今から千五百年以前のころ、この島々にたどりついたものだらうと云はれてゐる。おそらく、ポリネシヤ族と云ふものは、アジアからでてきたところのものであるらしく、マレー半島からジャバ島を通つて島々をつたはつてひろがつたところのものと云はれる。この種族は、かなり高度な精神力を有してゐるもので、文學、哲學的能力を多分に有してゐる。ポリネシヤ族は、至るところにかゝる作品をすら持つてゐることだ。けれども、文字を有してをらぬところから、すべて「くちつたへ」に依つてきたところで、かゝる口傳へを職業としてゐる「カフナ」がある。歴史とか、お告げ、格言、謎、唄、ものがたりを語りあふのを、樂しみにしてきたところである。七八百年まへには、大きな「くり舟」で、タヒチやサモア島などと「ゆきき」をしてゐたらしく、航海範圍は二千哩に及んだことになる。そんなところからしても海上生活はお得意とするところで、星座の位置とか、風向きのみにとゞまらず、潮流の關係をすら知つてゐたものである。ところが、南方の島々から得たところのものは、きびしい「いみことば」(タブー)と、人身御供の習慣であつたが、「人喰ひ」の慣習には染まらなかつた。こゝの住民では、母權が大きな「はゞ」を利かしてきたもので、人の地位はすべて、母親の身分で決められたのである。後世、ハワイをあけ渡すに至つたところにも、母權の力强さが原因となつてゐるとも、見られないことはない。

その後、ハワイはいづことも交渉がなく、殘されてゐたところ。しかし酋長の權利が專横なので、しばしば流血の慘事をひきおこしてゐたものである。近代文明はこの島へも、訪れないではおかなかつた。すでに四百年前、スペイン人が見つけたと云はれるのであるが、普通、ゼームス・クックが皇紀二四三八年に到着したのをもつて、ヨーロッパ植民地化の始めとなされてゐる。その時、原住民は、クックを神さまと思ひこんだのだから、笑はれぬ。このことは、ハワイにとゞまらず、外來者が「かみさま」と思はれたことは、度々のことである。ヨーロッパ人は、かゝることを、白色人種と特別關係があるがごとくに思ひこみ、つけあがるに至つたのだとも云へる。

ヨーロッパの植民地化に凡そ、決まつた段取りがみられる。先づ、送りこむのは宣教師であつて、住民のこゝろをあがなはしめることである。それに成功すれば、併呑。それとも反抗が起るのが普通であつて、その時こそと取りおさへにかゝつてくるのだ。ハワイの植民地化にも、この兩手が使ひわけられてゐる。

ハワイを太平洋の一王國としたものは、カメハメハ一世と申さねばならぬ。今から百五十年前のことである。カメハメハ一世は、在來の宗教を取りこはされることを憂へてゐたものであつた。しかし、あたらしき異教の傳道は、住民の心をむしばまずには置かなかつた。ことに、カメハメハ一世の死後、王妃達が洗禮をうけたことは、この民族滅亡への「のろし」である。ことにカメハメハ一世の寵妃カアフマヌが洗禮を受けてから、ころつと性格が變つたなどと云はれだしては、「おしまひ」である。洗禮以前は、高慢ちきな王妃であらせられたのが、いとも惠み深い性格になられたなどと、敵國からほめられるやうになつては、精神的な抵抗力をうしなつた印しである。しかし、一方、古來からの傳統を守らうとする運動もあつたのである。時には表だつて騷動を起したこともあるが、消えゆく前に、ぱつと燃えあがる「あかり」に似てゐたかも知れない。あるときは、イギリスが領土を主張したことや、フランスが再三、武力で差押へたこともあるが、アメリカの實力のまへには、如何ともなしがたかつたのである。今から、凡そ五十年前、アメリカ合衆國に併合せられるに至つたのであるが、最大原因は、王室の自由民權思想に染まつたことである。自由思想が住民の側からでなくて、王室を中心にして、ひろがつて行つたことである。それにしても、ハワイ原住民の人口減退は如何ともすることが出來なかつた。ヨーロッパ人が地球にばらまいたものは、思想の腐敗にとゞまらず、肉體的にも虫ばんで行つたことである。原住民に「だます」ことを敎へ、性病を傳染さすにとゞまらず、つねに惡疫をまきちらして歩いた。皇紀二四六四年には、コレラが、二五一三年には天然痘がこの島々を荒しまはつたものである。人口減退の一因として「あかごころし」も數へられてゐて良いかと思ふ。

ひと度、精神的に敗北した民族は、いつの間にか、ほろびゆく道をたどる一方である。これを心理的に見れば、「にくまれど、よにはゞかる」と云ふやうなところが、消え失せてしまふと、生存意識をうすらいで行くものらしい。一民族の勃興期に向つてゐるものは、どこかに、「にくまれる」ことが多くなつてくる。恐らく「にくしみ」を持たれない民族とては地上にあるまいと思ふが、たゞ亡びゆく者は、かゝる傾向から遠ざかつて行くことになる。若しか、一民族が他民族から、「にくしみ」を買はれないやうになつたときは、滅亡線上をうろついてゐると見て差支へある

まい。これは、少し露骨な見方であるかも知れないが、或る意味では事實をものがたつてゐるやうだ。やはり先程の「みせもの」になる心理にも關係してゐるかも知れない。アメリカ・インディアン、ハワイのカナカにしても、そんな風情がみられるやうだ。

ハワイ人口の經過を眺めてみるときに、日本人に托されてゐる使命の大きさが、はつきりと現れでてゐるのが知られる。このことはハワイに止まらず、日本民族が世界各地に示しつゝある力强き姿の一端になるかとも思ふ。

ゼームス・クックがハワイにたどりついた時、凡そ住民四十萬人位と見積つたのであるが、おそらく三十萬人程度であつたらうと見られる。ハワイ原住民の人口は、惡疫の流行にも依ることだらうが、急激に減つていつた「あとかた」が見られうる。卽ち、二四八三年に宣教師達の見積つたところでは十四萬二千五十人となつてゐる。それから五十年もたつた二五三二年の人口調査には、五萬一千五百三十一人と以前の半數以下に及んでゐる。二五八七年には原住民は、二萬九百三十一人と見積られるに至つた。しかし、こゝで注目せねばならぬことは、混血兒が殖えつゝある。それ故、ハワイ原住民の婦人が、他人種にかたづいて行くところに、ますます原住民のほろびゆくのに、加速度を加へてゐることだ。敗北人種は必然的に消えゆかねばならぬ道ゆきをたどつてゐるやうだ。

曾つて、ある時代國際戀愛などが、わが國に於ても、もて囃された時代があつたときなどは、やはり、この敗北感がすくなからず、つきまとつてゐたのかも知れない。婦人の貞操觀はその民族力全體を基礎づけてゐる大きな力なのである。それ故、この貞操觀の强さは、その民族力の强さを計るに足る一標準となるかも知れない。賣春婦におちいる傾向がさかんな時は、餘程、注意が必要とされよう。それは、必ずしも經濟的な一面からのみおしはかられるべきことでない。その民族の有してゐる精神力に關係してゐるところである。ヨーロッパ人の世界植民地化とは、極端に云ふならば、世界各地の貞操觀を失はしめるにあつたらうと思はれる。たしかに東洋に侵入してきた、ヨーロッパ文明と申すものには、かゝる面が濃厚につきまとつてゐたやうだ。すなはち、俗に享樂思想と名づけられてゐるところのものである。わが國に於ても、この近代思想の影響をうけて、結婚觀がひどく嚴肅性を缺いできたことを、指摘することも出來うるだらう。

出產死亡率をながめやるときに、ますますこの亡びゆく民族の面影が、憂ひに濃く包まれゆく樣が見受けられる。ハワイ全體の出產率は、二五八七年に、千人につき、三十七人である。死亡率は、凡そ十二人の割である。この時死亡率の一番高いのは、原住民で千人につき、三十一人の

比例をしめしてゐる。この際、ハワイに於ける日本人の死亡率の凡そ九人であるのとを較べて見るならば、思ひ半ばに達することが出來る。これにひきかへ、混血種が最大出産率を示してゐるのは、注目に價ひする。すなはち、支那人、ハワイ原住民の混血は、千人につき七十四人、白人種、ハワイ原住民との混血が六十人である。この際、ハワイに於ける日本人の出産率を見ておく必要があるだらう。凡そ、四十四人程度となつてゐる。白色人の出産率は、この島に於ても最低位を示してゐて、十一人半にしか過ぎない。それ故、この島を自然のまゝに任しておくならば、原住民は滅亡して、混血種がいくばくもない、その勢力に代りうるかも知れないが、大半は本質上、日本人の手に歸する運命にある。太平洋の關ヶ原をなすこの島々は、すでに日本人のものだと言ひうるかも知れない。

二五八七年の人口調査に依るならば、全島三十三萬三千四百二十人のところ、日本人は凡そ十四萬人（この中六千人の朝鮮出身をふくむ）を占めてゐる。いかに、この人口の占める位置の絶大なものであるかを知るために、他人種の割をも見ておくことにしよう。

支那人	二五一九八人
フイリッピン人	五二一二四人
ポートリーコ人	六五七二人
スペイン人	一七七四人
ポルトガル人	二八四一七人
アメリカ及び北部ヨーロッパ人	三四七五〇人
原住民	二〇九三一人
白人・原住民混血	一五二〇八人
アジア人・原住民混血	九四三七人

この日本人の十四萬人、詳しく示めせば、日本人十三萬八千六百五十六人（うち朝鮮出身者、六千二百十四人）が、偶然に、この島にあつまりきたと、見ることはできない。むしろ、日本人によつて、はじめて今日のハワイたり得たことを知つておかなければならない。日本人に依らなかつたならば、この島々は、今日のごとき重要性にまでは、たち至らなかつたと言ひうる。ハワイ植民史は、日本人の精神と體力のすぐれてゐることを如實に語つてゐる眼前の事實である。その「なりゆき」を、簡單に記しておくにとゞめよう。

いくら天然資源に富んでゐるとも、開發者がをらなかつたならば、どうすることも出來ない。

原住民の人口減少を補ふために、他の地方から、人口を移植せなければならぬことになつた。その第一に試みられたことは、同族のポリネシヤ人を、南部の島々から移入するのであれば、言語・風俗・習慣・氣候などの條件から、最も適合した理想的なものであつた。それゆゑ、二五一九年より、二五四五年に至る間に、この案の實施がなされて、二四五四人の移植を見たのであるが、彼等は生れつき「樂園の寵兒」であつた。勞働をしなくても、喰ひはづしをするやうなことはない。だれが好んで勞働してまで、この島々にとゞまつてゐるものがあらう。その殆んどは、自分達の出身地に歸鄕することに依つて、この理想案は水泡に歸したのである。

民族と勞働力は、こゝに面白い暗示を示してゐる。普通、勞働力に適する民族は、智的に劣るのが、古來からの法則である。そこに必ずしも、體力・勞働力にすぐれた民族が、一地方の支配權をにぎることは出來なかつた。古來、支配者たるものは、智力のすぐれてゐるものに歸する傾向があつた。しかし、文化の榮えた智的な國民が、體力の强い民族に依つて、くつがへされたことも、度々である。太古の歷史は極限性に富んでゐたことであるが、近代文明は、たゞちに世界を支配することである。その近代文明は、ほとんど人間の智力といつても、白色人種の工夫になるところのものに依つて、支配せられてゐたのである。しかし、その世界支配の底にも、勞働力と民族の問題は、決して解決されてゐない。恐らく、近代文明的な「ながめかた」からするならば、支配能力から遠ざかるもの、云ひかへれば、智的能力の低いものほど、勞働の重荷をかぶせられやすくなる危險性がある。近代社會主義は、このあたりに問題をひそめてをり、白色人種の至上體制に反撥を加へた一面も見られないことはない。小にしては教育に於て兎かく、智育、體育の論がたゝかはされるところにも、この問題に觸れてゐるところがあらう。同じ植民に於ても、統治者は被治者の體力を利用するとのみ決めこんでゐるならば、きつと破綻を來さずにおかない。その解決が、これからの世界政策に依つて、得られなければならない。近代におこつてゐるところの民族問題には、多かれ少かれ、この問題が、ふくまれてゐると見て差支へない。こゝでは、ひとつの暗示にとめておく。

つゞいて、ハワイ開拓に起つた問題はなんであらう。この天然の樂園に將來、市民として、立派な民族を連れきたら良いだらうとのことで、二五三〇年にアメリカ人を入れこんだのを始めとし、ノルウェー人、ドイツ人、ギリシア人、ロシア人、最後に二五七四年にポーランド人など、總勢四四五〇人を入れこんだのであるが、これらの移住者も、勞働に適さないことが、次第に分つてくるところとなり、この第二の試みも、ハワイ開拓の問題を解決してくれなかつた。國土開

拓には、必然的に勞働資源が必要なことである。

第三に目がとゞまつたことは、ラテン系の種族である。この種族は、南方的な溫度に馴合なれてゐる特徵をもつてゐる。しかし、勞力問題は少なからず、精神的なものと見ることが出來よう。同じラテン系と云ひながら、ポルトガル人は勤勉險約でよく、この島の開拓に適する能力をしめすことが出來たが、スペイン系は失敗に終つてしまつた。そのほか割合、良い成績をあげたのは、ポート・リーコ人である。百人の黑色人種、五百人のインド人なども試驗されてみたが、大半は離島してしまふに過ぎなかつた。いくらか、ラテン系のなかに「あかるみ」を見つけ得たやうでもあるが、勞力資源としては不充分であつた。第四として、目の向ふところは、日本、支那であつたと言へよう。二五一二年には、最初の支那人の移民をみたのであるが、二五四三年には、制限を受けるに至つた。必然的にわが國の人口資源から加勢を得なければならなかつたのである。日本人の最初の移民は、二五二八年に百四十八人の渡航を見たのであるが、しばらくの間、日本政府の方針に依つて中斷せられてゐた。二五四五年から再び始められ、二五五九年迄の間に、この島々に來た同胞は、六萬五千三十四人に及ぶに至つたのである。まさしく、今日、ハワイのある「いしずゑ」をきづきあげるに成功したのである。これぞ太平洋の孤島にそゝがれた日本民族の輝かしき人柱でなくてなんであらう。二五六七年の「紳士協定」以後は、もつぱら、婦人の移入に限られてゐたことであるが、二五八四年に至つて移民禁止にあふに至つたのである。それ以來、フイリツピン人の移植が始まる段取りとなつてきたのである。

植民地に於て、婦女子の缺乏をきたすのは、いづこの開拓地に於ても見られることである。とりわけ、これらの島々は太平洋の孤島であるから、婦女子の到着までには、かなりの年數がかゝつたのである。いまだ、フイリツピン人のごときは、婦女子を呼びよせるだけの地盤を確立してゐないので、兎かく、評判をたてられてゐることである。それにしても、ハワイの婦女子缺乏狀態は、面白い統計をあらはしてゐるので書き添えておく。二五五〇年には、女百人に對して、男百八十八人となつてをり、それから十年後の二五六〇年には女百人に對して、男は實に、二百二十三人の割になつてゐる。こゝを頂上として、男女の均衡が次第にとれかゝつてゐるのが見られる。二五七〇年には、女百人に向つて、男百七十九人、それから十年後の二五八〇年には、男百四十四人に下つてきてゐる。

私が、ホノルルに立ちよつた時間は、單時間であつた。表面はアメリカ國土の風貌を具へてゐるかも知れないが、その內面は、三千浬西方にある日本國につながつてゐることだ。今日の重要

なる位置を占めて、ハワイは太平洋の「にらみ」をなしてゐるのである。これを支配するものこそ、明日の覇者である。その島の内面は、日本人に依つて、取りおさへられてゐることを思ひだすがよい。十二年前あたゝかい「にはかあめ」におそはれた後、ワイキキの海邊をさまよつた當時を追想するものである。こんど來るときは、日本の領土になつてゐるときだと思つたことであるが、先ばしつた空想であつただらうか。

兎にかく、この氣候風土に向つても、日本人は「まかされる」ことを知らなかつたのである。他人種は、この南海の氣候に勤勉なることを忘れてしまふときに、砂糖きび畠の中にはいりこみ、パイナツプルの栽培に骨身をします、たち働いてゐるのである。いくら資源が世界にころがつてゐると云つても、これをうまく「いかしはたらかす」ところの民族が、出かけてゆかなければならない。ハワイ植民は、近代日本のさししめしてゐる最も力強い標識なのである。體力の上からも、精神の上からも「まはり」を乗りこえた勇ましい日本人の開拓史なのである。こゝに、日本人は「なにごと」でもなしとげてゆく意力の「たくましさ」を見るものである。

4　むかふぎし

1

わが國の「むかふぎし」にアメリカ大陸のあることを忘れてはならぬ。太平洋を名實ともに、「につぽんなだ」とするには、むかふぎしを日本國の勢力圏内におくことである。また、アメリカ側から云はしむるならば、その「あべこべ」のことを言ふことかも知れない。それほどに兩國は、相ゆるされざる運命のうちに發展をしてゐるのである。太平洋をはさんで、この二大强國がたがひに「しのぎ」を切り初めてゐることは、近代に於ける東洋と西洋との「つれあひ」が破れるかどうかの境ひ目におしたてられてゐることだ。古代から世界歷史は、東方文化と西方文化との「あらそひ」であつたと見ることが出來る。古代から東方民族は幾たびとなく、西方民族間に侵入突撃を加へていつたものである。しかるにその都度、からうじて、西方文化は存在權を握り得てゐたのであるが、今から四百五十年前後からして、新陸地の獲得に成功をしたのである。これらの新陸地から得る資源を利用して、壓倒的に東方文化を抑へ得る狀態にまで、立ちいたつてゐた風に見えたが、アジア大陸東方の一島嶼國に、東方文化の眞髓は、たもたれてゐたのである。その眞髓は、こゝ百年の間に、不滅の「のろし」を打ちあげてきてゐるのだ。これの「むかふぎし」にあたるものが、現世紀に果してゐる役割を、はつきりとして置く必要がある。この「むかふぎし」からして、いらぬ「くらさき」を突きこんできたり、「てだし」をしがちなのを、へし折ることが必要だ。北米合衆國は、たゞのアメリカ大陸だけの勢力圏の代表ではなくて、全西方文化の總大將として、のぞんできてゐるのである。前ヨーロッパ大戰に於て、覇權をにぎつたのはイギリスやフランスなのではなくて、實にアメリカ合衆國なのであつた。こゝに、東方文化と西方文化の總大將が、この太平洋をへだてゝ向ひあはせてゐることは、おのづから興味あることだ。

近代ヨーロッパの勢力が、この大陸に及んだのは、實にコロンブスの探檢からだと申されよう。皇紀二一五一年十月十二日は、アメリカ大陸にとつては呪ふべき日なのであつた。平和なアメリカ・インデイアンの夢は、うちやぶられてしまひ、現今では淋しくも「ほろびゆく民族」のなかに仲間いりをすることとはなつたのである。メキシコ、ペルーなどには、原住民に築かれた高度なる文化があつたのであるが、このあたらしき侵入者に依つて掠奪破壞されるに至つたのである。

原住民は幾度となく、この侵入者たちに反撃を試みたのであるが、機械文明の前に退却を敢へてしなければならなかつたのである。その勢にも依ることか、北米合衆國は、機械文明の最頂上に到達するを得たのである。機械をあやつることの出來ない民族は、退却を初めねばならないのだ。自然民族は、この高度に組みたてられた機械のまへに、あへなく屈服せしめられたのである。

機械をうまく「あやつり」より優秀な道具を作りだすかは、近代國家の國力を充實さすのに、最大要素となつてゐる。即ち、機械力の優秀性は、製産能力をあげる上に、直接、影響するところであるし、ことに戰爭を決定する重要因となつてゐる。すでに近代ヨーロッパ文明のきづきあげたところを、「機械文明」と申して、東方文化諸國では、けなしてゐるのであるが、それの「とりいれ」「あやつり」をいつまでも、なし得ずに留まつて居るならば、要するに敗北民族にあまんぜねばなるまい。その良き例は、東方諸國には至るところに見せつけられることだ。過去に於ける世界文化の原動力であつた、印度、支那の今日のみぢめなる有さまは、なにに依つてくるところだらう。この時にあたつて、勇ましく「機械文明」を取りいれたのが、大日本國なのである。面積の上からは一小國であつた、わが國が、勇んでこの「道具」を取りいれることをしなかつたならば、いかなる事態が生じてゐただらうか。全世界は、ヨーロッパ人の云ひなりに動かされてゐたことだらう。この一小國のつゝましき大英斷に依つて、世界人類をしひたげた「きづな」から、放ちうる希望をいだかせるのだ。つねに、ヨーロッパ人からの「しひたげ」を、正義の上に立つて抗議をつゞけ、そのあやまつてゐる植民政策を正しうるに至つてゐることは、ひとへにこの「機械」を、うまく「あやつり」「つくりだす」力に、めぐまれてゐたからである。

民族と植民の果す歴史の上から、この恐るべき「機械」について、もつとはつきりとした考へを打ちたてゝおかなければならない。西方の機械文明に對して、東方文化は「精神主義」を標榜としてきてゐる。確かに人間文化上深い重さと永遠性を打たてることに於て、西方文化とよき對象をなしてゐるであらう。即ち、西方文化は、人間文化の輕薄性と刹那主義に、その美しさを磨きあげてきてゐるのが顯著である。たま／＼、この二大性質の相違が、一方は「機械」を拒絕する傾向に向はしめ、他方はそれを樂しみ使ふに至らしめた原因である。そんなところから、「機械」と云へばヨーロッパ人をおもひ、それだからとて、一概に非生命的なものだと、けなし去ることは出來ない。精神主義者の立ちうる理論は、「人間」の「ねうち」がはづかしめられないところにある。云ひかへれば、物質の多い少いとかに依つて、精神の「うつくしさ」が踏みにじられないことである。それゆゑ、物質と機械萬能を唱へるアメリカ文明にむかつて、決然として反對する

ところである。そんなところからして、極端な精神主義者達は、「竹槍」をもつてすら、外敵を追拂ふことが出來るといふ樣な、その意氣はさかんなるも、事實としては考へうべくもない、暴論にすら落ちこみやすい。

精神主義者にして、往々、以上のごとき「あやまり」に落ち入り易いことには、注意がいる。これは眞實の精神主義でないからである。精神主義とは、「もの」を生かすところに最大價値がある。つゞいて、つねに勝利者の「ほこり」を持ちうること。物質主義者は、これらと、まるであべこべのものとして見られることだ。そんなところからして、精神主義者たちは、まはりの條件、狀態をよく克服して「かちうる」ところに、人間の努力、「はたらき」をあらはしうるのだ。ところが、「機械」はまさしく、精神主義者のもとめてゐることを、たゞしく、あらはしてゐるとも云はれうる。即ち「もの」を生かし「まはり」の條件を打ち破つていつてゐるのだ。よく批評家の言葉につかはれるところでは、ヨーロッパ文明は、「自然を征服する」と申されてゐる。しかし、ヨーロッパ人は決して、自然を征服しえてゐるのではない。高慢なるヨーロッパ的な心つきが、かゝる考へを持たしめるのであつて、「機械」が、その代表のごとく見なされることは、當を得てゐない。むしろ、自分たちが平素、おろそかにしてゐた水の力、空氣の力、熱の力を生かすところに、機械文化はなりたつてきてゐるのだ。水力電氣、蒸氣機關、飛行機、瓦斯などのごとく、人間能力を充分に補ひ發達せしめてゐることだ。太古ならば、これらの能力のひとつを持ち得ても「かみほとけ」になりえたであらう。機械を「あやつり」「つくりだす」力は、精神力のすぐれたるものにして、始めて成されうるのだ。展開力を失つたやうな精神主義は、いたづらに、高貴なる落伍者におち込んでしまふだらう。日本人は、よく、かゝる東洋の危險性を克服し得てきてゐるのだ。

この時、「アメリカ主義」は、精神にむかつての反省を缺いでゐる。物質を數多く製産しうる能力が、人間の「ねうち」を決定するかのやうに考へなしてゐる。こゝに、幾らアメリカ國が物資と機械の「ゆたかさ」を誇りうるにしても、世界に「ところ」を得せしめることは出來ない。それゆゑ、アメリカ文明は、最後には「ゆきつまり」に追ひこまれてくる。これは、ヨーロッパに「をはり」がきたと叫ばしめてゐる哲學者たちの理論は、このアメリカ大陸にも、そのまゝ押しあてることが出來る。現世紀に於けるアメリカは、世界を併呑するだけの資源にめぐまれてゐるかも知れないが、最後は、內部から破產、破綻するに決まつてゐる。この國土では、惠まれすぎたる環境によつて、「物資」と「精神」との連帶を充分に成し得てゐない。「精神」とは、外部から

の刺擊によつておこされる興奮ぐらゐにしか心得てゐないからである。アメリカ心理學のごときは、この哀れなる奴隷なのである。それゆゑ、精神の發奮は、宣傳と示威行列に依つて、成されうるがごとくに思つてゐるかも知れない。一度びアメリカをおとづれるなら、この「こけおどし」の宣傳と、示威行列に、心を奪はれるものがあるかも知れない。その極度に發達してゐる機械文明の中に、人間は、灰色と化して、やたらに欲望を追求して、さまよつてゐるだらう。あの高層建築も、ひとつの宣傳である。洪水のごとく、道路につゞいてゐる自動車も、大仕掛のハリウッドのセットも、ことごとく「こけおどし」の宣傳である。アメリカ人は、一日として、あたらしい刺擊なくしては、生活をなし得ないのである。學問をするのも、戀愛をするのも、農耕をするのでも、ことごとくが宣傳と刺擊なのである。刺擊がない日には、阿片喫飲者のやうに、身心ともにだらけてゐることにならう。戰爭とても彼等にとつては、ひとつの刺擊にしか過ぎない。

この新しい刺擊を與へるために、機械は高度に發達させられてきてゐる。あらゆる人間生活が、ビジネス（營業）となり果てゝゐる。人間の幸福とは「わがまゝ」と「おかね」に依つてゐる。その「わがまゝ」も「おかね」に依つて、あがなひ得るものであるから、朝起きるときから、夜寢つくまで、「おかね」のことで、頭はとりつかれてゐる。夫婦關係も、正義も、自由も、「おかね」があつて、始めてその效果をあらはし得るのだ。それ故、日本國では、恥辱と思はれるやうなことも、美ごとに「おかね」に依つて支拂はれるのだ。アメリカ女性の貞操は、この「おかね」に依つて、あがなひ得られるだらう。

近代植民の發端が、まさしく「おかね」を求めて、開始せられたことであつた。コロンブスは黄金の島國の「ニッポン」を、もとめあぐんで、この大陸に打ちあたつたのである。そんな運命のもとに、アメリカ文明は、開發せられてきてゐる。ヨーロッパの產業革命は、世界の資源をさがしあてねばならぬことになつた。植民の獲得が、あたらしき資源の獲得に於て意味を果してゐることになつた。植民地に於ける原住民なども、生產力の道具として扱はれるに過ぎないのだ。高度なるヨーロッパ機械文明は、あらゆる自然の資源を「しぼりとる」ことにあつた。かゝる機械文明に東洋文化國が「いきどほり」を覺えるのは、當然なことである。それの組織は、社會機構にまで發達をしてきて、資本主義時代にまで到着したのである。あらゆる機構が利益をあげることに主眼點がおかれて、人間の「ねうち」などは、かへり見られる餘裕さへなかつたのである。それゆゑ、近代の植民が、政治問題をひき起し易い領土や、人間などに眼を配つてゐなかつた。この點に於ても、近代ヨーロッパのたどつてゐる植民政策が、決して正義の上に立つてゐるもの

でないと言へる。いづこの國も、自國の「はら」をふとらすことに汲々としてゐたものである。それゆゑ、たゞ「利益」と「權利」を獲得することに主要點がおかれてきたのである。だから鐵道敷設權とか、鑛山發掘權とか、漁業權とか、通航權とか、いろ〳〵の利權が、互ひに强國と弱國との間に結びあはれたことである。その點、隣國の中華民國のごときは、完全にヨーロッパ諸國の植民地と化してゐたのである。

そのとき、北米合衆國は、自國内に尨大なる資源を持つてゐるので世界の一大長者國として、ふんぞり返り得てゐたのである。アメリカ人の最も得意とする態度は、胸をふんぞり返して、兩手の指先をチョッキの「かくし」に突きこんで、立ちあがつた時の姿である。それとも、葉卷をくゆらしながら、足を机の上に投げだして、人に應接するとき、ヤンキーの「ほこり」が持てたのだらう。なにか、よその國民の訴へごとがあるなら、頭をいくども下げてこい、何時でも聞きとゞけてやらうと言ふ態度である。各國の大使は、白亞館に何度となく呼びだしにあつたことだらう。北米合衆國は、世界情勢の裁判官として、のさばり出てゐたのである。その資源なるものを一通り、調べておく必要がある。豫想外に持つてゐることに、注目さゝれることだ。ドイツ國の資源調査表に依つて、二五九〇年、今から凡そ十年前の世界全生產量に占める、北米合衆國の生產率を眺めておくことにする。機械文明の三つの大切なる要素、石炭、石油、鐵を豐富に生產してゐるところには、あなどられないものがある。二五九〇年に於て、石炭は世界の三割八分、石油は六割三分八厘、鐵は四割一厘となつてゐる。近來、十年間ごとの表を、そのまゝ乘せておくことにする。

世界全生產に於ける比率（單位百分の一）

	二五六〇年度	二五七〇年度	二五八〇年度	二五九〇年度
石炭	三四・五	四二・九	五一・一	三八・〇
石油	四二・七	六三・九	六三・七	六三・八
鐵鑛	三四・七	四二・一	五八・七	四〇・一
鋼鐵鑛	三六・七	四三・九	五九・一	四三・四
銅	五七・五	五九・二	六三・四	三九・九
亞鉛	二三・四	三〇・七	五九・五	三二・七
鉛	三〇・九	三二・八	五二・一	三三・二
アルミニウム	四三・八	三六・八	四九・三	三八・〇
銀	三三・二	二五・八	三二・〇	二〇・四
金	二三・二	二一・二	一五・四	一〇・四

小麥	二七・五	一八・九	二五・九	一七・九、
玉蜀黍	七一・〇	八一・八	六九・二	五二・二
棉	七二・三	六五・五	六五・二	五四・〇
煙、草	六〇・三	六三・二	五三・五	三〇・九
甜菜糖	二・八	八・一	二三・二	一〇・七
燕麥	二五・二	二七・九	三五・九	二七・〇
大麥	一〇・四	一二・三	一三・五	一五・三

これらの資源表を見ると、殆んど全世界の生産高の三分の一以上を占めるものが、幾らもあることである。世界の富が、この一國に偏在するのも、無理からぬところであるが、世界史上、いまだ曾つて見ざる程の豊富な資源を、この一國に占有さして濫費さしておくことは、天理にさからふところである。しかも、この國に流れきたる移民をすら、皇紀二五八四年には、割當制を用ひて、禁止するに至つたのである。アメリカの不景氣と申さるゝ樣相は、凡そ他國の場合とは異なるところのものである。物資がゆたかに出來すぎて、なやんでゐる國がこの地上にはあることだ。すなはち、生産過剰の形をとつて、この國の不景氣が訪れてくるのである。たま〳〵、私はフーバーの不景氣時代といふのに、めぐりあはすことが出來た。禁酒時代であつたので、葡萄畠などは至るところに、なり放題に任してあつた。親切なところには「おこのみだけ、お採りになつてください」と、木札が建てられてゐるといふやうな狀態であつた。かれらの頭には、これらの物資を、いかに早く濫費しうるかに、經濟理論がなり立つと考へてゐる。ルーズベルトが、禁酒を打破ることに依つて、いくらか、不景氣を建直すことが出來ることになつた。まつたく近代に於ける瘋癲病的な國であるとも云はれないことはない。ルーズベルトが取り上げてゐる政策といふものは、ひとへに、このあたりに眼目が置かれてゐるのが見受けられる。アメリカ人の頭には、前ヨーロッパ大戰時代に、好景氣の最高時代をゑがきだした夢が忘れられなかつたのである。この度の世界戰爭に立ち至らしめたアメリカには、かゝる內部に含んでゐる深き傷がある。それは、物資のあまりに持ち過ぎて困つてゐる現狀である。

口では平和を唱へながら、平和にてはすまされない實情におかれてゐる。利益をもとめることに狂奔してゐるアメリカ人は、戰爭にまで、驅りたてられずにはおかない。この矛盾の中に、アメリカ國は、動搖をつゞけてゐるのだ。眞實にこの國の平和がのぞまれる時は、この資源を世界に解放することにある。自然の理にしたがつて、流れこんでくる民族に、門戸を開いてむかへるべきである。自己主義「エゴイスト」にかたまつてゐるこの國の指導者達は、世界にたえざる渦

亂をなげかけてゐるのだ。この國の「なりたち」は、近代に於ける最もはなやかな植民地として登場してきたのである。それゆゑ、この國には、民族と植民の問題が、幾つとなくころがつてゐるところ。初めに大體のこの國の歴史から見てゆくことにしよう。まさしく、この國の偉大なる「ほこり」は植民地から、獨立したところに、限りなき榮光をおぼえてゐることなのだらう。

2

アメリカ大陸は、ヨーロッパ國自體にとつては、「新大陸」として現はれてきて、その初期に於ては、純然たるヨーロッパ植民地としてのみ存在をゆるしてゐたのであるが、その獨立をゆるすに至つたことは、ヨーロッパ植民地政策の破綻をものがたつてゐるのである。その時からして、ヨーロッパは、むしろ、この新興國から、受身の狀態におかされたのである。近代ヨーロッパの滅亡は、實に、アメリカ大陸の植民地化に失敗したことから初まつたのである。

わが國からしても、このアメリカ大陸のはたしてゐる、民族と植民の地位は、おろそかに出來ないところだらう。その「なりたち」「おひたち」を一通り知つておくことが必要だと思ふ。ことに「むかふぎし」として、はたしてゐる色んな働きを思ひあはせるときは、尙更のことである。

アメリカ大陸は、すでにコロンブスの發見にともなつて、大旋風を巻きおこしたのであるが、その探檢に「あとおし」をしたものは、スペインの女王、イサベラに依つてである。必然的にスペイン勢力のもとに、この新大陸が伸長してゆく運命になつたところであるが、スペイン國の手をつけていつたのは、主として中南米國なのであつた。ヨーロッパに於ては、ポルトガル國が先づ近代植民地獲得に自ざめて、その國力の植えつけに進んでゐたところ、こゝに大きな横槍がのぞけられたことになつた。ポルトガル國は、すでに印度へ通ずる路の探檢調査にあたつての獨占權を、ニコラス五世法皇から與へられてゐたのであるから、こゝに兩國の勢力圈について「をりあひ」をつけねばならぬことになつた。ところが、スペイン人であつたアレキサンダー四世法皇は、スペインに都合の良いやうな勢力範圍を決めたことである。それ故、ポルトガル國が、だまつてをることでなく、こゝに兩國が、皇紀二一五四年に、トルデシラに於て、世界分割に相談をしあつたのである。この時の分割といふものが、ふるつてゐる、全世界を兩國の二大勢力圈として、したところで、地球を「まつふたつ」に切斷したことである。その境界線は、凡そ、グリニッチ線の西方、五十度の緯度にあたつてゐること。その線は南米のアマゾン河口に觸れてゐるもので、いまだ、はつきりとしない世界にあつかましく「すぢ」をひいた大膽さにもあきれるが、

世界分劃論の極端なるものとして、注目にあたひするだらう。この境界線の西方をスペイン圏内とし、東方をポルトガル圏内としたことである。それ故に、ポルトガルは、アフリカ大陸をめぐつてインド洋に出る海路を見出し、スペインは、西方からしてのインドへの到着に努力するところに、おのづから太平洋のあることに氣づいたのである。ヨーロッパ人にしては、自分らが、太平洋や印度洋を見つけたと云ふところであらうが、すでに、これらを利用してゐたアジア諸國のあつたことを、忘れてゐては困るのである。近代世界史が、ヨーロッパ人にほしいまゝにせられてゐるやうな印象を受けることに、極力、反對すると共に、その横暴、專斷してゐることに、ヨーロッパ文明の性格が見いだされるところだらう。その性格は、アメリカ新興國にも、受けつがれて行つた性格であつて、この性格が、世界をつねに渦亂におとしこんでいつたのである。この性格の前に、世界の他民族は、どれだけの迷惑を蒙つたことであるかも知れない。しかし、この性格が、ヨーロッパ文明を破壞にみちびく主導因だとながめることができる。みづからが、おごつてゐる間に、みづからが、くづれはてゝいつてゐるのが、西歐近代文明の特徴だといはれるだらう。その最後の破滅がちかづいてゐることを知らねばならぬ。わが國もよく愼みて、このヨーロッパ文明のくづれゆく一大原因に、目をとゞめておく必要がある。

コロンブスは、なんとかして、西方から東洋に到達しようと、その一生涯を終つたことである。かれの行爲には、大きな信念があつた。その信念によつて、新大陸はひらかれゆくのであるが、かれは、この土地が大陸であることには、知るに至らなかつた。その後、尙ほ、三回の探檢にのぼつて、西インド諸島、南米のオリノコ河口、中米の海岸をさぐることが出來た。しかし、彼れの信念を裏づける事實は、その後、證明される日がきたるのである。その信念とは、地球は丸いものだと斷定した一念にほかならない。西から西へ進んでゐる間に、いつの間にか出發點にかへり、東へ東へと進んでゐると、いつの間にか、西方とゆびさした「あたり」から歸つてくることになる。このことは、近代頭腦の上に大改革をもたらしめつゝあることである。地球が丸いことは、この世界に「うらおもて」のないことを知らせることになりうる。まさしく、近代と呼ばれる時代は、この地球が丸いものと、一般人が知りわたるところから始まつてゐるとも云へる。この一つの事實が劃してゐる時代の境界線は、中世の暗黑史から、近代の文明史へ發展さす一線であつたと見ることもできる。その點に於て、ポルトガルとスペイン國がたてたところの、トルデシラの境界線は、やがて「つぢつま」のあはぬことになるのである。皇紀二一八五年に至つて、サラゴサの契約に依つて、あたらしい一線を附加せねばならなくなつたのである。それは、グリ

ニッチ線の東方百十三度の緯度にあたつてゐるものであり、日本列島は、この線の近く西方に横たはつてゐることになる。それに依つて、再度、勢力圏の確定をなさねばならなくなつてくるのも、地球は丸いといふ事實がもたらすところの一挿話であるかも知れない。この事實は、いろんなところに近代文明の特徴をゑがきだしていつてゐるのだ。一日として、この「かんがへ」を抜きにして、世界といふものは、かんがへられないだらう。この點に於て、ヨーロツパ植民政策には無理があると思ふ。かれらは世界を「ひらたく」しようとかゝつてゐるのである。世界に「しきり」をしようとして苦しんでゐるのであるが、地球は「しきり」で取りおさへることのできない運命の上にたつて發達していつてゐるのだ。すなはち「まるく」をさまるべきが、自然の狀態なのであつて、そこに大日本國の、あたらしき使命が托されてゐるのだと思つてゐる。

近代のヨーロツパ植民史は、この地球は丸いといふ事實を裏づけてゆくのに、證明をなしたことである。アメリカ大陸は、主として、スペインの手で、これらの仕事がなされていつたのだ。皇紀二一六七年に、ダリエンの土地に、スペイン國最初の植民地は設けられるに至り、二一七三年にこの土地をよこぎつて、ベルボアが太平洋の波を眺めわたすことができたのである。新大陸のかなたには、またひとつの、だゞ廣い海洋がよこたはつてゐたのである。それこそ、太平洋なのであつた。このことは、新大陸を迂回して前進することの出來ることを知らせ、その後、七年にして、フエルディナンド・マゼエランは、その名に負ふ、マゼエラン海峽を通りすぎ、太平洋を突破して、遂にフイリツピンにまで前進せしめるに至つたのである。ヨーロツパ植民史の西方からする、アジア侵入の第一頁が、めぐられることになつた。

スペインは、キユーバ島を手に入れ、こゝを足場として、メキシコ灣や、ユカタンの海岸線調査、探検に從つてゐたのであるが、二一七九年、コルテーズは、メキシコ征服に兵を進めることになり、その後二ケ年にして、完全にものとなすことを得たのである。こゝに、アズテツク王朝は途絶するに至つたのである。このことあつて以來、パナマに植民するスペイン人達は、インカ王國に多量の金貨が保有されてゐることを耳にし、ピザロやアルマグロを旗頭として、ペルー、チリーの征服に出發する。こゝに於て、メキシコからチリーに至るアメリカ領土は、スペイン王國の威力のまゝに動かされるに至つた。海洋としては、カリブ海がその掌中のものになつたと言へるだらう。この時、ブラジルのみは、ポルトガルの探検によつて、開拓せられるに至るのであるが、中南米は概してラテン文化の勢力範圍なのであつた。

北米はそれにひきかへて、かなり趣きを異にしてゐたのである。この土地に移住を求めてヨー

ロツパから到來した移民の群は、宗敎上、意見を異にして來た新敎徒の仲間なのであつた。すなはち、フランスからするユゲノートや、イギリスからするピュリタン敎徒らである。前者は南カロリナやフロリダに到着をしたのであるが、後者はバージニアを土臺として發展を遂げてゆく。ことに、バージニアの經營には、名高いウオター・ラレーに依つて指導され、タバコの栽培がなされる。また、こゝに於て尙ほ宗敎上の見解に意見を異にする者たちが、このバージニア植民地から分離することになる。これが有名な「メー・フラワー」號の出發となり、參加するもの百一名と云はれる。俗に北米合衆國の指導精神は、この仲間達からみちびかれるに至つたと言はれる。やがて、プリモスの植民地獲得から、次第にイギリス植民地を擴大してゆくやうになり、オランダの植民地であつた、今のニユウ・ヨーク、また、スエーデンのものであつた、デラウエアを併合するに至つたのである。一方、フランスは、セント・ローレンス河をさかのぼつて、ケベック・モントリオールの建設、次いで、ルイス四世の時、ミシツピ河の流域を占領して、ルイジヤナの廣大なる植民地を營んでゐたのであるが、英佛植民地の衝突は、フランス側の敗北となり、パリー條約に依つて、イギリス世界征覇の基礎がなりあがつたのである。パリー條約の締結せられたのは、皇紀二四二三年のことなのであつた。それ以來、北米大陸の指導精神は、イギリス系の新敎徒の手に依つてなされるに至る。それゆゑ、自治の精神と信敎の自由とは、この新大陸の二大方針となつてきたのである。

しかし、イギリス國は、フランス國に打ちかつたと云へ、戰後の敗財困難をつぐなふために、アメリカに課税をせなければならなかつた。この課税問題から、兩國が次第にもつれてゆくことになり、遂にアメリカ獨立戰役はなされるのだ。ジョージ・ワシントンは、二四六三年七月四日獨立宣言書をたゝきつけたのである。この日こそ、アメリカ建國日として、アメリカ國最大の祝祭日のひとつとなつたのである。このことは、ヨーロツパ植民史に於ての「つまづき」をあらはしてゐる。これらの「つまづき」が、本國と現地との感情の「ゆきちがひ」が根本原因になつてゐると思ふ。本國を離れたものと、本國に留つてゐるものとの「かんがへかた」には、必然的に異なつてくる傾向がある。アメリカ國の示した歷史は、植民地が本國に決然と、反抗するところから始まつたことであつた。それも、ヨーロツパ植民政策には、かゝる「あらそひ」が、つねに含まれてゐる。ことに、ポルトガル、スペインの植民地政策などは、最も露骨なものであつた。つゞまるところ、金貨の獲得のためには、手段を選ばないところのものであつた。この政策が、反亂、反抗をひきおこさずには、おかないところである。

南米諸國も、それぞれ、獨立宣言を公にするものが、ぞくぞくとつゞく形となつた。二四七一年に、ベネズエラが旗擧げをしてから、それに續くもの、パラグヴィ、アルヂエンチン、チリー、コロンビヤ、ペルー、メキシコ、中部アメリカ合衆國、エクワドル、ボリビヤ、ウルグワイなど、スペイン國から獨立をとげたのである。新大陸に植民地を開拓したヨーロッパ諸國は「あぶはちとらず」に終つたことになる。それどころでない、アメリカ合衆國を頭梁にいたゞく、汎アメリカ主義の傾向が次第に濃厚となつてきはじめたことである。まさしく、世界指導權がヨーロッパに留まつて居るか、アメリカにゆづりわたされるかの時代に入つてくるのである。その第一の豫備行動として見られるものが、モンロー主義の宣言だと見なされよう。

この宣言のなされ來た、もともとの理由は、アメリカ國の獨立自衛のためなのであつた。ヨーロッパ政治の渦亂の中に捲きこまれることを、極度に恐れてゐたことである。初代大統領ワシントンも、ヨーロッパの政治關係から、無交渉でありたいと念願してゐたところ。アメリカ國が、かゝる「もつれ」のなかに入りこむことは、愚策だとされてきたところである。たまたま、相次ぐ南米諸國の獨立にあたつて、イギリス政府が、ロンドン駐在のアメリカ大使に覺え書を渡したところから、その端を發してゐる。それは、イギリス本國もアメリカ合衆國も、これらの領土に寸分たりとも野心を持ち合せないと共に、また、他國へゆづりわたされるときは、無關心たらざるを得ぬと云ふ申し込みなのであつた。時の大統領モンローは、ゼッフアーソンとマディソンに相談した揚句、モンロー主義の宣言をなすに至つたのである。すなはち「われわれの最初にして根底的なる公理は、ヨーロッパ渦亂の中に、決して入りこまぬこと。第二としては、新大陸の事件に、ヨーロッパをして干渉せしめざること」と言ふ手際よい、アメリカらしい率直な返答を、ヨーロッパ大陸に突きつけたのである。時は二四八三年十二月二日のことであり、この年の初めに、コロンビア共和國、ブエノス・アイレス政府、メキシコ諸州、チリーの獨立がなされ、翌年には、ブラジル國の獨立がなされるに至つてゐる。

尙ほ、この宣言のなされるに至つた理由には、アメリカ本土の北邊を、ロシアがねらつてゐたことによる。ロシアは、二四八一年にベーリング海の漁業權及び航海權の獨占を布告したことであつた。モンロー主義宣言の發布される五ケ月まへに、アメリカは、ロシア大使に抗議をおくつてゐる。それは、いかなるヨーロッパ國にも、アメリカ大陸には、あたらしい植民地をゆるさない方針であると傳へたことであつた。この方針は、二五二七年にアラスカをロシアから買ひとるに至らしめてゐる。

アメリカ合衆國の危機は、二五二一年から二五二五年にかけての南北戰爭にあつたゞらう。これは、北部と南部との風土の相違、社會情勢の違ひなどから起されたものであるが、共和黨の奴隷廢止に對する、民衆黨の奴隷使役との抗爭は、激烈となつていつたところである。たまたま、奴隷廢止の先鋒者リンカーンが大統領となるや、南部諸州はこれに服せず、北部より分離獨立、抗爭するに至つたことである。二五二三年一月一日より、リンカーンは、奴隷解放を實施すると宣言するに至つた。アメリカ人が、人道主義の保護者のごとく思ひやすくなるところには、植民以來の傳統の上に、この戰爭のもたらした方針の高尚なるがためであつた。この戰爭に依つて、ヨーロッパ植民政策の施してゐた、最大の罪惡のひとつを精算することが出來たと云へ、今日とても、徹底したところのものではない。現今のアメリカ社會には、黑人問題といふ、割切れない難題がのこされてゐることだ。これは、アメリカ社會に殘されてゐる、いな、白色人種にては、解決の出來ない問題であるかも知れない。

3

アメリカ合衆國が今日のごとく横暴を極めはじめるに至つたのは、近々百年のことである。今から百五十年前にもさかのぼると、總人口五百萬足らずのものなのであつた。幾ら自然資源がよこたはつてゐるとて、人口が伴はなかつたならば、開發が思ふまゝに任せられぬことは分りきつたこと。植民地開拓には、必然的に「ひとで」がいるものである。そこに奴隷をも使用せねばならぬことになつた原因がある。しかし、この奴隷問題こそ、ヨーロッパ植民地經營のさし示した代表的なものであると云へよう。いかにも人道救濟を叫ばしめるヨーロッパ文化が「うそ、いつぱり」に滿ちてゐたものであるかに思ひあたるのである。ヨーロッパの人道主義などとて、全く「うはべ」の假面であつて、その內心は鬼畜にひとしい行ひを敢てしたものであつた。アメリカ國土の開拓には、黑人種の勞働が、いかほどに役立つたところであるかも知れない。

たゞのアメリカだけの問題にとゞまらず、ヨーロッパ人は、世界各地の原住民を奴隷なみに扱ふとしてゐたものである。こゝには、ヨーロッパ文化と、東洋文化との二つの大きな「けぢめ」を明かにしてくれてゐる。一口にヨーロッパ文化とは、キリスト教主義の影響下にあり、セム人種の思想形態から離れらることが出來ない。自分らのみがすぐれてゐて、相手を抑へうることに依つて、世界秩序が保たれると考へてゐたのである。キリスト教ならざるものは、異教徒なのであつて、キリスト教徒になることは、白人の「さしづ」の言ひまゝになつた印しなのである。さ

といふ目的をもつて、キリスト教傳道がたくまれてゐたのであるから、世界キリスト教化は、世界奴隷化運動であつたのだとも言へるのである。宣教師達は、原住民を幾人改宗さしたかを報告することに得意なことであつたらう。それは、ヨーロッパ人が世界の住民を植民地化していつてゐる成績を報告するものなのであつた。ヨーロッパ文化は、他人種と對立の上に發展を遂げて行つてゐるので、今日のヨーロッパ人文學のなかにも、この對立性から離脱することを得てをらぬ。ヨーロッパは人種對立の上に、今日と云へども不安定のうちに動搖をつゞけてゐる。その時東洋古來の道は、相手と向ひあふのでなくて、相手の身となり、心となることが、人を治める上の第一義とせられてきたところであり、王道と慈悲である。ことに佛陀の教へのごときは、すべてのものが「ひとつの心」に歸一することに大念願があつた。それは無理强ひの形でなくて「發心する」人格責任の上になされてゆく「めざめかた」なのである。この東洋の行き方の中にこそ、眞實の人間開發の道は明らかにせられてゐる。わが國の植民地政策は、相手を抑壓することではなくて「まつらはしめる」行き方をとつて進展しつゝあるところにも、崇高なる精神が受けとられるのだ。崇高なる精神のみが、世界の行き道を、さししめすことができる。

その點に於て、リンカーンの奴隷解放宣言は、名目たりともアメリカ合衆國が人道主義の花形として立ちうるに至つた基礎があり、人類平等の名目を幾らか取直すことが出來たのである。どうかするとアメリカ國土が、人類解放の理想地のやうに思はれるのであるが、現實は決して、キリスト教の虚僞的なものから、完全に一歩も離れうるに至つてゐないのである。黑人排斥とか、支那人排斥とか、日本人排斥とか、つぎつぎに起つてくるところの事件を見るだけでも、アメリカは決して人道國家ではないことを證明してゐる。いまだ植民地奴隷化のヨーロッパ文明の原則から清算し切つてゐないところに、アメリカ國が世界動亂の種子をまきつゞける役目をしてゐることである。しかし、南北戰爭結末後のアメリカが一段と信用と理想の方向とを深めたことに間違ひない。そこに世界の人心をひきつけることができたし、他日世界發展への準備ともなつてきたところであらう。世界各地から移民の波が、理想の夢をゑがきながら、この大陸へと打寄せてゆくやうになつたのである。一二四八〇年から一二五八〇年の百年間に押し寄せた移民數は、三千四百萬人にのぼつたことであり、一年間の平均は三十四萬人になることである。しかし、近代の海上航行の發達は、それ以上の人數を運んでゐたことは事實である。一二五六〇年から一二五七〇年の十年間に及ぶ一年の平均は、八十八萬人に及んでゐることに於ても了解できよう。年々八十八萬人の移民が、この大陸へ押し寄せてゐたのだから、移民禁止に思ひあたることも、萬止むを得な

いとしても、それに人種問題をからませたことは、アメリカ合衆國の建國以來の大失敗である。かゝる多くの人口を獲得し得たことは、急激にこの國土を世界一流の國家にまで押しやるまでに至らしめた。その人口の飛躍ぶりにも、恐るべきものが示されてゐる。百五十年前にあたる二四五〇年には、五百萬そこそこであつたものが、その後五十年もたつた二五〇〇年には二千萬になんなんとし、更に五十年を經た二五五〇年には六千萬を突破し、今から十年以前の二五九〇年には、一億二千萬を超ゆるに至つたのである。それ故、近々四十年間には、六千萬からの人口が殖えたことになり、このことは、ひとへにアメリカ國の國力充實に他ならなかつた。この國力充實はどんな方面にあらはれたか。その第一に見られることは、モンロー主義に依つて、南北アメリカ南大陸を自個の勢力圏内とすることゝなのであつた。すなはち、後程發達を遂げて行つた汎アメリカ主義なのである。この政策は、アメリカ一國のみにとゞまらず、世界各地の動きと關聯のあるものと言はれえよう。

西半球の防衛、平和保持を主眼としての「よりあひ」は、初めに於ては、中南米諸國を中心として展開せられていつた。せつかく獨立し得た諸國が、自衛のために團結をはからざるを得なかつたのである。その第一回の會合は、シモン・ボリバル（二四四三―二四九〇）に依つて提案せられたものである。シモン・ボリバルこそ、中南米獨立運動の旗がしらなのであつた。その一生は、血と涙の榮光にかざられ、まさしく冒險小說そのもののごとくであつた。彼の指揮のもとに獨立を遂げた諸國は、ベネヅエラ、コロムビア、エクアドル、パナマ、ペルー、ボリビアに及んでゐる。ことにボリビア國は、彼の名前に因んで國名としたところである。最初の會合は、二四八六年に、パナマに於て取行はれ、コロムビア、グアテマラ、メキシコ、ペルーの代表達があつまり、相互の政治、經濟問題の提携について相談しあつたことである。その後幾度も會合が催ふされたことであるが、本腰になつてアメリカ合衆國が參加してきたのは、餘程後のことである。

アメリカ合衆國が音頭取りとなつて、汎米會議が催ふされるに至ることになつた。しかし最初の計劃は、時の大統領（ガーフィルド）の暗殺に依つて七ケ年も延引となり、その實現をみたのは、二五四九年十月二日のことである。世に第一回の汎米會議と云つて、サント・ドミンゴを除く全西半球の諸國の代表がワシントンに招待せられたのである。この時からして合衆國は名實ともに、西半球の覇者になりすましてゐることだ。合衆國の勢力圏が確保せられるに至つたのである。その討議は、翌年の四月十九日迄に及び、相互の關稅、通貨、交通、特許權、通商、衞生設備、度量衡などの政治、經濟の諸問題である。汎米會議が主として、政治、經濟を中心としてゐ

るところに、アメリカ國の植民發展の特色が見られる。後年、アメリカ合衆國が、東洋に働きかけてくる場合にも、政治、經濟の相互援助を名目として、その國力發展を植えつけてきてゐる。この會議を通して、汎米同盟が結ばれることになり、事務所はワシントンに常置せられることになつた。その後、汎米會議は回數を重ねて、各地に催ふされてきてゐるのであるが、廣地域へ國力をひろげてくるときには、かゝる會合をつゞけることになる。曾つて、わが國に於ては、一年一回「神つどひ」が行はれたと云はれる。出雲の土地には「やほよろづ」の神々が集り給ふて、國土經營に心を碎かれ給ふたところであり、その時國土經營の一つに、相互の結婚が言ひ交はされたものと見える。出雲大社が「緣むすび」の神として、今日、崇敬を受けてゐるところには、こんな原因があつたのであらう。わが國の國力發展には、この方式が常に役立ちゐることを思ひ合はすものである。世間には、道義的な植民地經營も提唱せられてゐるところであるが、日本國力の發展は、生命と生命との「つながり」すなはち「むすび」の精神のなかに根本理念があるやうである。尙ほ、廣地域へ向つての統治政策を二三ながめることにしよう。

ヨーロッパ古代に於けるギリシヤ國家は、本國と植民地との「つながり」を強化するために、四年ごとにオリムピア競技を擧行してきたところであり、ゼウス神の神殿を中心として、諸地域の團結をはかつたものである。あきらかにギリシヤに於ては「まつり」が中心となつてゐることであるが、飽くまでギリシヤ人至上主義にもとづいてゐるところであつて、わが國の如く諸民族を抱擁する寛容さが見られない。廣地域にわたつて、政治力が及ぶには、その背景に精神文化がなければならぬに決まつてゐる。ギリシヤ國家は、本國の精神文化の高さに自信をもつてゐたのであるが、その自信を失つた時に、その勢力圏はくづれはてゝしまつたのである。しかし、このギリシヤの統治政策も本國中心の植民地經營には、理想的なものであつたかも知れないが、諸地域の原住民は野蠻人として取扱はれ「ところ」を得せしめられないことに終つてゐる。

「まつり」を中心として勢力圏を確立するところには、中心歸一するところが求められてくる。その代表的なものとしては、宗教勢力圏が擧げられる。カトリック教では、ローマ法皇が絕對權を所有してゐるところであり、全教徒は法皇に歸屬してゐるところである。これと同じやうなことが回教徒間にも、汎イスラム主義運動として、今から六十年も以前頃から唱へだされ、主要目的はヨーロッパキリスト諸國に對抗すると共に、全教徒の一致團結に主眼點がおかれてゐた。ことに、アブヅル・ハミツド二世トルコ皇帝は、その旗頭として活躍をしたのであるが、國籍の如何を問はず、トルコ皇帝に絕對歸順をすべきとの命をだしたので、政治問題とかちあはねばなら

なかつた。ことにキリスト諸國は、この運動を危險視し、その抹殺に努力を拂つてきたものである。この運動は二五七一年、サロニカ會議に依つて、運動の徹底化を申し合せ、世界各地から代表を年々送り出して協議をするように取決めた。かゝる運動を通しても、廣地域に勢力を伸ばす段になると、いかなる點に、歸一・同一點を見出すかゞ重要問題となつてくるのだ。アメリカ合衆國はその歸一點を利害關係に結びつけてゐるところで、アメリカ主義の功利的なことが伺はれる。この他、廣地域を統治するためには、人種文化とかゞ基本にせられてくることは當然なことで、汎スラブ主義とか、汎ゲルマン主義とかはその代表的なものである。わが國に於ても大アジア主義の立場から、中華民國と同文・同人種であることを口にせられる人々の多いのも同一論據である。こゝでは汎アメリカ主義と聯關を持つてゐるところの汎イベリア主義に一目を拂つておくことにする。この汎イベリア主義もあきらかに、同文・同人種の上に結合點を見出さうと努めてゐるところである。

汎イベリア主義は、米西戰爭に依つて、スペイン勢力が西半球から一掃されることに依つて、文化經濟的にも結合力を保つてゐようとするのがこの運動である。中南米の二十ケ國の開拓者達は、本國をイベリア半島にもつてゐたスペイン、ポルトガル人達なのであつた。そんなところからして祖父母の血を分けあつた母國土と關係を保ちつゞけようとするもので、その指導理念は各國の文筆家によつて高唱せられたものである。スペインのアルタミラ、ブラジルのリマ、チリーのアルバレズ、ペルーのカルデロンのごとき諸氏を列擧することが出來る。この運動の結果、いろんな行事が取行はれるに至つたもの。二五八〇年には、マドリツドに於てイベリア、アメリカ郵便協定、二五八六年には、スペインと南米諸國間に航空協定、二五八九年にはセビラに於て、イベリア、アメリカ諸國の博覽會が催ふされたがごときである。平素の交通融合に依つて勢力圏を確保しておかうとしてゐるもので、汎アメリカ主義に對抗をしてゐるところが見られる。

尙ほ、廣地域統治の案として名高いものには、クウデンホーフ・カレルギー伯爵に依つて二五八三年に提唱せられた汎ヨーロツパ主義などがある。彼は日本人の混血兒であり、ヨーロツパ諸國の合一を夢想した平和主義者である。彼の說はフランス政治家達に高く買はれたところであるが、どちらかと云へば理想案の譏りをまぬがれない。汎ヨーロツパ聯盟をウイーンに組織して、「汎ヨーロツパ」なる月刊雜誌を出してゐたことであるが、ドイツ國の合併と共に倉皇として身を逃れたと傳へられてゐる。

モンロー主義が世界に撒いた波紋は、實に大きなものであつたと云へる。現在に於ても廣地域

國の政治・經濟・文化形態が色々と考究せられてゐるところである。この汎アメリカ主義に依つて合衆國は、世界活躍に向つての一大地盤を押へたことになる。これを足場にして、アメリカの向けた野心の目は、アメリカ國の對岸土たるべき東洋へである。そこに至るには、世界一の大海太平洋がよこたはつてゐる。この大海を抱きかゝへる意味に於て、アラスカとパナマ海峽の獲得は、今日の太平洋問題から見れば重要問題なのであつた。アメリカ合衆國からすれば、植民地發展の一段楷であつたかも知れないが、今日の日本人にはないがしろにしておけぬところである。一通り調べておくのを妥當とするだらう。

4

アメリカ合衆國力の充實は、人口・政治力・經濟力・軍備力などに於て發展するとともに、領土面に於ても、その力があらはされずには置かなかつた。普通、歷史家などがモンロー主義を變更して、帝國主義を執るやうになつたと說明するところだが、要するに國力充實發展の姿にしか過ぎなかつた。その方向はヨーロッパからのうるさい「もつれ」に落ち入らない爲に、太西洋方面を避けて、おのづから太平洋方面にのびることとであつた。二五五八年には、ハワイを合併したのみならず、米西戰爭によつては、フィリッピン諸島、グアム島を獲得してゐる。これらは後年軍事根據地、航空基地、海底電線基地としてアメリカ國力の動脈線として役立つてきてゐたのである。一は太平洋制海權とも一はアジア大陸への封鎖にその目的があつたことなのであらうが、これらの目的とことごとに利害關係の相反するものには、東洋の新興國日本が控へてゐたのだ。兩者の「いがみあひ」は當然起こされるべきものであつた。國力の充實によつて國家興亡の「あらそひ」がおこされるのが當然である。しかし、白歐人の命ずる號令とは、諸國民を奴隷化するに過ぎないのだ。人類の平等、平和が眞實に生かされるためには、これらの野望を打ち破るべきである。

太平洋への包圍體制を採らしめるに至つた二大據點は、アラスカとパナマ運河であらうと見なされる。曾つては、アラスカは北方の生產力のない交通路の開らかれない、文化の果つるところであつたかも知れないが、近代には、その容貌をかえてきてゐたものである。今から二〇〇年前ロシア政府はデンマーク人のベーリング氏とロシア人のチリコフ氏とをアジアの東北方に探見調査に行かしめ、目的は毛皮をうることにあつた。アリュウシャンの島々には、毛皮の豐富に產することが報告せられてからは、獵獸家達は島々傳ひにアリュウシャン列島をわたり、北米大陸の

北西部までに、手を延ばすに至つたのが今日のアラスカである。しかし横暴なる白人侵入に依つて、弱き民族達はながらく虐げられねばならぬ運命におかれた。すなはち、エスキモーと云はれる住民である。アリユウシヤン列島の住民は、ロシア人侵入以前には二萬五千人も居たものであるが、これらの獵獸家たちの迫害によつて、殆んど全滅さゝれるに至つたものである。二四八〇年には、わづかに總人口千八十人を算するに過ぎないのである。現在は、おとなしき基督敎徒としてこれらの原住民は白人の奴隷として甘んじてゐるのだ。

二四五九年には、ロシア、アメリカ皮革會社がアラスカの地に建設せられて、商業權の獨占を行つてゐたことである。二五二七年に至つて米人セワード氏の提議にもとづき、アメリカ政府がたゞの七百二十萬ドルで、ロシア政府から買ひとるに至つたもの。その表看板は、モンロー主義にもとづいてゐる所であると云へ、その目的とするところは、カナダ政府の勢力を封殺することにあつたのだらう。これに依つてカナダ政府は次第にアメリカ政府の勢力圏内に歸屬せねばならなくなつてゐるやうだ。ところが後年に及ぶに至つてますます重要なる地位を示しはじめつゝある。それは太平洋圏を建設する上にとゞまらず、産業方面からもアメリカ國に重要なるものとなつてきてゐる。二五八五年の水産額だけにても、四千萬ドルを突破してゐるし、鑛山額も二千萬ドル近くを示してゐる。しかし、アラスカはもともと人口稀薄の土地で一向に增加の傾向を示してないが、今後には餘程變化の起ることも考へあはされる。全人口は、五、六萬程度のものであるから全面積の百五十三萬平方粁からすると、一平方粁に〇・〇四人の割しか住んでゐないことになる。二五八〇年度の調査では、全人口五萬五千四十人のところに日本人が三百十二人存在してゐることは注目に價ひする。そのとき、支那人は五十六人を算するにとゞまる。後の大半はアメリカ人で二萬七千八百人を算し、原住民達は二萬六千五百六十人となつてゐる。しかし、尙ほ考へあはされることは一年間には、二、三萬の勞働者が出稼ぎに來ては、かへつてゆくことで多くは夏期にかぎられてゐる。これは植民に於ける「わたりどり」の現象と呼ばれてゐるところのものだ。一方アメリカ合衆國の方が、勞働賃金の良いときには逆に植民地から本國へ押し寄せてくるやうになる。これでは植民の意味を果さないことになるから、常に植民地に於ける本國人の報酬は、本國土に於けるより、はるかに高給で迎へられる原因が見られるわけだ。

アラスカの缺點は交通上の線路として、あまり役立たなかつたことである。それには、地勢、氣候條件に拘束されてゐたところのものであるが、西半球と東半球とを連絡する北方道路中繼場として次第に重要さを增してきてゐる。もともと、このベーリング海のあたりは民族交流の一道

路として役立つたところである。アメリカ・インディアン達も曾つては、この道路をつたつてアジア大陸からアメリカ大陸へと移動したものだと豫想せられる。尚ほ、現在千二百哩の長さに及ぶアリユウシャンは、アメリカ軍の日本列島侵入への重要なる道路だと云はれてゐることであるが、あべこべに日本側からも云はれること。恐らく日本軍がアメリカ本土攻撃への大きな足場となるのは、この島々ではないかと思はれる。北太平洋の頸飾をなしてゐるこれらの島々は、皇軍の到來を待つてゐるだらう。その上、好都合なことにはアラスカ公路といふ、大きな正門道路をひらいてくれてゐることだ。この道路の建設に依るだけによつても、アラスカの地位は、見ちがへたものとなつてきてゐるのだ。この道路を使用して、月輸送額を一擧に二十萬トンに引き上げようと工事をはこんでゐることだ。一六〇二年三月に起工をして、同年十一月には略完成を告げたと言はれ、經費三千萬ドルを費してゐる。カナダのブリチツシユ・コロムビア州のフオート・セントジヨンから、フオート・ネルソン、ホワイト・ホースを經て、アラスカのフェアバンクスに到達してゐるもので、二千六百餘粁に及んでゐる。また、フェアバンクスから更にのびてベーリング海にのぞむ、プリンス・オブ・ウエルス岬までの一千粁にも至るものである。民族發展に於ける道路の位置は、はなはだ大切なものだと言はれよう。各國とも交通路の確保に躍起となつてきたところのものである。

われ〳〵が耳にしたところでは、いろんな道路があつた筈である。民族が移動のために採用したところの道路、太古にあつては河川が有力な民族道路、文化道路を形づくつたことが容易にかんがへられる。古代文明が河川のほとりに發達を遂げたことは、交通路を確保するに便利なことであつたことだ。インド文化に占めるインダス河、支那文化の黄河、メソポタミヤのチグリス・ユフラテス河、エジプトのナイル河のごときを思ひあはすことができる。また、アジアには古來東西をつなぎあはすところの通商道路が見られるところで、世に名高いものに、天山南路、天山北路と呼ばれてきたところのものである。兩者とも甘肅省の燉煌を起點として、天山南路はロプノールの北を經て、ホータン地方に出で、それから南にむかつてインドに達する道である。天山北路は北向ひ通りに通じてカシユガルに出で、更に中央アジア、サマルカンドに至る道である。これらの道を通じて、色んな文化文物が運ばれきたところで思想文化を傳へるに、重要なる役割をしてゐる。今日、中央アジアの發掘に伴ひて、佛教傳播の路が明かにせられつゝあるがごときもの。更に國内統一のために、道路の改修擴張が行はれたことは支那のごとき廣大なる地域にわたる國家に於ては、つねにつきまとつてゐる問題であつた。しかるに近代に於ては、この政治道路

に意がそゝがれなかつたために、支那の國內分裂を來たし易かつた原因をさぐり得ることができる。「道はローマに通じる」と言はしめたローマ帝國は、その政治力の强大さを誇つたところの格言である。ところが、これからの世界に於ては「道は東京に通ずる」と言はしめるだらう。政治統制力の上に於て大きな役割を果してゐる許りでなく、軍事的な「にらみ」をきかしてゐることである。一旦動員のなされたとき、短日月に兵員を動かし得るかは、決戰能力を强化しうるだらう。ドイツ國內に放射狀に建設されつゝあつた「ヒツトラー道路」は、果たして强力なる戰果をもたらすことに成功をしたものである。更に植民政策には、道路建設が役割を買つてゐることは知られたこと。あたらしき領土を切りひらいてゆくことは、道を通じることであるとも言へる。現代にあつては、自動車、汽車、汽船など交通機關がこれらの任務を遂行してゐることが分る。それ故に、道路敷設權とか、鐵道敷設權、海路開拓などが、つねに民族躍進の姿として眺められること。今日の滿洲のきづきあげられたのは、ひとへに滿洲鐵道株式會社の果した大きな役割に驚かないものはあるまい。これらの交通路の獲得について、大きな意義をもたないやうでも、他日、大きな礎石になることはいくらもあらう。それを云ひかへれば、姿をかへた植民の一方法であるとも見なされる。航空路の開拓についても、近代、人心をひき初めたところにも、やはりこんな問題がひそんでゐたのだ。アメリカが、サンフランシスコからマニラまで、汎太平洋空路を開拓していつたところにも、太平洋は、アメリカの實權內にあると思はしめたことかも知れない。しかし、こゝにきづいたところの航空基地が、同時に軍事基地をなしてゐたことである。まさに制海權と云ひ、制空權と云ひ、交通路の安全確保にあることだ。近代戰に於ては、輸送路の確保如何が、勝敗の鍵を握つてゐるとも考へられるに至つてゐる。

然し、近代は何と云つても海洋航路の發達から文明がひらけて行つたものであるし、その海洋時代は、尙ほ、終末をつげたものではない。その海洋航路の歷史に於て、二つの大きな事業の成功があつた。一つは、スエズ運河であり、二千五百十九年にその仕事にとりかゝり、十年間の工事と、四億七千萬フランとの經費をかけて、千三百二十九年に終了をみたものである。この運河に於て、アフリカ迂回の距離を、七千二百粁をもちゞめることが出來たもので、東洋と西洋とをつなぎあはす上に於て、いかに大切なものだつたかゞ分る。しかし、考へようによつては、この短距離を切りひらくことに依つて、歐洲諸國は、東洋の植民地化に、どれだけの便宜を得たか、はかり知られないだらう。殊に、この運河の實力支配と利用に依つて、イギリスは、政治的、軍事的、經濟的優勢を、たもち得たのであつて、英國の勢力を打破しようとするのであれば、この

運河を奪取することでなければならぬ。こゝは、イギリス植民政策交通路上心臓をなしてゐるとも云はれるだらう。この新しき心臓を世界交通史上に、植えつけたものは、レセップ氏である。このスエズ運河の成功は、ひいてはアメリカ兩大陸を結ぶパナマ地峽に注目を留めるに至つた。パナマ運河がアメリカ國の手に移るに至つたことは、アメリカ國の太西、太平兩洋に動かすべからざる「かけはし」を渡したことになつた。ことに太平洋に向つての軍事行動をたやすくせしめるに至つたことは、日支兩國に對して、强引きな外交方針で押し通せると思ひあやまらせたことにもなつた。

パナマ地峽を切開いたならばと、切實に考へしめ初めたのは、カリホルニヤに金鑛が見つけられてからのこと。スエズ運河に成功したフランス國は、この事業の實行にも乘り出して來て、二千五百三十八年、一千萬フランで權利金を買ひとつたものである。其の後、レセップ氏の立案に基き、總工費八億四千三百萬フラン、凡そ、スエズ運河總工費の二倍をかけて取掛つたのだが、豫定通りに進まなかつた。その後、七年間を經た二千五百四十八年には、豫定工費をはるかに越えて十四億を支出したのに、工事は三分の一しかはかどらない狀態にたち至つた。其の上、勞働者は風土病にてしきりに倒れて行き、其の翌年に於て、この設立會社は莫大な債務のため破產に立ち至つたもの。フランス國では「パナマ醜聞」として五百名からの代議士が賣收せられたと云ふ前代未聞の一大醜態をさらけ出したのにも、性こりもなく、數年後には、再度設立會社を設けて建設に取掛つたのである。しかし、やがて、資金難から工事不進捗に落ちいつた。こゝに於てアメリカ合衆國が四千萬ドルを拂つて、第二パナマ設立會社から權利金を買ひ占めるに至つたのである。

いよ〳〵アメリカは二千五百六十三年に、運河地帶の讓渡をコロムビア國に迫つたのだが、拒絕されるところとなつた。そこで、一奸策をひねり出したことは、パナマ地方に革命軍をたくらんだ上、獨立宣言をなさしめたと共に、直ちに承認をなし、軍事保護を敢行したものである。全くアメリカらしい植民政策が、こんなところにも見うけられることだ。かくして、パナマ共和國と條約を取結ぶことが出來、パナマ運河地帶の自主性を、一時拂ひ一千萬ドルと、每年二十五萬ドル拂ひ込むことに依つて買取ることを得たのである。二千五百六十六年、アメリカ議會は、パナマ運河設立を決議し、工事費及び工事期間の點から閘門式運河によることになつた。こゝに注意を要することは、フランス政府と違つて、準備工作に三分の一近い期間、三ケ年を費したことである。その間に衛生設備、住宅地區、鐵道改良、資材勞働力の集結を待つて起工に掛つたこと

で、この方法は、特にアメリカ人の好んでなすところである。恐らく戰爭をしはじめるにしてもかゝる準備期間といふものを豫想するものらしい。それ故この準備期間にアメリカを打破するのが一番賢明な策と思はれる。「でばな」をくじいてやることは、歐米人を叩きつけるに最もよい戰法とも見られるだらう。

總工費三億六千六百六十五萬ドルをかけて、二千五百七十四年八月十五日に開通をなすに至つた。その後、一年間に通過した船舶は一千七十五隻をかぞへ、總噸數三百萬トンであつたが、二五八九年から二五九〇年間の一年間には、六千百八十五隻の船が通過してをり、總噸數は開通時の十倍化して三千萬トンである。其の中でも首位を誇つてゐるのがアメリカであり、二千五百八十八年から二千五百九十九年の統計によると、四割五分がアメリカ、三割がイギリス、ドイツが五分、ノルウェーが四分、日本が三分で第五位を占めてゐるが、今後の活躍を思はせる。我が國につゞくものは、オランダ、スエーデン、フランス、イタリー、デンマークなどがある。二千五百八十六年には、アメリカは海軍守備隊を進駐せしめて、こゝを命掛けに守ることになつた。太平洋艦隊を四十八時間以内に通過せしめる、といふのだから、如何に重要なる運河であることが想像せられる。しかし、アメリカのみがアラスカ、パナマ、ハワイ、フイリツピンを得て太平洋を包圍しようとしても、なか〳〵出來るものでない。そこには日本民族の挺進隊員が、ぞく〳〵として此の太平洋を横切つてアメリカ大陸へ渡つてきてゐるのだ。すでにハワイに於ける日本人の活躍を目にすることを得た。アメリカ本國土に於ける日本人も、力一ぱいに戰つてゐるのだ。今までのところまでにも推察せられるやうに、アメリカは日本國の植民地を要求して、其の方針をすゝめてゐたのだ。その際、キリスト教宣教師などを通じてアメリカかぶれになつてゐたりした日本青年男女の氣持などは、今からすれば憤飯の至りであつた。それ國際親好とか、國際精神とかに唱和してゐる間に、何時の間にかアメリカ人の奴隷になりつゝあつたのである。かゝる甘言と恐喝とを混ぜあはして、日本國の發言權、行動權を封殺しようとする合衆國に對しては、堂々と戰ふべきが日本人の本務であらう。たゞ一つの解決點は、アメリカがその惡心をひるがへして、我が國に謝まつてくる日のあるばかりだ。アメリカがどんな仕打をしてゐるかは在米同胞の生活をみたならば、萬事飲みこめるかと思ふ。

5　あまつをとめしま

太平洋を夢うつゝに通りすぎてしまつた。船は豫定通り進航をつゞけてゐる。やがて、一、二日の中にサンフランシスコ港にとゞくと言ふころになつて「移民局」とか、エンゼル島（あまつをとめ島）の話しがしきりに出初めた。凡そ、內地では耳にしたことのない名前である。始めてアメリカ本土へ上陸するのであれば、そこへ送りこまれて取調べを受けるだらうとのことであつた。アメリカ歸りの同胞は、決してこんな場所のあることを口にしないものである。アメリカ合衆國はまるで樂天地のごとくに言ふのが口癖である。しかし、そんなことを言つてゐるものは、餘程の「まぬけ」か「まけをしみ」を云つてゐるもの。關東大震災の弱り目につけこんで實施した移民禁止法は、わが國力を見くびつての仕業なのである。一度び海外へ出づれば、國力が現實の問題としてぶらさがつてゐるのだ。滿洲事變は、自由主義國家群の反對にあつてゐたと言へども、わが同胞たちは、海外にあつて勇躍歡喜してゐたのである。アメリカ社會に於て、日本人の顏が幅を利かし始めてゐたことも事實である。「にくまれご・よにはゞかる」と申されながら、國際競爭にあつては、あく迄も實力がものを言ふのである。日本の聯盟脫退は、わが國の地位を世界に認識さしたものなのであつた。おとなしくしてゐればつけあがつてくるアングロ・サクソン族に對しては、それ相應の外交をすれば良いのである。軟弱外交は當時、非難の的であつたかも知れない。遂に我が國が强行手段に訴へて迄、民族生命權擁護のために立ちあがつた時に、私は本國を離れて「むかふぎし」にたどりついてゐたのである。

移民官が來て、船上で取調べを開始したのであるが、直ちに「島行き」の判決を受けたもの。一晩、本船で居泊りすることになつた。目の前にはネオンサインの點滅するサンフランシスコ港が橫たはつてゐる。一種異樣な汽笛が錯綜しあふ他國の港。波止場に橫づけになつてをりながら上陸できないのだ。身內のもの、知合のもの達が出迎へにきてゐるとの知らせまで受け取ることが出來るのだ。移民法のいかに人を喰つたものであるかと言ふことに思ひあたられるだらう。一晩中荷揚げがなされてゐて、起重機の音で喧しい。わが國からの絹糸を受けとりに、特別貨車がついてゐるのだ。農村で不眠不休の結唱が、アメリカ本土に侵入をして行つてゐるのだ。商品だとて國力の一部なのである。この荷揚げの音を聞いてゐるときは、少くとも良い心地になれた。幾ら防がうとしても、防ぎえないものが幾らでもある。農民の汗の結唱は測り知られない點に於て、アメリカ人の生活を侵略してゐるのだ。絹の靴下、絹の首卷き、絹の腰卷き、それらの中に

アメリカ人を軟弱墮落におとし込ませてゐるのだ。商品の遂行してゐる戰略は、なか〳〵おろそかに出來ない。

また、その「あべこべ」のことが、アメリカ人の側からすれば言ふことができる。すなはち世界をして「アメリカ仕込み」にすることは、アメリカ政策の重要なるものであつた。アメリカの機械化を世界にばらまくことなのである。それに依つて、便宜主義の思想を侵潤さすことを得て他日アメリカ植民地經營に安からしめようとしてゐる遠大なる計劃である。たとへ、それが計劃でなくても、かゝる軌道上に世界が動かされつゝあつたのである。その一例として見られることは、世界企業を實施することにあつた。その二、三を知るに及んでも、その意圖は、はつきりとしてゐる。こゝには豊富なる資源を活用するだけの「能力」の必要なことは當然なことである。

商品の製産は、技術・能力・學術・研究・企劃・資本の諸問題とからみあつてゐるもので、たゞ一朝にして製産品のみとして、取扱ふことは出來ないのである。製産力の優れてゐることは、必然的に國力の優れてゐること、民族力の優れてゐることを證明してゐるのであつて、平和産業と言へども明らかに世界市場に於て競争をしてゐたのである。たゞ戰争をするのは、軍事とのみ思つてゐては間違ひなのである。一國の商品は、つねに植民地發展の樣相を帶びて職ひ合ふてゐたのだ。わが國人に「舶來品はすぐれてゐる」との考へを一掃することが出來ないならば、他國からの植民地化をまぬがれないところとならう。それ〳〵生産事業にあたつてゐる者は、たゞの利益のみに終始してをられないのである。わが國の製産品が世界のいづこよりも、優秀なことを色んな點に於て證明しなければならないからである。

アメリカの世界市場獨占化に乘りだしてゐたものには、幾つも擧げることができる。先づ目につくところは、映畫事業である。これだけは凡そいづこの國も足もとに寄りつけぬところであつた。バレンチノから、リヽアン・ギツシユ、キートンからシヤーリー・テンプルに至る迄、世界の人心を引きつけ、世界人心を失はし、泣かしてきたのである。いつの間にかアメリカ國の風俗習慣をも異なるものとも覺えず、その影響を蒙つてゐたのである。チーパーチーとかピクニックとか、ドライブとかの言葉が世界中にばらまかれて行つてゐたのである。モーダン・ボーイとかモーダン・ガールとかは、この映畫から受ける動作をそのまゝわが國でも行つてゐたのである。

しかし、その企劃企業の一頭地を拔いてゐたことは爭はれない。アメリカは映畫の本場であつたことは認めざるを得ぬ。それに附隨して、レヴユウとか社交ダンスとかゞわが國にも横行したことを思ふと、そゞろ面はゆい心地である。日本人の意中の戀人が、ディアナ・ダービンであつた

りするのだから、まさしく恐ろしいものであつたと言ひうる。かゝる點に立つての國策映畫が樹立せられなければならない。世界いづこの市場に出しても堂々たるものであるべきである。日本國の植民政策が實行せられてゆく上には、商品・文化面にも優秀なることを必要とする。

つぎに見られることは自動車製作である。この大量製作の前には、世界市場も意のまゝに動かされたことだ。ホードとか、シエボレーとかの分工場は、世界いづこの土地にも設立せられてゐたのである。いかなる交通不便の土地にも、この交通機關は動かされて行つたのである。中央アジアにも、アフリカにもこの交通機關は動員されていつたのである。それに伴つて、アメリカの石油販賣特許權のもとに、シエルとか、スタンダードとかの石油販賣店が世界に網の目のやうに設けられていつたのである。アメリカ人が世界を漫遊して、自國勢力の偉勢の良さにうぬぼれあがるのも無理からぬところなのであつた。

そのほか、アメリカ合衆國のふりまいた商品戰線には限りないものがある。ヂレツトの安全かみそりから、シンガーミシンの裁縫機械、チユウインガムからアイスクリーム。これ等の商品は思想・流行などとからも切りはなされないものであつた。そんな小さな日常品からも「アメリカ仕込み」が、とり行はれていつてゐたことである。

これらの商品戰線に較ぶとき、わが國からの活躍は、纎維工業を別としては本格的なものが見られない。加工品はどちらかと言へばゲリラ戰の範圍を出てゐなかつたと言へ、勞働賃銀の安さを利用して、安價品の横行はかなり世界市場に波亂を呼びおこしてゐたことである。日本から繰り出す安價品の前に白人社會は悲鳴と恐怖を覺えかゝつてゐたときである。「メイド・イン・ジヤパン」の加工品は罐詰から玩具に迄及んでゐたのである。その爲、イギリス、アメリカの加工品會社が立ち行かない場合も數々あつたこと。しかし、二五九五年度、全世界の貿易額からすると三分三厘の比率に相應する徼々たるものであつた所からすると、世界の大勢を支配するまでにはいまだ至つてゐなかつた。

しかし、歐米人が言ふやうに東洋は原料品を輸出し、歐米各國は加工品を輸出するとの定義からは離れてゐる。わが國は明治以來から次第に工業國の位置を確保するに至つてきたのだ。お得意先は、アメリカへ送りこむ生絲をのぞいては、滿洲國、インド、支那、濠洲、蘭領インド方面で主として加工品であり、太平洋沿岸第一の工業國となつてゐたのであるし、「アジアのためのアジア」の中心者となるべきものは、わが國をのぞいてはほかにないことが知られる。それにしても、わが國第一のお得意先きがアメリカ合衆國であつたところからすると、わが國に及ぼしたア

メリカ勢力が凡そ了解せられるところであらう。アメリカ向けの輸出は二五九五年度、全輸出額の二割一分强に及び、輸入額はまさに三割五步に及んでゐたのである。アメリカが經濟斷交を口にして、おどしつける原因がこんなところにあつたものと分る。その輸出の七割强は農村から送りだす生絲なのであつた。それにひきかへ、アメリカから輸入する六割弱は棉花であつたことにも注目すべきである。また、わが國の輸入品はほとんど原料品であつて、他國のつくつた加工品でなかつたところにも日本國の位置を認識すべきことである。

　アメリカ合衆國が、東洋に於ける日本の地位を認識してゐなかつたことは事實である。「認識不足」の言葉は、日本朝野にみなぎつてゐる合言葉なのであつた。おごりたかぶつてゐるアメリカが、日本の地位などに心を致してゐなかつたのは事實である。ところが實力の前には、如何ともすることができなかつた。いかにスチムソンが口先きばかりの外交を振りまはしても、どうすることもできなかつたのである。

　一晩、碇泊中の船に寢泊りをして翌くる朝は、「あまつをとめしま」と名づけられるところへ送りこまれたのである。こゝに於て、日頃から疑つてゐた歐米人の非道德性と言ふより、非人間性がはつきりとさせられたことである。この大陸の入口にあたつてアメリカ國が如何に人道主義的な口を切らうと、その國を尋ねてくる者にむかつて、第一の禮儀をしめしてくれたのが、この島への案内である。この島への案内は恐らく一生一度のことであるかも知れないから、こゝに挿入しておくにふさはしい「はなし」かも知れない。民族と植民に於ける活舞臺の一面にお世話になることを得たのである。またとなき經驗であつたかも知れない。

　たしかに、その名にし負ふ「あまつをとめしま」なのであつた。おだやかな海に綠のしげつた島。うるはしいカリホルニヤの太陽に照らされて、別天地のごとき明るさである。船あそびに連れだしてもらつたやうな心地。しかし、島に上陸して本館にはいると、もう、おしまひなのである。ながき廊下、窓には金網が張つてあるのだ。まつたくの囚人扱ひなのである。こゝで身體檢査、旅券調査などにかこつけて、色んな名目をつくりあげるのである。私の場合には十二指腸蟲疑とかで引留めてゐたのであるが、外へ出るまでには、上訴費とかを數百ドル献金しなければならなかつた。アメリカは文明國と云ひながら恐るべき野蠻國なのである。それを自由なるものと呼んでゐるのならば、はきちがへてゐるのも甚だしいものだらう。よその國へはいると、喰ひものにせられるまゝに任せられてしまふことが多い。誰に訴ふることもできない「泣きねいり」なのである。これはアメリカにとゞまらず、外國人だと見れば利用するだけ使つてやらうとする下

心がよく起るものであるらしい。しかし、良心のある國民にはなされ得ないところである。

一度び、この本館に通されると、世界の各人種が集められてゐた。どうしたことか、凡んどの人が一癖のあるやうなものばかりで、日本人はたがひに小さくなつてゐると云ふやうな有さま。それでも、そんな仲間にはいつて「ひけ」を取らない同胞のゐたのも事實である。一人はメキシコから密航して上陸したもの。友達が密告書（ブラック・メイル）を出したばかりに、こんな目にあつたのだとこぼしてゐた。も一人は船員で、夜陰、上陸をはかつて捕まつたもの。そのほか色んな異國人の來歴が紹介せられる。その來歴に依つて、こゝの顏利きがちがつてくる。パナマ地帶を撮影して捕まつた英國飛行士から、姦通罪でとらへられてゐるカトリックの僧侶から、放火罪の嫌疑とか、さまざまなのがゐる。恐らく牢獄が滿員なので、こんなところへ一時置かれてゐるのか、それとも追放處分になつたので、こゝでしばらく歸りの船を待つてゐるのかも知れない。そんな點からすると、自分たちも罪人仲間に加へられたことにもなる。可哀さうなのは、はるばる日本からアメリカにゐる兩親のもとにたづねきた子供。母親からはなされた子供。それらが夜中になつて泣き叫ぶのである。はじめてとまつた晩は、深い霧で、あたりの岬から警笛、警鐘が鳴りひゞくのである。寢床と云へば三段にしつらへた、まるで動物園のやうな感じがするものだ。

この待遇に怒らない日本人があるものか。この六間四方もある部屋の到るところに「アメリカ帝國主義打倒」のスローガンは彫りつけられてゐる。あらゆる惡罵が投げかけられてゐる一方、日本帝國が自覺のもとに、この一大汚辱を拭ひさるべきだと書きつらねてある。幾度となくペンキで塗りつぶされても、深く彫りつけられてゐる文字は、消えうせるべきもしない。この部屋に案内せられたものの誰れとても、わが國の強く立ち上ることに心を湧かさないものとてはないことだらう。民族發展途上に於ける接觸地點である。この部屋には、高等なる政治・外交方針さへ示されてゐる。

こゝに於て、見得べくもない色んな姿を目に留めることを得た。その一つは、何百人となく歸國を急ぐ支那人たちが、長い廊下に續いたことである。兎に角、追放せられゆくものの、哀れな姿であつた。メキシコから追放せられたのだと云つてゐたが、その眞疑は分らない。いづれも、大きな合財袋を背負ひ歩いてゐるのが、淺ましく思へた。日本人ならば、そんな、みじめな姿はなさないだらうと考へた。一言の言葉も話し合ふこともなく、沈默の中にその行列は、つゞいて行つてをつた。これも、民族發展途上に於ける哀れな行列であつたのかも知れない。

世界の色んな人種に依つて、性格の異なれるに驚いた。それにしても、東洋人は互ひに親しみあへるのは、どうした氣持からなのだらう。その東洋人の中でも、支那人、印度人、アフガニスタン人、アラビア人など、それぞれ特徴を持つてゐる。病室へ收容された時、支那人ばかりの所へ、私丈が日本人であつた。こゝで觀察した支那人の特徴は、それ以後、會ふ支那人に通じてゐるものであつた。沈默の一瞬間をよろこぶ印度人、アフガニスタン人、何處に行くとも忘れたことのない聖典をひもどく姿を見た。印度人のベン・シェンテは、夜、涙を流した。アフガニスタン人のバーリス・カーンは、堂々たる體格に優れたる思想の持主であつた。アジア人は、團結してヨーロッパ人に當れといふのである。「アジア人のアジア」といふ言葉をきいたのは、この人からなのであつた。その獨立獨歩の性格が、何時もの話し相手になることを得た。アラビア人のシヤム・シヤンは、友情と商賣をどつちやまぜにして、仲々拔目が無い。鏡、櫛、小刀はアラビア人たちから何時も「とりひき」の的となつたところである。これらの東洋人に比べて、歐洲人種と申す者達のにぎやかで派手なことには一層と驚いた。ピッコロやハーモニカを吹いて、行列をして歩きまわる。遊戯をして笑ひ合ふ。夜になると、トランプで、バクチをする。このバクチで何百ドルと失つたといふギリシヤ人もゐた。これらの仲間の中でも北歐系は、異なれる性格をもつてゐた。殊にノルウェー人の人の良い性格は目立つてゐた。だまされて、こゝにはいつてゐるとのことであつたが、本當の事であつたらう。ドイツ人達は、實に落付いて、獨自の行動をとつてゐた。勞働をしてゐて捕つたといふ白系ロシア人の學生達、特に日本人達から同情をひいたのは、年若い赤毛のブルガリヤ人であつた。みんなの者から虐待を受けて、なま傷がたえない有さまであつた。われわれからすると、どうしても合點の行かないものである。どういふ「わけ」かからだらうと聞いてみると、ユダヤ人だからとのことである。こんな場所に於ても、ユダヤ人は言語につくせない虐待を受けてゐながら、本人はあまり氣にかけてゐないやうで、不思議なくらゐであつた。一生涯で、ユダヤ人がどんな目にあつてゐるかを知つた、知り初めなのである。この收容所は「生きた學問」を敎へる殿堂と申されよう。こゝに於て、世界の大勢に通じた、正しい強い日本人でありたいとの念願に燃えた。世界を導くものは日本であらねばならぬと、考ふるに至つた。本國を離れて、この孤島に招待せられてこれほど、強く自國の意義にふるひたゝせられた一瞬間とてはなかつた。これは、私丈のことではない。異國に出て働いてゐる同胞は何れも故國の強い使命を忘れてしまふものとては無い。これらの戰へる同胞を思ひあはす時、故國では黨派を作り、意見の「へだたり」に、固執をするものなどがあることは殘念にさへ思へた。日本

は「大日本」の「大」の精神にたつて躍進しなければならぬと考へたのである。外地へでての、「かんがへかた」研學方針なるものが、この移民局滯在中にはつきりすることを得たのは、むしろ不幸中の幸とさへ思つた。「わざあひを轉じてさいはひとなす」妙機は日本人の積極的な行動力のあらはれと見なされるだらう。

移民局には、同じ人々が抑留せられてゐるのではない。船舶の出入の度に、人員はふへたり、へつたりする。或る時は、何百人といふ新來の客があつたかと思ふと、何百人の人が、一時に出てゆくことがある。時には牢獄から出獄した一團體が宿泊することがある。その着てゐる衣服が全部新らしいのだ。それは入獄中に働いたお金で仕立てたものであることが分つた。それらの人々の頬にゑがかれた喜びの感情などは忘れうべくもない。解放せられゆくものを喜びあはずには、をられなかつたことだ。こゝから出て行く者には、上から通知がやつてくる。その通知が來た時の喜び方は、どこの人種とて違はない感情をあらはしてゐた。この島へ一日に二、三回定期船が横づけになる。その定期船が波を切つて進む音が、はつきりと窓邊につたはつてくる。だれもが、その船に乘つて、外氣にふれる時の、のびのびとした心地を想像することであつた。そののびのびとした空氣を思ふ存分に吸ふことの出來る日も、おとづれることを得たのである。かくして、アメリカ本國の内面生活を兩眼で見とゞけ得るに至つたのである。そこに民族と植民についての考へを次第に深めてゆくこととはなつたのである。

6 たゝかへるはらから

凡そ內地にあつて在米同胞の生活なんて、豫想だに出來ない。アメリカは物資の豐富な國であるから、行けばなんとか金稼ぎが出來る位に思ひ込んでゐられるやうでは大變なことである。そこは生活の樂なところだと誰れもが思ふだらう。然し、一度びカリホルニヤに上陸するならば、戰へる同胞の姿に接することが出來る。おそらく他國にあつての生活鬪爭は、本國土に於けるがやうになまやさしいものではない。內地のやうに相談相手になつて吳れるもの、助けあつてくれるものはゐないのだ。獨自が生命をかけて戰はねばならない。內地ならば、家柄の立派な者とか親ゆづりで暮して行けさうな人もある。高等專門大學教育を受けた人もある。これらの人々が外國人の家の「はきさうじ」をすることで戰つて行かねばならぬ運命なのだ。年老ゐて海外でかゝる慘めな身分にゐながら、尙ほ、戰へる勇ましき人々のことを思ふてやるが良い。

すべてが本國を離れたときの「氣だかい心」のために戰つてゐられるのだ。本國へ再び御厄介になるまで、迷惑をかけたくないからである。音信不通の在米同胞人も幾らもあることだ。そんな方々に幾人とも會つたことである。思ふやうに、うまく萬事がはかどらなかつたからである。中には野たれ死をする同胞もある。それらの心の中には、一度は故國の躍動する姿を眼のあたりにしたくてたまらなかつたであらう。みじめな姿をして故國へ歸るより、勇ましく他國の土へ散りゆく人達である。海外發展に一生をかけはてた雄々しい姿でもある。丁度、フーバーの不景氣時代にあたつて橋の下で生活をしてゐる同胞もあると耳にした。在留同胞が一度び歸國すると、向ふでの苦しい話を一口もせずに、樂しい面ばかり聞かして吳れるところにも、立派な心がけがあると思ふ。みじめな恥さらしをしないことが、古來、日本人の念願だからである。

ところが、これらの雄々しい姿を曲解せられる方も少くないやうだ。アメリカ植民に於ける日本人の失敗を云々せられる人々も可なりあらう。また、その植民地開拓者の地位を一段下の「眼つき」でながめるやうな傾向さへある。「移民」とか「移民根性」とかの言葉は人格上からさげすまれた心地が含まれてゐる。これは尙ほ、我々が海外發展に際しての尊い犧牲に對しての認識を缺いでゐるとさへ見なされよう。一度、本國土を離れる時に、一大決心がゐるし、向ふでの生活はなまやさしいものではない。感情生活をうるほす生活の豐さがない。他國土にあつては、心から打ちとけ合ひ、たのしめる餘裕が越らない。身の周りを取りまくものは、外國の權益ばかりである。これほど「さびしい日本人」の暮しをしてゐる人々の身の上のことを想像しても見るがよ

い。海外へ出て働いてゐる同胞に對して、日本人は思ひやりに缺けてゐたとの譏りは、まぬがれないと思ふ。それどころでない、これらの同胞を目あてに選擧費を稼がうとの下心で出かけた政治家もあるかも知れない。むしろ喰ひものにするものはあつたかも知れないが、眞實に海外同胞全體のために、はかつてやる所の人は少なかつたやうである。慰問に名を借りて出かけるものが、「おかねもうけ」を目あてとしてゐるのだからやりきれない。もつと眞實のこもつた慰問、設備、機關、連絡は今後ともますます必要である。せつかく內地へまで勉學にやつたアメリカ第二世が散々な惡口を浴びせられると言ふ風では、親たるものも浮ぶ瀨がない。決して、もの好きで內地留學におもむかしてゐるのではない。浮木をながして得た金、切りつめるだけ切りつめた生活の中から勉學費を送つてゐたのである。故國送金にしても同じことが言ひうることだらう。その立場をもつと、本國人は汲みとつてやらなければならなかつた。

兎角、合衆國在住者をお金のために一生を棒にふつてゐるものだとの言をなすものがあるが、これも當を得た話しではない。お金のために一生を棒にふるとの意味は、道義心、德義心などを失つた場合に云はれるのであつて、そんな點に於ては內地に於けるより、一層緊張してゐるとさへ思はれた。決して、アメリカ人にならうとしてもなりきれないのだ。お金故、故國を賣るやうな心がける者は決して居らない。くだらないアメリカ人になるより、潔ぎよい日本人になることを最大の幸福と思つてゐるのだ。それでなくてどうして排日の盛んなる土地に、しぶとく頑張つてゐる理由がどこにあらう。あれでも若氣にはやまつたころの同胞の中には、アメリカかぶれをしたものもあつたかも知れないが、年を取るにつれて、故國の偉大さが切實に分つてきてゐる。むしろ、かゝる敵地にあつて、日本本國の使命に生きるこれらの人々を尊しとしなければならない。アメリカ國土は、まさしく、日本國民の開拓するにふさはしき土地だ。そこには、廣々とした沃野が東方日本國からするところの開拓の手を待つてゐるがやうである。乾し草（へ１）を採るために、ころがし放題になつてゐる大地が、目の行きとゞくかぎり橫たはつてゐる。われわれ同胞がくれば、いかに立派に働らかしうる土地だらうかと想ふて見たことである。世界には、いまだ矛盾だらけのところがあるが、世界歷史とは次第に、この矛盾が消えつゝあることをものがたる。そこに日本國の天命にしたがふ働き甲斐があるのだ。海外に於ける同胞は、この天命にしたがつて、「國びらき」をとゝのへつゝあるのだ。それでなければ、排日にあひつゝあるとも、ますます伸びつゝある日本人の增加をどう說明することができよう。外部からの壓力が絕大であれば、減退するのが道理である。しかるにかれら同胞にあつては、その抗爭力は、ますます强化せ

られていつてゐる。年ごとに日本らしさが充實を遂げつゝあつたことだ。

排日を行はしめたところには、支那人排斥に成功してゐるから同じやうになるだらうと思つたのだらう。他人種を排斥するところには「恐れ」を感ずるところから起つてくる。支那人の勞働力と民族力に恐れをなしたのである。どちらかと云へば、ヨーロッパ人は古代から他民族の壓迫を受けてゐるのだから「きもたま」が小さいのである。白人が寛容だなどと思ひあやまらないで貰ひたい。あはれむべき程腹藝の出來ない人種である。怒れば人前かまはずわめきたてる。悲しければ大聲たてゝ泣きたてる。まつたく人間としての修養が出來てゐない。ことに、アメリカ人に至つては、感情まるだしである。人間がそれだけ單純だとは言はさせない。てんで人間ができてゐないのだ。學校教育には「修身」の課目はないのだ。その代りをなしてゐるのが感情の激しさを敎へるバイブルに過ぎない。バイブルなんて自個滅却までの高尙なる精神でたゝき込まれてゐない。こゝに描かれるゴット（神）は人間本位を敎へるに過ぎない。白人達が他人種につけあがるところには、こんなところからにも根ざしてゐる。そして、口ぐせには、博愛とか、人道とか言ふのである。それ故、自分勝手に振舞ふ傾向がある。一二五〇四年とか二五一四年には、淸國と相互に移民條約を結びあつて、移民の自由を主張しながら、その後數十年もすると、いろんなことにかこつけて禁止をしてしまつたのである。不潔だとか、同化しないとか、勞働賃金が安いとかで排斥し初めたのである。二五二〇年から二五四〇年にかけては、年々二萬人からの支那人が入國してゐたのであるが、二五四二年には支那人排斥法が通過したのである。それ以來、お金には目先の强い支那人とて離國する者が多く、二五七〇年には七萬人ばかりの支那人を數へるに過ぎず、それから十年も經た二五八〇年には、一萬人も減つて六萬人の程度になつてゐる。こゝに日本人と支那人との移民に於ける立場が、あきらかに見られるやうだ。一方は環境、條件に依つて支配されてゐるけれども、日本人の場合にあつては、その理論では通らないのである。つねに環境、條件を乘越えおしきつてゐる精神の高さが見られる。「まけじ魂」は、この、たゆまざる開拓魂の上にも現はれいでてゐるのだ。

日本人がアメリカ國に必要となつたのは、支那人の勞働者禁止に依つて、手不足をきたしたことが第一原因である。そのねらつてゐる所は、勞働賃金の安いところから、その勞働力を「しぼりとらう」としたのであつた。彼等の頭から他人種を使役のために奴隷となさうとする考へからは、淸算しきれないのである。二五三〇年には、百人ばかりの日本人であつたが、それから二十年すると一萬人に及び、またそれから二十年もすると、實に七萬人に達し、ことに二五六〇年か

ら二五八〇年に及ぶ二十年間には、一年の入國者平均一萬人以上に及んだもの。二五七〇年には七萬二千百五十七人であつたのが、その後十年の二五八〇年には十一萬十人となつたのである。二五八四年に日本人移民禁止法が施されて、支那人のごとき減退すべきが當然であるべきに、今から十年前の在米同胞は十四萬六千七百八人を算するに至つてゐたのである。今では第二世同志が三世をあげる時期にあたつてゐることで、第二世問題は通りすぎて、第三世問題がやつてくる時代となつてゐたのだ。

二五八〇年度の在米同胞の總人口の中でも過半數の七萬一千九百五十二人が、カリホルニヤに集まつてゐる。排日は、カリホルニヤに起つた問題で、二五五八年に日本人勞働者排斥決議案を加州會議に提出したところから始まり、二五六六年、日本人の就學兒童を拒否したことがあり、日本移民の嚴重制限をなさんとした。「日米紳士協定」の行はれたのは、二五六七年のことであつた。第一次排日法の可決を見たのは、二五七三年五月十九日のこと。在米同胞の土地所有權、借地權、歸化權などの不可を中心として、二五八二年に第二次排日法案通過。第三次排日法案は、われわれもよく知れるところの二五八四年の出來ごと。以來日本人にして移民は絕對に禁止をうけるに至つた。こゝには、勿論、人種上の問題もあらうけれども、日本人の發展に恐怖をなしたのである。日本人が、こゝ數十年にカリホルニヤに於て、さし示した成績は、驚異に價ひするところのものであつた。日本人の示した有力なる能力の前に恐怖を起したのは、當然なことであらう。しかし、今日のカリホルニヤ州の隆盛をきたした後には、日本人の力が並々でなかつたことを忘れてはならぬ。カリホルニヤ一州に示した日本人能力は、今後の植民地開拓史にのこしたよき手本となるだらう。一度び、サクラメントに於けるカリホルニヤ州廳の塔上から見おろして見ろ。そこに見渡せる綠色に繁れる農園地は殆んど、われわれ同胞の手に依つてなされたのだ。そのことは加州全體に對して云はれることにもなる。むしろ、アメリカ政府は、日本人の恩義に感謝の意を表すべきに、それに酬ゆるに敵意を以てしてきたのだ。「アメリカに於ける日本人」（二五八一年、ロスアンゼルス發行）の著者、マンチエスター・ボツデイ氏は、日本人は「ぬれぎぬ」をきせられたのだと云つてゐる。

その著に於ける九十頁から九十二頁にわたつて「いろんな日本人の職業」と題して、同胞のなした行績をさししめしてゐる。これらの耕作は、日本人に依つて初めて爲されうるもので、決してヨーロツパ人種ではなされ得ないところであるとしてゐる。二五七八年に示された統計によると、耕作に從ふ日本人は三萬八千八人で、在米同胞の五割五分から五割六分に相當した率である。

も　たゝかへもはらから

二萬九千百五エーカーに及ぶ五百二十七農場が日本人の所有になつてゐて、三十三萬六千七百二十一エーカーにわたる五千九百三十六農場が日本人の借地するところである。その他、白人名義のもとに、日本人の關係してゐるところが、尚ほ一萬三千エーカーもあると云つてゐる。日本人の耕作地が加州全體の耕作地と較べて、どれだけの比率をなしてゐるかを次表でさししめしてみる。われ〳〵の參考になるので、そのまゝ、のせて置くことにする。

作物	同胞植付面積(單位エーカー)	全耕作面積	比率(百分率)
苺	五・九六八	六・五〇〇	九一・八
セロリ	三・五六八	四・〇〇〇	八九・二
アスパラガス	九・九二七	一二・〇〇〇	八二・七
種もの	一五・八四七	二〇・〇〇〇	七九・二
玉葱	九・二五一	一二・一一二	七六・三
トマト	一〇・六六一	一六・〇〇〇	六六・三
キャンロップ	九・五八一	一五・〇〇〇	六三・八
砂糖大根	五一・六〇四	一〇二・九四九	五・一〇
野菜	一七・八五二	七五・〇〇〇	二三・八
ジャガイモ	一八・八三〇	九〇・一七五	二〇・八
米	一六 六四〇	一〇六・二二〇	一六・〇
ホップス	一・二六〇	八・〇〇〇	一五・七
葡萄	四七・四三九	三六〇・〇〇〇	一三・一
豆類	七七・一〇七	五九二・〇〇〇	一三・〇
棉	一八・〇〇〇	一七九・八六〇	一〇・〇
玉蜀黍	七・八四五	八五・〇〇〇	九・二
果樹園	二九・二一〇	七一五・〇〇〇	四・〇
乾草	一五・七五三	二・二〇〇・〇〇〇	〇・六

この表に於て歐米人の植付面積と日本人との對比が面白い現象をあらはしてゐる。乾草植付地とは未開拓地のことなのである。白人種の特異とするところは、果樹園程度にとゞまるだらう。日本人の特異とするセロリ、アスパラガスなどは非常な技能がいるものらしい。苺にしても手先と、特殊的な體力が必要なのである。日本人にあつては苺の收穫は、婦女子の仕事にさへ考へられてゐる程だ。これら三種の品が加州全體に於て、八割以上の植付けを示してゐることは、日本人の獨占するところだとも申しえられよう。日本人の耕作能力は、歐米人に較べるとき同面積に

於て三倍半からの能率を示すのだから恐ろしいものだ。アメリカ移民の悲觀論者は、日本人が現實になしつゝある行績に目を配つたら良いだらう。なるほど、その生活程度は切りつめてゐるかも知れない。たゞ、それだけに依つて失敗だと片づけることは出來ない。むしろ開拓の本務に一心不亂に躍進してゐる事實をみることだ。二五九一年版のリツヘヤルド・ヘツニツヒの「地政學」の著によると、カリホルニヤ全耕地の六二萬三千七百五十二エーカーの中に、日本人の所有に歸してゐるのが四十五萬八千六十五エーカーあるとまで强調してゐる。こんなところを見れば、歐米人でなくても、拜日法案を通過さすのも無理からぬところだと思はれないこともない。改めてアメリカ在留同胞の爲しつゝある行績に對して、國家の大きな立場から見直す必要がある。萬丈の氣焔を外國土にあつて、吹き上げてゐるのだ。各自が熱心に開拓してゐる土地が、日本民族の偉大なる力として育成されていつてゐることだ。

カリホルニヤに於ける排日の原因に、出生率の多いことが擧げられる。ボツディ氏に依ると、日本人の出生率が千人に就き四六・四四人なる時、白人種は、一六・五九人を示してゐるに過ぎない。凡そ三倍の高率である。恐日病者達は、こゝ五十年もたゝざる中に、自然增加に依つて百萬人の日本人がカリホルニヤだけに現はれることにならうと言ふのだ。まさしく、なりうるかも

知れない。しかし、こゝには日本婦人のいさましい行爲を稱へなければならない。今日の日本人發展の基礎を固めたのは日本婦人の力だと言ひうる。いまだ獨身時代には、支那人の賭博場に浸り切りになつてゐた同胞も數限りないことだつたらう。そこから手足を洗はしたのは、すべて內地から出かけてきた婦人の眞心によつてゞある。二五七〇年にはカリホルニヤには、六千三百六十二人しかの婦人を數へてゐなかつたのであるが、二五七〇年から八〇年にかけて、凡そ、一萬人からの花嫁が大陸へ押しかけてきたのだ。殆んどが二十五歲以下の妙齡の婦人であつて、寫眞一枚を賴りに海洋を渡つてきた勇敢なる連中である。これを「寫眞結婚」といひ、アメリカ人にはその心理が理解せられぬとのことだ。この寫眞結婚は、海外移民史に於て悲喜劇こもごもを混ぜた一大挿話である。船がサンフランシスコに到着すると幟を立てゝ迎ひに出たものださうだ。その幟に男の名を書きつらねて、迎へに來てゐるのを知らせてやるのだ。それから花嫁達は「あまつをとめしま」へ送りこまれて再檢査をうけるのであるが、その抑留中に面會に行つて、一大悲喜劇が起つたこともあると言ふ。見合寫眞が本人でなかつたり、若者と思つたのが中老年であつたり、頭髮のないものが「かつら」を被つた寫眞を送つたりしてゐたのだから、その場面のどうであつたかは說明を要しないだらう。それどころか、上陸して再度びつくりしなければならな

かつた。內地へ申しやつた生活狀態とは、似よりもつかないものなのであつた。ある男は科學研究してゐると言ふので、女子大學出の花嫁がやつてくると、たゞの鉛職人であつたり、植物研究をしてゐるとのことできてみると、庭つくりであつたりした。しかし、かゝる悲喜劇を乘りこえて協力して來たところに、日本婦人の偉さがある。これら同胞の通りきた道は涙なくしては聞かれない物語りである。

これら婦人の力に依つて、日本民族の地ならしが、アメリカ大陸へなされていつてゐる。それは不滅の力だとも申されえよう。ポツディ氏は、カリホルニヤ全體に於ける出產に於て、日本人出產率の占める位置が、年々大きくなつてゐるのをさししめしてゐる。二五六八年には、一・六百分率であつたのが、その後、十年目の二五七七年にもなると、七・八百分率にまで上昇してきてゐるのだ。年度に連れて死亡率も上つてゐるが、出產率に及ぶべくもない。二五六八年から二五七七年の十年間に死亡した人數が五千八百六十人のところ、出生したものは、二萬五百七十八人に及んでゐる。こゝには、內地から協力にきた日本婦人の勢力を意味してゐる。アメリカ人口調査局の發表した調査表に依るときに、男女の割合が、こゝ三十年間にどう變化したかゞはつきり分る。卽ち二五七〇年に於ては、男七人に女一人の割合なのであつたのが、（二五七〇年度、男六萬三千七十人に對し、女九千八十七人）二五八〇年度には、男二人に就き、女一人に迄緩和せられ、（二五八〇年度、男七萬二千七百七人、女三萬八千三百三人）それから十年後の二五九〇年度には、男一・四人に對し、女一人にまで對比を低めて來た所には、（二五九〇年度、男八萬一千七百七十一人、女五萬七千六十三人）また、第二世の增加に依つて、男女の均衡取れてゐることをも示してゐる。第二世の十年每に殖えていつた總人口を示しておくことにする。すでに二五七〇年には、四千五百二人の第二世がゐたのであるから、これらの第二世は、今年では四十歲の年齡を越してゐて、現在、在米日本人社會の中樞である。多くは日本に於て敎育を受け「呼びよせ」に依つて再渡米してゐるものである。だから、この頃年輩の者は、純然たる本人だと云つて差支へない。日本本國で問題を起した第二世は、多くは、二五八〇年度に生れついた年ごろの者である。その年度には、二萬九千六百七十二人の第二世がゐたと報告せられてゐる。カリホルニヤ其の他の地方に日本人學校といふものが散在してゐる。これも排日の原因をかもし出す一つに數へられてゐるものであるが、第二世達は、州の公民學校の授業後、再び日本語敎育を學ぶもので、兩親の力の入れ方の大變なことは思ひ知られよう。校舍から經營費の一切を兩親達が負擔してゐるのだ。故國から、なんらの援助を受けずに、倘ほ故國の魂を忘れないこれらの同胞に敬意を表

さねばなるまい。日米戰爭勃發以前には　これらの學校に第二世達はほがらかに勉學をつゞけてゐたことだらう。大抵日本人學校といふところは「しつけ」の嚴しいところで「しつけ」が嚴しければ、兩親達によろこばれると言ふやうな傾向のあつたことも無理からぬところであらう。これらの學校に通つてゐた學童たちは、一二五九〇年度に生れついたものたちである。二五九〇年度には、第二世の數が六萬八千三百五十七人に達してゐるのだから、えらいものだ。日本人學校は年々狹隘を告げる有さまであつた。そんな二重の文化的重荷を負はされながら、アメリカ公民學校の首席は、日本人に依つて押へて行くのだ。日本人の能力のすぐれてゐることも、さることながら、すべてが勤勉・努力・精神の結晶である。勉學心の高いことは、アメリカ合衆國中に於て日本人が最高を示してゐるのだ。一九三〇年度の人口局の統計をそのまゝにかゝげて、人間能力の研磨にいそしんでゐる同胞をしのびやることが出來るだらう。

就學兒童年齡表（百分率）

人種	七歳—十三歳	十四歳—十五歳	十六歳—十七歳	十八歳—二十歳
日本人	九七・二	九七・三	八八・八	五一・八
支那人	九六・〇	九四・九	八〇・七	四四・三
アメリカ人	九六・一	九〇・〇	六一・〇	二四 四
ネグロ人	八七・三	七八・一	四六・三	一三・三
メキシコ人	七九・〇	六八・四	三五・三	八・三

二世問題は、内地のみの問題でなく、現地に於てつねに問題をかもしてゐることとである。アメリカ教育から受ける思想的影響と、第一世の考への持ち方の間にたえざる「すれあひ」がおこされてゐる。この惱みの中に第二世達は伸びあがつてゐるのであるが、その「すれあひ」の中にも大きな解決を求めようとしてゐるさまが、あきらかに見られる。決して、われわれは二世に對して失望する論據はすこしもあるまい。かれらはアメリカ人と言ひながら、故國への「つながり」なくしては精神的なよろこびは見出せないだらう。二世、三世になるとて、日本魂は決してほろびやしないことだと確信をさへしてゐる。むしろ彼等の手によつて、理想とするところが實行される日を見たい。決してアメリカ人の言ひなりになつてゐるやうな弱蟲では毛頭ありはしない。二世の中からきつと不滅の魂が燃えいづる日も、おとづれるだらう。

この章に書足して、日本人のアメリカ兩大陸に戰へるさまを、さつと眺めておく。南洋委任統

5　たゝかへるはらから

治領、關東州在住をも含めるときは、海外在住者は百萬人を越すので、普通「百萬人」と言はれるところである。しかし、南洋委任統治領、關東州を除いた純海外在住者は八十七萬を數へることになる。故に、その過半數以上の同胞が、ハワイ、アメリカ兩大陸に、凡そ五十萬ゐることとなのだから、海外發展史に於けるアメリカ兩大陸の占める位置は重要なる立場にある。その意味に於て、カリホルニヤに於ける同胞生活の現實を採りあげてみたのであるが、ブラジルに於ける十七萬、ハワイに於ける十五萬も、少かれ多かれ、カリホルニヤ在住の持つてゐるやうな問題にぶちあたつてゐることだらうし、植民地に共通した課題であるかも知れない。現地には、いつも悲觀論者が有力であるが、一歩大きな立場からすると、寸分たりと云へども變ふる必要はない。むしろ樂觀論をもつて現地の建設に向はれるのが理想的だと思ふ。尙ほ、アメリカ兩大陸には、カナダ、ペルーに各々二萬人ばかり、其の他、アルゼンチンに五千五百人、メキシコに五千人からの同胞がゐることだ。各地方に依つて、日本人の活動分野がちがつてゐるやうだ。南米ブラジルに於ては、その大部分は、コーヒー・米・馬鈴薯の耕作に從つてゐるし、カナダでは漁業者、製罐業者、製材事業に從ふもの多く、ペルーに於ける二萬人は主として雜貨食料品の販賣を營んでゐる。それ故、アメリカ兩大陸を旅行するならば、どこでも日本人のお世話にあづかることが出來るし、なつかしくお米の御飯をいたゞきながら、日本語で話しあふことが出來る譯だ。

たゞ奇異とさへ感ぜられることは、あれほど拔け目のない日本人にしては、外國語の下手なことである。それが手傳つてか、日本人同志の「つきあひ」は內地に於けるより親密である。しかし、言葉の出來ぬことで色んな「かけあひ」に於て損をしてゐることであらう。この缺點をあきらかに第二世が、日々補つてゐる狀態である。大陸の各地には、日本人同志の集まつた部落がある。そこでは道ばたで各地の方言が聞かれて、日本へ歸つた思ひさへするだらう。たしかに外地に戰へる日本人は、立派な使命のもとに生きてゐる同胞である。大きな日本を深く信じて、日々を働きつらぬいてゐる勇ましき日本人であることだ。

7 こはされゆくもの

亡びゆく民族はその持てる特異性、特殊性を侵略される民族から破壞されゆく運命にある。ことに近代に於ける白歐人の世界發展に於ては、原住民のつゞけてゐる「かたまり」を打ちこはすことに全力が注がれたものとも眺められよう。原住民の民族力をばら〳〵にしてしまつた後に、その保護、研究に手を着けるのが、彼等の遣り口である。若しか、民族博物館のなかにをさまるやうになつたときは、その民族は古來獨特の風俗、習慣、文化文物など、云ひかへれば、民族力を失つたことを意味してゐる。民族のゑがきだした夢が、博物館の中に模型として留められてゐるに過ぎない。かゝる民族中には幾多の高き文化文明を築いた民族の名があげられるだらうが、いづれも王朝の夢を殘して亡んでいつてしまつたのである。かゝる亡びゆく民族に、アメリカ・インディアンのあることを書きたしておかう。日本人は、彼等とは餘り緣がありさうでないと見えて、取調べの對象にならないところであるが　取りこはされかゝつてゐる、彼等に目を配つておくのも良いことだらう。

先づ、こはされゆくものに、日常生活、禮儀作法、從つて「ならはし」ひいては道德思想の打ちこはしに及んでくることだ。すでに第八章に於て見ておいたやうに、すぐれてゐる民族の生活法が、次第に白歐人の口にする劣等民族のなかに侵入していつて、知らざる中にその團結力を弱めてゆくことになる。それゆゑ、わが國のごとく自意識を以つて「とりいれる」のと全く趣きをことにしてゐる。とは言ひながら、わが國に於ても「ハイカラ」と言はれる外國生活法をまねることが、高級的だと思ひあやまらしめた節もあつたやうだ。兎に角、多かれ少かれ向ふの生活法を取り入れた頭の中には、歐米人の生活法なんて少しも心の磨きがこめられてをらず、少くとも事務家のなす營みに思はれてならない。兎角、政治力、經濟力の强力さに壓倒されて、みづからを卑下することは止さねばならない。わが國民が豐富なる資源力を動かす時がきたとて、他民族をみくびつたり劣等視することは絕對にあるまい。白歐人をして自分らが最優秀の民族とつけあがらしめ、深い「おもひやり」を缺がしめたため、いたるところに優秀民族とか、劣頭民族とかの言葉を使用さしたことである。彼等がその劣等民族と名づくものから、遙かに劣等であることには、思ひ致さなかつたことである。日本語で言ひあらはす「こゝろがけ」がなつてゐない者達だつたのである。假りに、ひどい言葉で言はしむるならば、かれらこそ劣等民族以下のところがある。然るにそれ

ちの爲すところを喜んで、まねをするに至つてはお話しにならぬことになる。しかし、この反省は至つて大切な點に影響を及ぼしてくることになる。即ち、文化文物の優秀性を認めるにとゞまらず、人種の優秀性などの理論を受けいれるに至ることだ。歐米人と會話したり、交際することがいゝえらいと思ひあやまらせるに至る。それどころか、すでにハワイ原住民の婦女子が示してゐたやうに、白人と結婚するのを無上の光榮と感ぜしめるに至る。この笑ふべき民族錯覺の話しは世界植民地域には至るところにひきおこされたことであつた。今でも歐米人は無精にえらいと決めこむ話しが魅力を持つたりするのではあるまいか。しかし、現實はそれ以上に日本人の偉大なることを、さししめさねばならぬ機會にめぐりあはしてゐることだ。優秀とか、劣等とかの「あげつらひ」を越して、はるかに「たふとい」目ざめが世界に求められてゐるのだ。

たとへば「はだか」の問題がある。近來、わが國も歐洲文明道德に支配されて「はだか」になることを、すぐに野蠻人のやうに考へしめるに至つた。まさしく、ヨーロッパ人は、南洋の原住民とか、未開人とか名づける人種に洋服を着せることを以つて生活程度を高めたとか、文明化したと言はしめるのである。アメリカ・インディアンが、歐米人と接觸をし初めると、先づ裸體で歐米人の前にあらはれなくなつたから、文化的影響を認めると言ふのである。確かに、世界植民地から「はだか」を防ぐことに努力したことがあるかも知れぬ。着もののみならず、手袋や靴を身につけることになる。メキシコ人がスペイン人のことを「靴をはくもの」（ガチユウピン）と呼ぶところにも、こんな心地がみられる。しかし「はだ」をあらはす、あらはさぬで、文化は決定されない。わが國では平氣で「はだ」をあらはすから、野蠻であると思ひ違ひをした人もあるだらう。明治以前まで行はれてゐた男女混浴が、非文明的であつたと考へられたりすることになる。このごろでは海水浴でもなさる方々は、御丁寧に海水着まで身にまとつてござる。たしかに歐米人の道德觀念に依つて、支配されつゝあるところが見られる。しかるに、その歐米文明國では、公衆の前で女に「はだかをどり」をさして喜んだりしてゐる。ことにアメリカに於けるバーレスクとか申す演藝は、女がいかに上手に着ものをはづして、裸體になるまでを、音樂に合はして、いろんな「しぐさ」をして見せる。これがアメリカに於ける最も人氣のある興行物となつてゐるのだからたまらない。たとへば、近時、わが國で地盤をかためてきたレヴューといふがごときものでも、恐らく明治以前の思想を以てするならば、言語道斷と言はしめるだらう。どちらの國が野蠻であるか、標準がたゝなくなつてくるのである。それどころか、歐米各國に於ては、「はだか主義」が流行をしてゐて、「はだか植民地」と名づけるものを區切つて、各人、まるはだかで生

活しあつてゐるのだ。これこそ、身體の前面部にも一物をもまとはず、生活をしあつてゐて、アメリカでも、幾千とかの「はだか植民地」ができたと言ふことであつた。しかも、上流階級と申される人々の社交機關となつてゐるのだから、もの好きの至りだ。要するに外國を基準として、古來からの道德習慣思想を、うかうかと變へるべきでないことを言ふにとゞまる。日本人はもう一度、日本傳來の「うつくしさ」に目をとゞめなければならない。

ついでに書きたしておかねばならぬことは、歐米人の世界へふりまく流行である。なぜに歐米人のふりまく流行を鵜の目、鷹の目で取り入れなければならぬのか。とりいれるといふより阿從してゆくのであらうか。やはり今迄に書きつゞつた樣なことが、悲しいかな、日本國民の心を支配してゐたのではなかるまいか。斷髪が歐米にはやれば、早速それに調子を合せて、女の生命とまで云はれる黑髪を惜しげもなく切捨てゝしまふ。パーマネントが流行れば、至るところに洋髪店が隆盛を極めて、頭部に電髪器をかぶつて神妙にしてゐる女の姿を見受けることだ。しかし、男に至つても同じことが云はれる。セーラー・ズボン、羽根がついた帽子、オール・バックなどと。すべて考へれば民族固有の生活を失ひつゝあることだ。禮儀作法に至つても日本本來のものから、はるかに「それみち」をして進行をしてゐたのである。こんな狀態を決して外國文化を取り入れたと言はすことは出來ない。わが國に傳はつてゐた民族生活法を破壞しつゝあるのだ。この際嚴肅にわが國固有なるものに、おたがひが考へ合はさねばならぬ。いつの間にか、日本民族博物館ができて、その中に、日本人のあらゆる生活法を模型でもつて、しめさねばならなくなる日も考へあはされる。いつの間にか、日本人が歐米人になつてゐたと云ふのでは、いくら强くても何の役にも立たない。わが國の生活法は、經濟とか、輕便とか、衞生設備とか、科學思想とかを通りこして、「ゆかしいもの」として、常に生ひたつてきたところのものである。われ〳〵の生活法が、そんなに不便で不經濟で嫌はれるべき論據がどこにあるのだらう。われ〳〵は、もつと「もちつゞけてゐるもの」の値打ちを、あらゆる面に於て見直さなければならない。

ヨーロツパ人は、直接間接に他民族に不幸と「わざはひ」を齊しつゝあるのだ。つゞまるところ、彼等の生活法と申すところのものは、物質の多寡が支配してゐるのであつて、その中心に「こゝろ」がおかれてゐないからである。それ故、生活基準をたかめて貰ふことが必ずしも幸福にならないのだ。人間生活に「さいはひ」を基とせずして、ほかに何が求められるだらうか。その時ヨーロツパ人は、生活標準の高低を以つて、他民族文化の高低をはからうとするのは、得手勝手も甚だしいものである。自分らの生活法が一番最善と思つてゐるから、あつかましく他民族の生

活法にまで「さしでぐち」をしてきて、向上さしたとか、改善さしたとか、得手勝手な熱をあげてくるのだ。それがために迷惑を蒙つてきた民族は幾らあることか分らぬであらう。眞實の幸福はこんな他國からさしでぐちをのぞける「ものめづらしい」生活法の中にあるのでなくて、古來から傳はりきたもののなかに、見出しうることができるのだ。先づ、アメリカ・インディアンの生活程度が高められたならば、どんな結果になつただらう。ある原住民達は歐米人と毛皮の取引きをすることで、生活程度を高めうるに至つたことであつた。この地方のアメリカ・インディアンの生活では、女子は家庭に於ける勞働を職務とし、家財一切も女子の所有權に歸してゐた。また輸送用の馬犬も同じく女子の所有物であつた。その時、男子は外に出て狩獵あるひは戰爭に從ふのであつたから「えもの」を得てかへつてくるのである。その皮をうまく、なめして、着物に仕立てるのは、女子の仕事であつた。次第に毛皮のもとめが高まると共に、原住民の經濟生活がたかめられてくるにつけ、婦人を澤山めどつて、この仕事にあたらしめねばならないことだつた。ところがより多くの婦人をわがものにしようとすることが、原住民同志の鬪爭、內爭をくりかへさねばならぬ原因の一におちいらしめたのである。それと共に、も一つの原因は、「えもの」を餘計にするために獵銃を使ひ初めたことで、他種族の網張りをもあらすことに立ち至らしめ、やはり內爭を起さしめる原因となつてゐる。いたづらに歐米人化することが、彼等の不幸と破滅をさへ招きつゝあつたのだ。後年に至つて、やつと、アメリカ人も他民族に「さしでぐち」をのぞけることが、治安上このましきものでないことが分り、「さしでぐち」をしない方法を採るに至つたのである。即ちアメリカ・インディアンの特殊地域を設けてやつて、歐米人の介入を防止したことである。現在に於ても、アメリカ及がカナダを通じて三百以上の特殊地域が保たれてゐて、彼等の平和を亂さないやうに取りはからつてゐるところ。しかし、考へやうに依つては、すでに民族博物館的な存在と餘り、ほど遠からぬ狀態だと申されうるだらう。この地域內には、許可なくして、行商、居住することが出來ない。同じ行商人にしても、性質良好の證明許可證がいり、また品目にも制限が加へられ、アルコール類は販賣をとめられてゐる。またこの地域內では歐米人の木を切ることも、けものをとることも禁止せられてゐることだ。しかし、最後は特殊地域を開放さし、各個人の所有權を認め、市民權を獲得せしめる方針のもとに進められてゐる。それ故、學校教育がさかんに行はれ、二五三七年の設立以來、すでに四億ドルの經費がついやされ、現在一年に一千萬圓の豫算が見つもられてゐることだ。

　これらアメリカ民族のなかには、かつて世界優秀の文化をきづいたインカ、マヤ、アズテック

文化國が存在したことである。しかし、これらの文化精神には甚だ日本らしいものをさへ見ることができる。こゝにはペルーのインカ帝國の特質を簡單に見ておくことにする。インカ帝國の占めてゐた領域は、三十八萬平方哩に凡そ一千六百萬の人口があつただらうと見積もられてゐる。面白いことは、インカ、アズテックの住民は、アメリカ民族の中でも短身形な者たちの築いた文化であつた。いまだ鐵製品の使用を知らなかつたが、金銀銅鑄造にはすぐれた技能をもつてゐた。しかしインカ帝國には文字がなかつたから、職業的な「かたりべ」に依つて民族の魂が傳へられたものであつた。すでに知られてゐるごとく、この國王は太陽をあらはすものとしてあがめられ、精神及び武力を司さどる絕對權を有して居られた。言ひかへれば、この帝國のあらゆる根元であらせられて、まつたく立派な國柄であつた。しかも國土はすべて國家の領有であつて、個人思想の見られないことだ。土地は三分せられてその三分の一は、太陽のために、つぎはインカ國のため、最後に國民のためにあてがはれてゐたことである。太陽のためにさゝげられた土地からの利益は、一切祭祀のために費やされたもの。これらの土地の開發には國民全體が協力をしたことであり、土地から生産するものは、國家に歸納してそれから國民に分配せられたところであり、全體主義の模範國がこんな地方にあるのは、奇異な感じがする。その上、國家單位は家(アイルウ)であつて、それが集まつたものが、部落(シンチ)をなし、その上が王國の治めるところとなつてをり、隣組のやうな制度さへ見られる。祭祀の行はれる太陽の殿堂には、婦人の出入を絕對禁止したのであるが、えらばれた妙齡の處女達は神殿に仕へることができた。大祭は夏期に取りおこなはれ、日の出を迎へることが、その主要な行事であつて、果ては、飮めや食へのお祭さはぎが行はれたものである。なんとなく、日本らしいものが考へ方、暮し方の中に見られることは注目に價する。

それでは、アメリカ民族はどこから來たものであらうかと問はれること。色んな說が主張せられ、本來固有のものと立證づけようとするものもあるが、いまだ成立は見込みがない。なぜかと言ふに、アジア、アフリカ、ヨーロッパの如く、人間祖先の遺物が見出されないこと。しかし、まぜりけのない舊石器時代の遺物が見つからず、新石器時代から始まつてゐること。それ故、途切れ途切れに他大陸から移動してきたものだらうと言はれうる。若しか、どつと一かたまりで押し渡つてきたのであるならば、アメリカ民族の言葉の複雜化は起らなかつたと見られるからである。すると、アメリカ民族と申されるものは、どこの人種に似てゐるかと問はれると、蒙古人の分類に入りうるだらうと言はれる。皮膚の色は褐色で、髮毛は黑色、直狀毛をなし、體毛のすく

ないこと、頬骨の張つてゐる點などが擧げられる。その上、靑色の蒙古斑點が幼兒の身體にあらはれることなどである。そんなところからして、ベーリング海狹を渡つて、シベリアのあたりから來たものであると豫想せられる。しかもベーリング海狹は、一年の中には氷結することがあるのだから、民族移動に役立つたかとも思はれる。現在のところ、エスキモー族は海峽をはさんでゐて、兩岸の種族は同一の身體つき、暮し方、言葉つきをしてゐるところだし、アジア民族の一部にアメリカ民族も關係してゐるものと、論斷されるのが一番有力であらう。さうなつてくるとアメリカ・インディアンが、東洋精神に似たものを持つてゐたとて、萬更、不思議ではないと考へられうるに至る。すでに、アメリカは幾千年以前から、アジア民族の活躍舞臺なのであつた。しかし、大陸の平原、高原に曾つて夢を飛躍さしたのも、昔ものがたりとして傳へられるに過ぎない。

次の章に述べようとすることであるが、現在、アメリカ民族は全體にわたつて、ヨーロッパ人と混血化しつゝあることだ。これはヨーロッパ人が世界征覇をとりおこなつた際、他人種に「あなどり」を與へた結果となつて「あひのこ」と申す混血種族を世界各地につくつたことである。たとへば、二五八一年のメキシコ政府の人口調査に依れば、原住民が四百二十萬人のところ、混血族が八百五十萬人に及んでゐる一例をみても、弱き民族は心を失つて行く一方、血潮までうすめていつてゐるのである。こはされゆくものの姿はいろんな點で哀れである。いろんな良き「ならはし」「こゝろつき」まで失つていつてしまふ。アメリカ・インディアン仲間では、むかしは、お金持ちと言はれる人は、よその人へ澤山、分け與へる人のことなのであつた。しかし現在は、權利・義務・所有權のごとき思想に依つて、みんなが協力して、もちあはせる考へ、心つきを、ばらばらにさせられていつてゐるのだ。弱きものは、踏みにじられ亡ぼされてゆく。

たゞ、この民族が世界へ大きな贈ものをした文物がある。その一つはタボコである。まさしく近代文明の社交は、タボコから成長してきてゐるとも見られる。コロンブスがアメリカ國土へ上陸したとき、原住民は、葉卷をくゆらしてゐたのである。葉卷は、重役などが、のびのびと煙をあげてゐるが、すべて、この民族の世界へ寄越した贈りものであつた。煙のごとく消えゆかうとする民族が、煙をふかすタボコを殘してくれたとは皮肉であらう。そのほか、自分たちの知れるところでは、トマトとか、じやがいも、落花生などが擧げられる。野生植物を栽培改良するのに特殊の才能をもつてゐたところで、われわれも「おかげ」にあづかつてゐるところである。子供の遊び道具として離されないゴムマリも、彼等がつくりだしたものであつた。また、晝寢などに

便利なハンモックも、やはり、この民族たちが、考へだしたところのものである。アメリカ大陸に至ると、アメリカ・インディアン獨特の料理法などは、今日も傳へられてゐるが、むしろ、ヨーロッパ人に、利用、奪はれていつたものと言はれえよう。

8 まざりもの

民族のくづれゆく「さきがけ」をなすものは、みづからに「劣等感」（おとれるもの）を覺えさし初めることである。まさしく、ヨーロッパ人たちが世界植民政策にあたつては、この點にむかつて、最大な努力をはらつてきたところのもの。この向ふからの請求にひつかかつて、くづれゆき初めると、民族の「ひとりだち」をうしなつてゆくのだ。ヨーロッパ人は、相手をだきとつてやるだけの度胸をしめさず、つねに、統治者、征服者としてのぞんできたところに、民族政策に於ける最大の「ぼろ」をさらけだすに至つたのである。かれらの心つきから、自分たちが「すぐれてゐる」とのうぬぼれを拭ひさることができなかつたのである。他民族にむかへば、どの民族も、劣等にしか見えなかつたのである。それゆゑ他民族は、たゞの勞働價値、市場價値としてしか、うつらなかつたのであらう。

この點に於て、わが國古來からの植民方針は、ヨーロッパ人のなしてきたところのものと、まつたく「あべこべ」であつたとさへ言はれうる。わが國には、歷史時代に入つてからも、アジア大陸から諸人種が入りきたつたのであるが、かゝる對立鬪爭をした「あとかた」がない。むしろ優遇をうけてきたやうな傾向さへある。すなはち、他民族を「おさへつける」方策は決して採られきたらなかつたところである。いろんな諸民族を「とかしあひ」ひとつにまとめあげる大きな力をさししめしたのが日本歷史なのだ。この事實に、われ〳〵は大きな期待と「ところ」を得さしめる大事業の一日も早くなしとげられることに努めあはねばならぬ。他民族とうちとけあつて、大きな力を形づくるところに、世界の生成發展がみられうるのだ。しかるに近代におけるヨーロッパ人の植民地政策は、「ところ」を得るのは、自分たちのことであつて、他民族の場合などには思ひを致さなかつたのである。自分たちのためならば「うそ」も使ふし「うばひとる」ところのみならず、殺戮をも平氣でしたところである。アメリカ・インディアンのごときは、その「ちまつり」に擧げられた哀れむべき民族の代表的なものであつた。言ひつたへによると、一時に何百萬人といふ人々が殺戮せられたとさへ言はれるのだから、彼等の使命は、どこ〳〵までも「うばひとる」ところにあつたのだらう。民族政策のひとつに「あたへてとる」と言ふ遣りかたがあるが、つゞまるところは「とりあげる」のが主要目的であつて、飴をねぶらしておくのは、その準備工作なのであつた。こんな手にのるのは、心のすぐれてゐないものが、ひつかゝるところであるが、人間として兎角おちいり易い弱點である。ヨーロッパ人の文化工作には「あたへてとる」

遣りかたで終始してゐる。ときには、甘い言葉だけの「からてがた」で終ることもありうる。「あたへてとる」の方策を最も露骨にあらはしてゐるのが、彼等の宗教傳道にみられる。貧民救濟とか、社會改善とか、文化設備のごときものを、惜しげもなささうに施して、最後は、自國の方に身心を奪ひとらうといふのである。たとへば、日曜學校のごときものでも、いろんな繪ヘガキとか、繪本とかを配つてくれるのに、つい、ひきこまれて、ヨーロッパ文化優秀性に拍車をかけることにならしめてゐる。宗教は世界共通のものなのだと言ひながら、必然的にヨーロッパ人の宗教は、他民族をくづしゆくのに大きな役割を買つてきたところである。この點に於て東洋の宗教の占める位置を再び考へなほすがよい。近代人は歐米的なものが、簡單で「はやわかり」がするとか言つて、心をかきみだされてゐるところだが、東洋の宗教は、みづからの「こゝろ」を深め淸めるのであつて、決して、他民族の「こゝろ」を奪ひとることではなかつた。それゆゑ、こゝには、人種とか民族とかの問題にひつかかるところのものがない。つねに、それみづからの「ありかた」を、うつくしく、高く、おごそかにすることにあつたのである。ものを「やりとり」するとかの問題でなくて、心を確立することは、それみづからのことなのである。しかるに、この宗教は、日本に受けいれられて、これからの眞實の使命に待ちかまへてゐる。わが國は、世界を「おさへつける」のでなくて、いだきとるところに永遠の光りを仰がしめる。わが國の行き方には「まざりもの」(不純)の姿は認められない。つねに「みいつ」のなかに融けあはしめてゆくところで、味方とか敵とかを乘りこえて發展していつてゐる。

こゝで再び前章と關係してゐるところであるが、他民族に醫療設備とか、衞生思想を吹きこむとか、生活程度をたかめるとか、勞務待遇を改良するとか、婦女子賣買をとめるとか、公娼廢止とか、社會矯風・學校設備・赤十字社・公共事業などのことで、色々「おかげ」を日本も蒙つたかも知れないが、つゞまるところ、ヨーロッパ人世界植民地政策の一環とつながりあつてゐるものであつて、その良き手本は、どこにあるかと言へば、ヨーロッパ本國にあることを教へるのである。しかし、こんな「まはり」をあらためることに依つてのみ、眞實の解放、解脫は決して各民族に與へられないのである。なるほど、アフリカ奧地の原住民たちも、ヨーロッパ人の撒りまく植民地政策で、文化生活の「うるほひ」を受けてきたかも知れないが、決して幸福にはなれなかつたのである。つゞまるところ、なにを得たかと言ふに「劣等民族」との稱號をかち得たまでゞある。植民地經營は「まはり」を改善してやつて、他民族の劣等であることを證明することではない。これからの植民地經營は、みづからの持つ「たふとさ」にめざめさすことである。より

偉大なる理念のために、理想のために「まはり」をひらいてゆくものであらねばならぬ。つゞまるところは、高貴なる魂のみが、もつともすぐれたる植民地經營をなさしめると言ふのだ。

今までのところで、ヨーロッパ人の植民地經營の失敗しゆくところが、凡そ、はつきりとしたところであらうが、その中でも、特に「ゆきつまり」を覺えさすものは、人種問題に於てであらう。みづからを高しとする人種と、劣等と名づける人種とが、まざりあつたときには、どんな悲劇がかもされたであらうか。白人種には、他人種と同等にみられたくないところから、この人生の戯れは、つひに解決點を、よく見出さずに世界をうろついてゐる。いかに無責任なものたちであるかと言ふことが見られる。混血兒は、ヨーロッパ人の間にあつては、優秀民族と劣等民族との中間人種位にしか扱はれてゐない。それどころか、產みおとされたものは、兩民族間に容れられずして、なやまねばならぬものもあるだらう。この罪な子たちが、世界には至るところに、ばらまかれていつてゐることだ。一度び、身を交はしあつた上には、その責任をすべて擔ひとるのが、日本人のゆきかたである。さうでなかつたならば、この人種上の悲劇を解決する點は、みいだされ得ない。近代植民地政策が他民族の貞操を奪ひとつてゆくことにあつたところから、「あひのこ」の生まれることは當然のことであつた。わが國が、かれらの血潮におかされなかつたところには、考へねばならぬ原因があると思はれる。

その第一原因として見られることは、家族制度が、この「だらしなさ」を防ぎとめることに大きな力を致してゐること。民族力を養ふ培養地として、この制度の力强さを認めずにはおかれまい。もしか、この制度の破壞されるときは、日本民族の終末時だと豫言できうるだらう。外國の個人思想によれば、好きになり、惚れあつたものが、結合することであつて、土臺が個人同志の意志疏通に任せあふことになる。それゆゑ、かれらの結婚觀はわが國で言へば「のたれど」（私生兒）を產む方向に走つてゐるのだ。その國から傳へられた戀愛結婚の流行が、かなり家族制度に敵對的な行動をしめすことはあたりまへである。しかし、わが國にあつては、個人が本位なのでなくて「家」が本位なのである。家に容れられないものは、個人的な「すきこのみ」を捨てさらねばならない。男女の「ほれごと」が、凡んどの場合、一大難關に立ちいたることは、こんなところに見られる。しかし、外國の文藝・思想とかが大きな宣傳役をつとめてゐる點はみのがされない。この點に於て、外國映畫・飜譯物・文化文物などを考へなほすことがゐる。民族力は、つねに「こはされないもの」を持ちつゞけるところに發展力をつちかふのである。「こはされやすい」ことは發展してゐるのでなくて、消えさつてゆきつゝある傾向である。それゆゑ、女の「みさほ」

は、大切な民族力の「ばね」である。この貞操觀がこはされるときは、家族制度もこはされゆくことである。近時、青年層を動かした「わかいときは、うれしくたのしく」の放縱性とか、戀愛と結婚を別ものにかんがへるやうなまざりものゝ考へかたからは、心の方向轉換がゐる。男女が交際をするのも良いことだが、つねに家の生活が中心となつてゐなければならない。家族制度は取り亂されるもの、不純なものゝ入り來ることを極度に嫌ふのである。その點、都會地とか、開港場とかは、この家本位の考へから餘程ふみそれたところのものがあつたかも知れぬ。そんなところから、家の行事などには心をふりむけず、おたがひに個人の行事にいそしんでゐた點もあらう。そのとき、農村地域にあつてはこの「こはされやすい」思想にむかつて沈默を守つて抵抗をしてゐたのだ。「のたれご」や「あひのこ」をつくるのを極度にいましめてゐるのである。たやすく、くどきおとされなかつたのは、家といふ傳統に生きる生命體があつたからである。こゝでは「ひとかたまりのもの」が、つねに清淨な喜びを與へてくれてゐる。この中にこそ、大きく展開する力が養はれてゐることだ。これを中心にして、親類づきあひがなされ「うぶすな」の神を中心として、氏・種族が形成されていつてゐるところに、わが國の力强さを見ることができる。かゝる「かたまつたもの」を取りこはされるもの、言ひかへれば、貞操を易くゆづりわたすものは亡びゆく民族の前兆とみられる。

その雜婚雜種をつくり易いのは弱い民族の「つきもの」である。すなはち、女性が他種族にかしづいて行くことである。古代以來、戰爭に行けば、征服國の女性を「とりこ」にしてかへり、また「みつぎもの」として女性を受取ることも度々であつた。ヨーロッパ人の植民地經營は、他種族の征服にあつたところのものだから「あひのこ」が至るところに出來て、あたらしい種族さへつくつて行つた點さへ見られる。初めに、アメリカ・インディアン種族のありさまを眺めてみよう。グリーン・ランドに住まふエスキモー族のごときは、デンマーク人の血すぢを受けて、すでに純潔なるものは殆んどないと言はれてゐる。ラブラドルの原住民は、イギリス漁夫との接觸から、その民族の純潔性をけがされてゐるし、アルゴンキン族とか、アブナキ族、ミクマック族のごときは、フランス商人にあらされるところに任せられた。メキシコ、中部アメリカ、南アメリカに及ぶと、ます／＼雜婚の果す役割が大きくなつてきてゐる。メキシコの二五八一年の人口調査によると、百四十萬人の白人種に對し、原住民は四百二十萬人、そのとき雜婚種族は、八百五十萬人を算してゐることだ。この土地では原住民をメキシカノスと呼び、雜婚をアメリカノス、白人種をエスパニオールと呼びなして、社會的に占める位置が區別されてゐる。メキシコ政府の

統計によると雜婚は近年ごとに增加する傾向をたどつてゐる。二四七〇年には、二・二割の雜婚種が、二五六一年には四割、二五八一年にはまさしく六割に到達していつてゐることだ。二五五〇年のブラジル政府の統計では、四・四割がヨーロッパ族、アフリカ族(黑人種)が一・四六割、アメリカ族が〇・九割のところ、雜婚種が三・二四割を示してゐる。然しブラジル國のごとく、移民を奬勵してゐる國では、この率の變動も、しばらく不安定なところがあるだらう。とは言へ全體面からみる凡その趨勢として、中南部アメリカは雜婚種の支配するところになるものと想像せられる。

アメリカに於けるアフリカ族、即ちネグロの問題は複雜した人種問題を投げかけてゐるが、こゝでは白人種との雜婚にのみ目をとゞめておくことにする。二五八〇年度に白人種黑人種の雜婚は、百六十六萬五百五十四人に及んでゐて、アメリカ黑人種の一割五歩九厘に相當してゐるのであるが、こゝにおかしい有さまが見受けられることは、二五七〇年度、即ち四十年前の人口調査の時より三十九萬百三十二人も減少してゐることである。これは、明らかに雜婚意識を嫌忌するところのものが「とゞけいで」をごまかしたところであるし、また黑人種の血すぢをひくものでない者として別の社會の中に入りこんだことを意味してゐる。

すでに古代史から各民族が混交しあつたところであるが、そこには、つねに調和のあるところが幾らかみられたものである。それゆゑ、ことさら問題をおこさなかつたものであるが、近代の白人種が世界にばらまいた雜婚は、人種的に不調和なるものがいちじるしく目立つことである。人種的に異質的なものが混交しあふのだから「みにくい」體格さへ生みだされるに至つた。たとへば、手の短い白人種が、足のことさら長い黑人種の系統をうけて生れでてきたりする場合である。人種的な調和感の保たれることは、「にたもの」「おなじもの」を姿、感情、心の動きにも覺えさすことであらねばならぬ。その點、血統、血族と言ふものが大切な「つながり」をなしてくれてゐる。なぜ雜婚が嫌はれるかと言ふに、この民族の調和・統一性を破壞してゆくからである。すなはち雜婚といふものが、優生學上に於てすぐれるとか、すぐれないとかの問題にあるのではなくて、この調和、統一性をきづつけるかどうかと言ふ文化傳統上のことがらなのである。西洋では雜婚が劣等種族をつくるとか、つくらぬとかで、論戰をはつてゐるところであるが、わが國の場合にあつては、かかる問題によつては、決して解決せられるものでない。たとへば、雜婚人種は、生活力が低下すると主張する者があるかと思へば、向上すると主張するものがある。それ〴〵の具體的事實によつて、言ひはらうとするのであるが、すべて大局を見わたす目に缺けてゐ

ると申されよう。二五八八年版のルンドボルグの「スェーデン國の人種學」のなかでは、スカンディナビア人とラップ人との混血が生活力において減退すると申したてゝゐる。二五五四年版のボアの「混血アメリカ・インディアン」の著に於ては、混血婦人の方が、原住民よりは、はるかに人口増殖率にも富んでゐる上に、混血兒は、體格體質上にもすぐれ、混血は人種によき影響を及ぼすとまで言つてゐる。こんな例をもつてくれば、はてしなく列擧することができるだらう。二五七一年版のラケルダの書いた「内部人種問題」の著に於ては、ブラジルに於ける白人種と黒人種との混血は、父系母系にくらべて、抵抗力・生活力ともに低下し、經濟力にもとぼしく、放縦的だと言つてゐる。それにひきかへ、二五九七年版のドーバーの著「混血階級」に於て、ニュウジーランドのマオリ族との混交は、體格上また性格上にもすぐれたところの良き例と言つてゐる。これらの論説は、すべて部分的で總體的なものでない。民族といふものは、かゝる部分的な現象をのりこえて、つねに總體的なものとして躍進しつゝある。そこに大切なのは、いろんな場合とか、部分なのでなくて、これを乘りきつてゆく「たましひ」と「いのち」の指導確立に期するところのものだ。

混血問題にとゞまらず人種問題は、社會問題につながり易いことは當然なことだらう。南アフリカ南端に於ては、白人種、バンツー族、インド人、混血族との間にきびしい區別が設けられてゐる。しかるに混血兒は殖えてゆく傾向にある。二五九〇年には南アフリカの全人口六百九十二萬八千五百八十人の中混血兒が五十四萬五千五百四十八人を占めてゐる。バンツー族が四百六十九萬七千八百十三人のところにインド人を主とするアジア人が、十六萬五千七百三十一人を示してゐる。二五七〇年から二五九〇年の十年間になされた増加率は、混血兒は三・七三百分率で殖えたと言ひながら低率である。この間にバンツー族は、十六・八九百分率を示し、アジア人は八・八九百分率の増加を示してゐる。アフリカ南端の混血兒はオランダ人との間になされたもので、初めは婦女子の缺乏から、原住民の婦人と混交しあつた結果なのであつた。しかるに植民地の土臺が出來上ると、本國から御令孃方がお見えになつて、これら原住民の婦人を追ひだして、支配者の階級を確立することができたものである。そのほか、フランスの新教徒やドイツ人の移住民がきたつて原住民との結合は、ブーア人、クリクア人、レホボター混血兒などを派生せしめることになつた。

アジア大陸に於ては、ポルトガル人が混血兒をつくつてゆく手はじめをなした。そのアジア大陸の最大據點は、インドのゴアと支那のマカオとを擧げることができる。ポルトガル植民史に於

では、現住民婦人をめどることが奬勵せられたことであつた。それゆゑ植民地への遠征にでかけた出征兵士は、そのまゝ一生を外地に送る場合が多くなり、その後には、混血子孫を現在にまで傳へることゝはなつた。これらの混血兒は年數も經てヨーロッパ人に同化されたと見るべきものであらう。これらのものは熱心なキリスト教徒であり、人種的にも今は單一的なものを保つてきてゐると言はれうる。こんな場合は、母系的な國民意識が消えうせていつた印しであり、あきらかに侵略されたものゝ受ける哀れな民族運命史なのでもある。

しかし、アジア大陸の場合に於ては、あきらかに他大陸との場合とは異なるところがみられる。アメリカ・インデイアンにしろ、南アフリカにしろ、白人のあらされるに任せられたところであるが、アジア大陸の各地には白人の示す文化力ぐらゐでは驚かぬ精神上の優位が至るところに見られる。この高らかなる東洋の魂があつたればこそ、アジアは今日に至るまで、精神に於て蹂躙せられてゐなかつたと申しうるだらう。そんなところからして、むやみやたらに、混血兒をつくりだしてはゐないと認めうることができる。それでも東洋を忘れはてた、あはれな人々もあつたことである。白人の餌食にあまんじ喜んだものも、中にはあつたことだらう。

白人の東洋に於ける侵蝕地は都會地に限られてゐて、それも金融市場の連絡地として役立つところである。貿易商、商館、銀行、代理店の如きものが、根じろを下してあまい汁をしぼりとりにかゝつた所からであつた。それゆゑ、どちらかと言へば、教養のあるとか、文化人がでかける機會が少なかつたと見るべきである。若しか、たかき理想と精神をひろめる場合であれば、植民地には文化人がみづからでかけてゆかなければならない。植民政策が、たゞの經濟資源開發ではなんの意味をなさないのである。わが國にありては、つねに原住民の精神文化の向上に寄與しなければならないことである。これが、むしろ主眼點にさへ思はれることだ。

東洋に撒りまかれた混血兒は、ヨーロッパ人の腰掛生活の間から產れでた、便宜的な排出なのであつた。むしろ國際結婚、國際戀愛とかの宣傳入りとまでとなつた遊戲的なものでさへあつた。シャンハイ、ホンコン、シンガポール、カルカッタ、ボンベーとかには、これらヨーロッパからの出張員のばらまく腰掛生活と同棲をこゝろみるものがあつた。インドに於ては、二五八一年に十一萬三千九十人の混血兒の統計をしめし、十年前とは一割三歩の增加をしめしてゐる。これらの混血兒はヨーロッパ生活と東洋生活の「はしかけ」をなす役割を自然にうけもつことになつて、インドとかジャバとかでは爲政者の手足となつて手傳ふことであつた。それのみならず、面白いことには、ヨーロッパ人と現在民との中間地帶に住宅をかまへてゐることで、そんな有さまがカ

ルカッタ、ボムベー、マドラス、コロンボ、ラングーンに於ても見られることである。また官政者の下役を仰せつからぬ者とて、アジア海岸地帶のみならず、モムバサやザンジバルのあたりまでもでかけて、仲介業とか、代書、番頭とかの仕事を得意とし、アラビア人とアフリカ貿易の競爭をなしてゐる者たちもゐる。

インドに於けるイギリス植民政策も初期に於ては雜婚を奬勵したやうであり、その混血兒はイギリスと對等の位置を與へる方針なのであつたが、次第に消極的となつていつた。そこにはインド人の自覺がともなつてきたことを意味する。混血兒がイギリス人と對等の生活をつゞけることは、殆んど不可能であつて、從つてイギリス人からも相手にされず、自國民からは賤しめられ、果ては救世軍が二五九三年にその對策に乘り出したと言はれる。なまはんかに、ヨーロッパ人のまねをしようとして、路頭をさまよはねばならぬ、みぢめな狀態をさらけだしたことである。

混血時がかゝる生半可の狀態におかれるとき、哀れなる悲劇と申さねばならぬ。性格的にもかゝる生半可なところが擧げられることになるかも知れない。血潮を以ての世界ヨーロッパ化は、たゞ偶然的な生半可な出來ごとであつて、現住民を眞實に思ひやつてからの「まごころ」からの出來ごとでなかつた。むしろ、他人種の婦人をもてあそんだものと言へよう。それゆゑ、その生れでたものには、責任をとらないと言ふやうな狀態を現出したのである。混血兒の問題は、各種族間の許容力の如何に歸することである。わが國は、こんなことに、いまだ破綻をきたさずに進展してきたところに、民族力の强さをさへ覺えるものである。白人種の「ひとりよがり」に容易にへたばるやうな東洋ではない。各民族は、みづからの血潮の淸らかさに「ほこり」をとりかへす時代である。

9　うばはれたもの

1

民族と民族との戰ひは、つねに奪ひあふ姿の中に、ゑがきだされてゆく。すでに女性の奪はれゆく經過を貞操觀と結びあはせて眺めてみたことである。思想戰に、はたまた經濟戰に、戰爭に於て、すべて相手の所有してゐるものを奪ひとつてゆくのである。ヨーロッパ人の營んだ植民政策は、他民族の所有してゐるものを奪ひとつてゆくことに他ならなかつた。それどころか、他民族の所有してゐる能力を發展させないやうに、色んな點から壓迫、抑壓することに務めてきた。即ち、ヨーロッパ人に特權を持たせて、他民族、他人種から權利を奪ひとることとなのであつた。それゆゑ、他國土に治外法權を强要して、ヨーロッパ人の一人天下を確立せしめようと努めてきたところである。凡そ、世界の兩極をのぞいた大陸地は五千三百萬平方哩あると言はれてゐるのであるが、その中、四千七百萬平方哩をヨーロッパ人が支配してゐることになつてゐる。まさに地球全表面の九分の八は、白人種の手にゆだねられてゐたところであり、殘り僅かの六百萬平方哩が有色人種の手に殘されてゐた計算であつた。しかるに一二五九〇年の有色人種の總人口は、凡そ十一億三千五百萬人と見積もられてゐる。その時、全世界の白色人種の人口は、七億六千六百萬人とかぞへられてゐる。ここに權力を奪はれたものが、奪はれたものを取り戾さうとするところの「めざめ」は、當然、呼びさまされてくる。白色人種が日夜の如く憂へてゐる夢魔こそ、他人種からの「あだうち」に他なるまい。權謀術策で他民族をしひたげたものは、いつも、しひたげ返される恐怖心にをののいてゐなければならない。前歐州大戰後、彼等の心裡中に出來する思想は、ヨーロッパ文明の「くだりざか」「ひつくりかへる」に至つたと思はしめることであつた。白人種の全世界から强奪すべき所の最頂點に達して、いまや、くづれゆく一步手前にあると、いろいろの思想家に依つて豫告宣言せられてきてゐるところである。ことに、ドイツの哲學者スペングラーのごときは、ヨーロッパ人種が完成したところの機械文明を他人種が利用するところとなつて、必ず白色人種の世界建設は、くつがへされるに至るだらうと告白せしめてゐる。全世界の動向は、スペングラーの豫言に從つて進展して行つてゐる。なぜに白色人種がみづからの作りあげた世界の前に恐怖心をおこして、みづからのゑがきあげる幻影の中にくづれはててゆかねばならないのだらうか。こゝに、全世界統治に於て「心の高さ」と言ふべきものが重要なる地位を

占めてくることになる。今、こゝに日本の致すところの全世界統治の方針とくらべあはせて眺めておく必要があるだらう。ヨーロッパの思想・哲學からしては、對立思想から乘りこえることが出來なかつたのである。ところが我が國本來の傳へられてきてゐる全世界統治は、神武天皇の肇國精神、聖德太子の全世界を生きかへらす思想、明治天皇の開國發展の御事業にも明らかに見られるやうに常に對立思想を乘り越えさせられ給ふてゐる尊き御精神の發露なのである。それを言ひかへれば、ヨーロッパ人は、他民族、他人種にむかつては、敵對思想、敵對行爲の中に生活をしてきたところである。彼等には全世界を正しき「めつき」の中に眺めわたすところの「とゝのへ」も、心の「ゆとり」もなかつたのである。つねに、ひがんだこころの心つきで、せまぐるしい世界を他民族におしつけて、わが世界はなりあがつたと、つけあがつてゐたところのものであつた。それゆゑ、かれらのゑがきあげる人種觀、民族觀は妥當なる見方を缺いでゐるのが常である。これらの學說は、單なる學說にとどまらず、つねに他人種、他民族に對する對策として、むごたらしい殘忍性をあらはしてゐるのである。ヨーロッパ人の他人種に向つての取扱ひが、つねに殘忍性をあらはすことは、ひとへに、對立思想、敵對思想、キリスト教思想に、わざはひされてゐるからなのである。こゝに、その最も良き例として、アフリカ黑人種の場合をかんがへめぐらしてみることにする。

他人種、他民族に對した場合に、人々の頭に浮び易い考へは、他國人が「けだもの」に近く思はれ易いことである。この落ちいり易い感情が、ヨーロッパでは堂々たる學說體系をなしてあらはれきたことである。近代の人種學なるものは、人間を動植物扱ひにする學問なのである。その民族の持つてゐる精神とか、傳統とかを拔きにし、動植物として學問の對象にとりあげてきたのである。その最も甚だしきものは、二四五九年に發行された、ダーウィンの「種の起源」と申す本であらう。この本に於ては、人間は動物から進化を遂げたと言ふのであつて、ヨーロッパ人をのぞく他人種、全人類を動物並みに扱つてほくそゑんだ學說なのであつた。「こころ」を拔きにした人間の地位などと言ふものは決して考へられない。精神のすぐれたるものこそ、世界統治能力にあづかれるものであつて、決して、ヨーロッパ人のみが惠まれた能力をもつてゐるものではない。ヨーロッパ人の體質、骨格のみが人間の標準なのではない。かかる學說の言はんとするところは、他人種は動物に類似した點を幾らも所有してゐることを論證せんとしたものであり、それゆゑに、人間並みに扱ふに及ばぬことを暗示してゐるのだ。ダーウィンのみならず、ヨーロッパ人は少かれ多かれ、白色人種優越の偏見にとらはれてきてゐる。この偏見が、アフリカ黑人種に

めぐりあつたときに、爆發したのは當然である。他人種を「けだもの」扱ひにする學說にさきんじて、かれらは黑色人種を牛馬にひとしく取扱つたものである。名前こそ「奴隷」と名づけしめてゐるけれども、これは人間を家畜なみに扱ふことを意味してゐる。卽ち家畜のごとく食物をあてがつて、その代りに牛馬のごとく勞働をせしめることなのであつた。人類歷史のはじまつてからこの方、こんな慘酷なる人間の扱ひを公公然として取扱つたことは稀有なことであらう。アフリカからヨーロッパ人の植民地に驅り立てられるアフリカ人達は、鐵鎖につながれたまゝ「はじけ船」に山積みとされて港に送りだされたのである。乘船する前に屢々轉覆してしまひ、つながれたものたちは、哀れにも海底の藻屑とならなければならなかつた。そんなことで西印度諸島、アメリカ國へ到着するまでには、一人上陸するにつき、五六人の犧牲者が拂はれただらうと言はれる。さうまでのことはなかつたとしても、少くともアフリカからアメリカへ送り渡される船上生活中に五割から六割の奴隷が、病死したと言はれるのだから、その取扱ひの如何に苛酷であつたものかと想像がつくところだらう。アフリカ文化硏究者のハースコビッツの報告するところに依ると、現在に至るまで、このいたましき同胞を想ひやる行事が、ダホミーに於て行はれてゐると言ふ。アフリカ人の頭から、彼等の一族が人間並みの扱ひを受けずして海外へ送りだされたことを、今日に於ても忘れ去ることが出來ないとのことだ。たしかに黑人種のヨーロッパ人に對する呪ひは、執念深くつゞけられてゐるのだ。自分だけがよいことをすると言ひながら、人間の良心をなくしたヨーロッパ人達であつた。それらが神の敎への傳道などするのだから、お話にならない。この近代奴隷の始まつた動機から調べておくのも、まんざら役立たないこともあるまい。

まさしく近代文明は、黑人種の呪ひのうちから成りたつていつたとも言はれうる。黑人種の血潮を血まつりにあげていつて、ヨーロッパ人のほしいまゝにする世界植民地化をはかつてきたところである。その奧底には、宗敎的要素があると、デュ・ボアは、一二五九九年發行の「黑人種の現在と過去」の中で言ひ放つてゐる。この宗敎的要素こそ、他人種排斥の偏見をつくりあげてきたところのものに他ならない。デュ・ボアは、この近代奴隷にたづさはつた宗敎は、キリスト敎と回敎であると申してゐる。この二つの宗敎がグルになつて、この人類最大の悲劇をなしとげたのであると言つてゐるが、かなり、うがつたところだと申されよう。すでに回敎徒は、千三百年以前から、アフリカに侵入をつゞけて、黑人の賣買にたづさはつてゐたところであつた。その賣られた黑人は、召使ひや兵卒として使用されたところであり、スーダン、アビシニヤからの黑人達は、アラビア、ペルシア、インドなどの王宮、王候に黑光りのする生きた飾りものとして、上

流階級の虚榮心を滿足せしめてゐたところのものであつた。また、回教徒に改宗するときには、もてなしも仲間同志として取りもちされたところであるから、餘程キリスト教徒の場合とことなつてゐたのだ。回教では奴隷をみとめてゐるけれども、その取扱ひをよくしてやり、出來ることなら釋放してやるのが良いことだと敎へてゐる。奴隷の身分で主人の子をはらんだ時には、親子ともに自由の身になるのが普通であり、一家族内で產まれた奴隷の子は、賣買されないことになつてゐた。それにとどまらず、主人のお氣に入るときは、上役にとりたてられた程である。それらの榮達をとげた黑人種の子孫が現在でも、アラビアやインドにはあることだ。こんな狀態であるときに、一度びヨーロッパ人の手にわたつたときには、人間としての存在を頭ごなしに抹殺されてしまつたのである。

その直接の動機となつたのは、一二〇〇年頃、ポルトガル人が北部アフリカのムール人の領土をおかし、西海岸に到達したときのことである。一二〇一年のこと、上官の一人である、アンタム・ゴンサルベスが、ムール人を捕縛したのであつたが、その翌年、王命に依つてもとの所へ返してやつたのである。その時のお禮に十人の黑人種の奴隷と、駝鳥の卵やら金粉を受取つたのである。このことが後程の近代奴隷の大悲劇に關係してくる發端なのであつた。そこには人間勞力の利用と貪欲と宗教上の問題などが、からみついてゐたことであつた。このいやしい一時の欲望にかられて乘りだしてきたヨーロッパ人は、おのれの蒔いた罪をみづからが、あがなはなければならなくなつたのである。

その翌年には、若干名の黑人種がスペインとポルトガルに召使ひとして輸入され、以後セビラには、黑人種の町をなすに至つた程である。イサベラ女王のころは、これらの奴隷も親切な待遇を受けたほどで、アフリカの習慣をそのまま樂しんでゐたと言はれる。一方ポルトガルに於ては人口の減退にともなつて勞働力の補給をなすため、アフリカからの奴隷が切實の役を果してくれることになつたのは良いが、リスボン市に於ては、白色人より黑色人の方が多いと言ふやうな有さまに至つたのである。それから五六十年の中には、ポルトガル全土が、アフリカ人の血潮を受けつぐ狀態にまで立ち至つたことであつた。まさしく恐るべき血潮のまざりあひが、こんなところにも見受けられることだ。白色人の一時のまねあはせ主義が、永遠の混亂をきたすことになつていつたのである。

コロンブスは「とりこ」にしたアメリカ・インディアンを奴隷にするようにと提議し、五百名からのアメリカ・インディアンを本國に送つてセビラに於て、競賣にしようとしたことであつた

が、イサベラ女王の取はからひに依つて、送還されるに至つたのである。

その後、ニコラス・オバンドウなるものがハイチ島の統治者となつておもむくに至り、ひざく（ママ）アメリカ・インディアンを虐待したものであるらしい。名高いバルトロメ・デ・ラスカサスと申す天主教の司教が、この狀態を目にしてスペインに來り、ハイチ島に居るスペイン人は黑人の奴隷を輸入することが得るやうにと、時の王に申しでるに及んだのである。まことにアメリカ・インディアンにはありがたい取はからひであつたかも知れないが、その虐待に黑人を以てしてあてるとは、なにごとの至りであつたらうか。司教にして言はしめれば、アメリカ・インディアンは鑛山の仕事には不向きであるから、黑人種ならば一層の勞働力に耐えようとの、ありがたいおぼしめしからなのであつた。遂に、この提議は取りあげられることになり、王のお氣に入りのサボイ人に、ハイチ、キユウバ、ジヤマイカ、ボートリーコに一年每に四千人の黑人を送りだす獨專權を與ふるに至つたのである。しかるに、王のお氣に入りは、二萬五千デユカート金貨を以つてこの獨專權をゼノアの商人に賣りわたすことゝはなつた。ゼノアの商人達は、ボルトガル人から奴隷を買込んで、西インド諸島、アメリカへ組織的に送りこむに至つたのである。この黑人種をアメリカ大陸へ送りだす人間賣買は、近代文明の發達に取つて缺かされない一大要素であつたと誌める人達があるやうに、近代人文發達のかげには、かゝる恐ろしき罪惡が取行はれてゐたのである。近代ヨーロツパ諸國は、黑人賣買に依つて、經濟地盤をかためていつたものとも言はれえよう。

黑人賣買のため、スペインが直接アフリカに關係しなかつたことは、すでに知られたことであるが、ボルトガルとスペイン兩國間の世界分割協定に於て、アフリカはスペインの關係する分野ではなかつた。そんなところからして、奴隷は第三國を仲介人として買ひうけてゐたものである。初めに根據をアフリカに下ろしたのはボルトガルであつたから、その國から供給を仰いでゐた。ボルトガルは、アフリカ黄金海岸のエルミナに奴隷賣買の足場をつくつたのは、一一四一年のことであつたが、やがてスペイン勢力から獨立したオランダ國に依つて、これらの築いた足場は奪はれていつたのである。一一二八一年には、ボルトガルの勢力はアフリカ西海岸から一掃され、オランダはギネア灣沿ひにも、十六に餘る賣買市場をまうけるに至つた。オランダは自國製産品をアフリカへ送りこみ、その引きかへに奴隷を買ひうけて、西印度諸島、アメリカで賣りはらひ、そこの産物と利益金とをさげもどると言ふ貿易交路を初めたものであつて、この貿易交路は、イギリスに奪はれるに至ることになる。この人身賣買の交易路を確保したところに、イギリスの世

界發展の方式を促進せしめるに至つたのだとも言はれる。二三三二年に王侯貴族からの投資を受けて、王室アフリカ會社を設立し、もつぱら奴隷貿易を獨專するに至つた。ことに二三七三年、スペインとスペイン領土への奴隷配給權を三十年間受けあふことに至つて、一段と飛躍するに及んだ。初期には、ブリストル市が奴隷貿易の中心地であつたが、後年には、リバープール市が、この貿易の根據地となつていつた。議會はこの貿易路を促進するために、補助金をさへ與へたことである。二四一一年には五十三隻の船舶がこの交易路に從ひ、二四三五年には八十三隻、二四六〇年には一年に百八十五隻に及ぶに至つて、その年には、四萬九千二百十三人の奴隷が運ばれたことになつてゐる。リバープール市の發展は、近代イギリス資本主義を發展せしめることに役立つたものである。それを詳しく言へば、リバープール市は、ランカスタ工業地帶に近いものであつたから、工場主達はこの貿易に投資するに至り、相互に利益を分ちあふことに至つたのである。そんなところに、イギリス近代工業の發達と、切るに切られぬ關係につながつたものである。

しかし、アフリカは世界歷史はじまつて以來の恐怖におそはれたものであつた。時には全部落が滅亡し、時には一地方の住民が絕滅するの悲慘を繰り返した。奴隷を狩りあつめる爲、戰爭・內亂・誘拐が絕えず行はれたところである。戰爭といふものも要するに奴隷賣買をあさつてゐる

ヨーロッパ人の欲望を滿たし、同時に利益にあづからうとの動機から、人狩りを行事的に行つたところさへある。他部落民と言ひながら、同人種を賣りとばしてまで歐洲製產品、武器、彈藥をあがなはねばならない運命にあつたのだ。近代植民文明はアフリカ大陸の人口資源を枯渇せしめるに至つたとさへ言はれる。何百年このかた、アフリカが原始社會狀態にとどまつたのも、この奴隷賣買のおかげである。ほとんどアフリカ大陸の三分の一の人口は、この悲慘な運命のまへに狩りたてられていつたのである。しかし、この報復はそのまゝにしてはおかれないだらう。奴隷禁止をなすに至つたのも、決して人道上からの美しいことがらからなのではない。もつとも大きな原因は、黑人種の報復をおそれたことであつたと言へよう。ハイチ島の黑人種の獨立、暴動はイギリス國をしておそれ、をのゝかしめずにはおかなかつた。すでに、アメリカ合衆國に於ては獨立戰爭に參加した黑人種を解放してやつたことなどから、奴隷解放に關する法令が二四五七年にはバーモント州に見られ、その翌年には、マサツセツチユウ、ペンシルバニア州などに及んでゐる。ヘイチの獨立とゝもに、奴隷賣買の禁止が、アメリカにも影響せずにはおかなかつた。遂に奴隷輸入禁止を二四六八年に法令に依つて公布するに至つたものである。一方英國に於て奴隷反對の動機が議會に於てなされたのは、二四三六年のことであつたが、クラークソン、ウイルベ

トフォース、シャープ氏などの努力によつて、それから三十一年後には、奴隷賣買が禁止されるに至つた。イギリスが奴隷解放の實現をみたのは二四九八年のことで、奴隷所有者の損失をあがなふために、二千萬ポンドの金貨を支出するに至つたのである。アメリカに於ける奴隷解放は、大統領リンカーンの奴隷解放令に依つて、二五二三年一月一日より奴隷は自由民となることを得たのであるが、市民權を得るまでには一並みならぬ迫害に耐えなければならなかつた。とに角、世界の動向が奴隷禁止、奴隷解放の機運にさそはれていつて、インド、スウェーデン、フランス、オランダ、ブラジル、ポートリーコ、キューバなどが、つゞいて解放をし、アフリカ本土の諸領土が始めだしたのは、四十年前のことだし、アビシニアが實行したのは、二五八一年のことであつた。現在、尙ほ、回教諸國にはこの制度を行つてゐるところもある。一應、かゝる結末で黒人種問題は解決がついたやうに見えるけれども、人種上の對立、權利、迫害、反抗のごとき社會政治教育問題は、ときほぐされない惱みとして、白色人植民地に殘された問題であるが、ことにアメリカ合衆國に於て、この奪はれたものゝ姿のもがきが、はつきりとゑがきだされてゐることである。

2

　行動の自由をうばはれた黒人が幾人、アフリカから送りだされたかは、それ〳〵の人に依つて見込みの數がちがつてゐる。モレル氏（二五八〇年）の推算によると、二三二六年から二四二六年の百年の間に、イギリス國が取扱つた數だけで二百萬人に達すると言ひ、これらの奴隷は、イギリス、フランス、スペインの植民地に送りやられたものである。二三七六年から二四一六年にアメリカ大陸の諸植民地に流れこんだ黒人達は、一年平均七萬であり、總計三百五十萬に達してゐる。二四一二年から二四二二年に至る間、ジャマイカだけが受けもつただけで、七萬一千百十三人、二四一九年以後三年間に、グアデループの小さな島すら四萬人の奴隷を入れこんでゐる。二四三六年から二四六〇年に至る間、アメリカ大陸へ取り込む一年の平均數は七萬人をくだらず、この二十四年間に百八十五萬人のアフリカ人が到來したと申してゐる。

　この黒人の波は、甘蔗栽培とか、綿花栽培とかのために農園に送りこまれて、白人達はその勞働力を使用して、樂な利益を擧げようと夢みたのである。しかし、この黒人の波はかへつて、白人のゑがく怠惰の世界をひつくり返していつてゐるのだ。人間の尊さは身を以つてはたらき、動

くものによつて世界が打建てられることには、古來から、かはらざる道理なのであらう。現在、アメリカ大陸は、如何なる狀態を示してゐるだらう。幾ら押へようとしても押へきれない人間の生命力は、はね返りあがつてくるのである。すでに中南米は黑人の波にさらはれてゐる有さまである。西インド諸島のハイチ、ジャマイカは、かれらの掌中に歸してしまつてゐることだ。ブラジルの中部バヒア、ペルナムブーコ、中部アメリカの大西洋岸などは、かれらの樂天地になつてゐる。ベネヅエラ、エクアドル、ペルーの各國にも、黑人の住民はあなどられない力である。メキシコ、アルゼンチン、チリーなどに於ける黑人達は、殆んど、白人、アメリカ・インディアンと混交しあふに至つてゐる。混血黑人は、中部・南部アメリカを通して一千二百萬人に及び、其の時黑人が六百萬人に達してゐる。フランス革命にそゝのかしを受けたハイチ島に於ける黑人政權の確立は、かれら同人種の自覺を促進さした點で甚大なるものであつた。二五四八年に於けるブラジルの奴隷解放と相まつて、白人の特權を放棄せずにはおかれなかつたのである。白人種の植民地として、最も成功したところと世界にほこつてゐるアメリカ合衆國は、內面に於て、人知れない黑き惱みを抱きつゞけてゐる。いな、アメリカ合衆國だけのことだけではなく、白人種の虛榮心と體面は、現實の前に剝ぎとられて行つてゐるのだ。その最も急先鋒をなしてゐるものに黑人種を擧げることが出來るだらう。如何に人種觀のごとき差別をもつて他人種を抑壓し、壓迫することのまちがつてゐたかゞ、現實の問題としてさらけだされてゐるのだ。要するに人種觀のごときは、獲得した利權を背景として、弱き人々をいつまでも抑へつけておかうといふ理論にしか過ぎない。かゝる身體の特徵・性質をもつてして、みづからの特權を要求することは出來ない。世界に於ける民族鬪爭とか「ところづけ」は、そんななまやさしい差別觀で決定せられるところのものではない。現實はもつと、なま〳〵しい實力の爭ひなのであらう。その鬪爭の一武器として、人種問題がとりあげられてゐるのであるならばいさ知らず、もしか個人間にあつて、そんなことが言はれれば、喧嘩の前提であり、國民間にあつては戰爭反抗となつてあらはれるだらう。まことに子供の火遊びにも等しい危險なる、目先の見え透いた見解だと言ふことが出來るだらう。アメリカ合衆國のみならず、ヨーロッパ人はこんなつまらないことで鬪爭をつゞけてゐるのだ。みづからが、ばらまいた罪にくづれつゝあるのだ。近代にはいつてヨーロッパ人が焚きつけてゆく戰爭の背後には、いつも、この人種上の偏見から、みづからの身體に、火をつけてゐるやうな感じがしないこともない。

奴隷解放がなつたと言ひながら、アメリカ合衆國では、今に至るも黑人は色んな點に於て迫害

を蒙りつゝあるのだが、他方から考へればアメリカ合衆國は、分解の危險性をいくらも含んでゐることになる。恐らく今となつては、黑人の協力を得ずしては、なに一つ國策を遂行してゆくことが出來ないだらう。二五八〇年の人口統計によれば、千四十六萬三千百十三人で、人口上からいつても、スエーデン、ノルウエー、デンマークの三國を合せたよりも大きいことである。ことに南部地方に偏在してゐることに注意をしなければならない。なかには、黑人種近來の增殖率の減退をもつて、樂觀的な見解を有するものもあるやうであるが、白人の天下は、アメリカ合衆國から崩壞しつゝあるやうだ。黑人の人口は、白人の出產率をつねに凌駕してゐるものであり、わづかに白人移民の補充に依つて對抗してゐるに過ぎない。みづからの力で增殖しつゝある黑人の出產率は、むしろ恐るべきものだらう。ヘツニツヒ氏の書物によると、イリノイス、ネブラスカ、オハイオ諸州は、こゝ十年間にその數を培加し、ミシガン、ニユーメキシコ州では三倍化し、ニユージャーシー州では五倍化、ニユーヨーク州では三倍化したと恐怖的に、その增數率のみをかゝげてゐる。アメリカ首都、ワシントンの人口の三分の一は黑人であり、アメリカの六大都市、バルチモア、チカゴ、ニユウオルレアンス、ニユーヨーク、フイラデルフイア、ワシントンに十萬以上の同人種が住居を占めてゐる。いくら黑人種が奴隷の後裔であらうと、劣等民族であらうとて、白人種にふさはしい女房となつて同居してゐるとさへいはれるのだ。

こゝで一先づ、アメリカ合衆國でどんな風に增加したかを一瞥しておくことにしよう。アメリカに於て、黑人種の人口が見られるべきものになつたことは、イギリス國がスペインと奴隷配給權を締結して以來のことで、二三七〇年には五萬人、其の後四十年の二四一〇年に二十二萬人、それから二十年經つての二四三〇年には四十六萬二千人に達したのである。奴隷輸入禁止が申し合された二四六〇年頃には、やつと百萬を越えたものであり、それ以後自力で發展して今日に至つたとすれば恐るべきものである。たゞ白人にしては黑人との比率に於て近來增加してゐるのでぬか喜びに落ちついた點も見られるが、決して自力の發展ではないので、落ちついてゐられるやうな狀態ではない。もの好きなのに至つては、二五六〇年から二五八〇年に至る二十年間の增加率を以てするときには、今後六十年經つた二千六百六十年には、アメリカ白人が四億になつた時に、アメリカ黑人は二千萬人にやつと達するだらうと豫想してゐるが、果して事實はどんなことにならう。凡そ、この豫想の裏切られることは、火を見るより明らかなことである。試みに、こゝ百年間のアメリカに於ける白人と黑人の增加對立表を見ておかう。重ねていつておくが、白人はヨーロツパ各地から人口資源を仰いでゐるとき、片一方は獨力で增加をつゞけてゐるのである。

年度	増加數（單位萬）黒人	白人	比率（百分率）黒人	白人	黒人の白人に對する比率
二四六〇—二四八〇	七七・	三五六・	七六・八	八二・七	九三
二四八〇—二五〇〇	一一〇・二	六三二・九	六二・二	八〇・五	七七
二五〇〇—二五二〇	一五六・八	一二七二・七	五四・六	八九・七	六一
二五二〇—二五四〇	二一三・九	一六四八・一	四八・二	六一・二	七九
二五四〇—二五六〇	二二五・三	二三二八・九	三四・二	五三・九	六四
二五六〇—二五八〇	一六二・九	二八〇一・二	一八・四	四一・九	四四

○しかるにこの對立表は、いかにも白人の増加率が優勢なることを示してゐるのは、同種族が如何にも優力な資源と發展性をもつてゐるやうに思はせるものであるが、事實は明らかに「からくり」である。今後アメリカに於ける白人種の人口増加が黒人種に、太刀打ち出來ないものになることは、今にわかるであらう。世界戰爭は白人達の資源を猛烈に消耗しつゝあるのだ。かれらが氣づきはじめてくるころは、すでに取り返しの出來ない狀態に立ち至つてゐることだらうと豫測せられる。これら黒人が今日に至るまでには、奪はれたものを次第に取りかへさねばならないのだ。その點、平時に於ても、アメリカでは人種鬪爭がなされてゐるのだ。自由主義者達は、アメリカが世界人種の融合點、樂天地のごとく、夢にゑがきやすいものであるが、事實はまさしく、まるあべこべなのである。

奴隸として働いてゐた間には、言論・行動の自由を奪はれてゐたことは勿論のことである。三百年間、牛馬のごとく取扱はれたのである。それゆゑ、逃亡、脫走を試みたものは數限りないことだらう。なかには、反抗・動亂をもつて、恐怖をつのらせたことである。英國人所有者に反抗をなし、ユカタン地方に逃亡したものは、今日、キヤリツブ黒人と呼ばれてゐるものであり、また、マローン黒人と呼ばれるものは、ジヤマイカ、ギアナ島に於て、ながらく流血の慘事を以て白人にしぶとく反抗したことで有名である。アメリカに於ても各地に人騷がせのあつたことが報告されてゐる。二三七二年のニューヨークに於ける黒人の陰謀は、全市を恐怖にかりたてた所のものであり、二四九一年ナツト・ターナーに依つて指導された暴動は、五十一名を殺害したところであつた。それどころでなく、南部から逃亡した黒人は、アメリカ・インデイアン部落に入り二四七七年と二四九五年にセミノール事變をひきおこし、指導を與へたものであつた。これがためアメリカ政府は、千萬ドルの費用と二千名の人命を犧牲としなければならなかつた。とかく、他人種に對して恐怖感にをのゝいてゐなければならないところには、こんな理由があるからだ。

ヘイチ島の革命に於ては、白人はみな殺しの運命にあはなければならなかつたほどである。虐待をすればするほど、それに反抗する度は募つてくるものであらうか。

奴隷は所有者によつて、いつでも賣買、ゆづりわたしせられたところであり、借りがあるときは、勝手に捕縛され、所有者の家族に接近、たちいることは許されず、所有權や投票權のないことは勿論のこと、自身の身柄釋放の場合をのぞいては、法廷にたつことも出來なかつた。それにとゞまらず、合法上の婚姻が認められないのだから、女房がとられたとしても致し方がないのである。勿論、商賣取引契約することも許るされず、最もをかしき致りは、智能の啓發がとめられてゐたこと。讀書することは一切禁止されてゐたのである。かゝる狀態のもとに勞働せしめられてゐたのであるから、反抗者がでないではすまなかつたであらう。しかし、奴隷解放宣言に依つて、人權の認められる下準備にとりかゝつていつたのである。解放された奴隷を援助する組織が二四二五年の條令に依つて政府内に設けられ、一部はこの部局に働く者だけ、九百名に達したと言はれる。取扱ふ事項は、第一には賃金の取決め、第二に釋放された者の良き友として法廷に立つこと、第三に土地及び資本の獲得に努めること、第四に學校教育を施こし、第五に社會設備をとゝのへること、第六に罹病、戰傷者の救助などの項目にむけられたのであるが、南部地方に居住する白人から猛烈な反對を受けるに至つた。その中でも、これらの奴隷所有者たちが復讐を恐れたのは最もなことであるが、投票權附與に依つての政治支配力を失ふこと。また經濟力を減殺されるところから、色んな秘密結社をつくつて、最後の手段をえらばんとしたことである。その中で最も名高いものは、ケー・ケー・ケー（ク・クルクス・クラン）の結社であり、奴隷解放戰爭頃、テネシー州プラサキに始まつたものであつた。一時は黑人同情者をのぞく南部白人はすべて、この運動に關係したといはれ、主要目的は黑人をして政治に參與させまいとするのであつて、あくまで白人種の絕對權を確立しようとしたものである。ところが次第に暴力團體化していつて解散されるに至つたものであるが、二四三六年に黑人援助局が瓦解するに立ち至つてゐるから、目的は達したものと言はれえよう。しかし、暴力に訴へてまでも黑人を抑へようとしてゐたところには、卑怯なるものとさへ申される。その現れの一つは、現今にも時たま行はれてゐるリンチである。群集の力を以つて弱き黑人を絞殺するのである。リンチはアメリカ社會を興奮さすところの年中行事であるかも知れない。それはフツトボールの爭覇戰のやうに、人心を湧きたたせるものである。いかに野蠻なる社會であるかと想像がつくところである。二五七二年にリンチ事件は二百三十五件に達してをり、二五四二年から二五八七年に至る三十五年間に、およそ五千名の

ものがリンチを施されたことになつてをり、他人種憎惡がこゝまで立ちいたつては、言ひわけもゆるされないところだらう。かゝる國が世界主義の假面をかぶつて現はれるのだから、お話にならないところである。この黒人種の哀れなる待遇からしても、アメリカ國は、正義の裁きを、當然受けなければならないのである。

かくして、黒人に投票權を奪ひとる法令が南部各州にしかれるやうになつたのである。即ち、つぎのごときミシシツピー、ルイヂアナ、南キャロライナ、北キャロライナ、アラバマ、バージニア諸州では、二五七五年六月二十一日に、大審院から無效を宣言せられるまでつゞいたのであるが、表向きは投票權にあづかれる者として、次のごとき條件をつけたことであつた。その條件と言ふものが、まことに人を喰つてゐるものであり、黒人の弱點をついてゐることなので、その大要をかゝげておくことにする。第一は、讀書の出來ない者は駄目といふのである。今まで教育設備を完備しなかつた黒人にとつていたいところである。これにとゞまらず手ひどい條項は、憲法の條文を了解説明する能力がなけらねば駄目といふのである。どこかでひつかゝろやうな網が張つてあることだ。それから課稅をされる物品で、三百ドル以上のものを所有し、稅をはらつてゐる者であれば良いと言ふのであるが、貧乏にたゝかれた解放されたばかりの者が、かゝる財産をもつてゐるわけがない。投票者は投票稅をはらつてをれば良いわけだが、恐らく、それまでにしてまで投票をしたいとは思はぬだらう。また、一定の職業をもつたものだとか、軍籍にあつたものとか、市民の義務をはたしうる人とか、なかには、曾つて二四二七年までに投票した祖父があれば良いとの條項があるけれども、つゞまるところは、投票權を奪ひとることに眼點がおかれてゐたところである。要するに現在に於ても、旅行・居住・結婚・教育などの點に於て、平等なる扱ひをうけてをらない。ことに、アメリカ合衆國に於て、他人種との結婚を禁止してゐる州が三十州にも及んでゐるのである。いかに不愉快なる國土であるかが思ひやられることである。こんな國が中心となつて、國際主義を唱へだすことからして、いかに矛盾なことだか飲みこまれるだらう。要するにアメリカの唱へる國際友愛の道なるものは、白人種中心の世界をつくりださうといふのであつて、それの音頭取りに拍手を合せるものがあるとすれば、むしろ侮辱を受けてゐることにもならう。人間同志の間で、對等の扱ひを受けず、しかも侮辱されてゐて相手をほめそやすとしたならば、「たいこもち」に過ぎないことになる。オークラホーマとテキサス州の法令では、白人と「アフリカ人の子孫」は結婚出來ないとなつてをり、アラバマ、テネシー州などでは、「黒人の血」を受けたるものはゆるされぬとなつてをり、オレゴン州などでは黒人の血を四分